

泣き虫小僧はミカンが
大好き

なちよす

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

両親が海外出張に行つてしまい、沼津から内浦へ居候する事になった高校1年生の滝沢 涼介（たきざわ りょうすけ）。

しかも居候先は初恋の人の家?!?

涙腺ガバガバな少年とミカンが大好きな少女とその家族がお送りする、ドタバタしみりイチャラブコメディ。

昔伝えられなかった想いを伝える為に、泣き虫小僧は今日も元気に泣いています。

*

A q o u r s もちよろつと出ます。

アニメ設定も要所要所でねじ込みます。

目次

ようこそ十千万へ！	1
一緒に？寝よ？	11
お姉ちゃんは面倒なんです	23
お出かけと書いてデートと読むのでは	39
？（前編）	39
お出かけと書いてデートと読むのでは	50
？（後編）	50
堕天使、邂逅。	60
好きなら好きと言いなさい	73
グッバイ・ブラザー	85
不幸だなんて言わせない（閑話休題）	85
はっぴー ばれんたいん♡	99
口実？何でもいいんです。	121
2泊3日のLove Travel	128
（1日目）	128
2泊3日のLove Travel	145
（2日目）	145
2泊3日のLove Travel	160
（最終日）	160
※シヤチだ！イルカだ！果南ちゃんだ	172
!!	172
長達の導き（尋問）	183
初デートは突然に。	194

少女の涙には気をつけて

206

コワレタモノ

221

※泣き虫だっていいじゃない

235

ふたりミカン

258

ずらっ！ぴぎっ！よはっ！（1／2）

298

生誕祭

ちかたん！　く普通怪獣に花束を??く

316

ようこそ十千万へ!

『やーいやーい!泣き虫小僧のりよーすけ!!』

『ぐすつ?返してよお?僕の宝物なんだよお?。』

『こおおーーらああーー!!』

『げ!アイツが来た!』

『もう!またりよーちゃん泣かせてるでしょ!!それ返してあげなよ!』

『へっ、言われなくてもこんなもんいらねーよ!じゃあーな!』

『ぐすつ?うう?。』

『全くもう!りよーちゃん大丈夫?』

『う、うん?ありがとう?。』

『ああいう時はガツンと言ってやらなきや!?!でも、私があげたそれ持っててくれたんだね。』

『僕の?宝物だから?。』



「ふうー？よし、行くか。」

それを口にしたのは何度目だろう。あまり人の家に長居するなど教わったけどこっちは緊張でそれどころじゃないし、俺は決して不審者じゃない。

名前は滝沢たきざわ 涼介りょうすけ。

4月から沼津の高校に通っている高校1年生。

両親が海外出張というラノベの主人公みたいな展開になってしまい、内浦の知り合いの家へ居候する事になった悲しき男子高校生さ？。

今うろろうしているのは、ここ内浦でも老舗の旅館である『十千万』？の前。好きでこの旅館の前で20分もうろついているわけじゃないけども。

「？よし行くか！行くか？いや、まだもうちよつと心の準備が?!」
「あのか？どちらさん？」

「うわあつ!?ご、ごごごめんなさい!!怪しいものじゃないです!いや怪しかったかもしれないですけど決してそういうんじゃない!」

「まあまあ落ち着きなよ少年。ここらじや見ない顔だけど？沼津の子かい？」

そう聞いてくるのはこの旅館の美人3姉妹の二女、高海たかみ 美渡みとさん。昔っから美渡

ねえって呼んで良くしてもらってたんだ。

「あ、はい? てか、俺です。分かりませんか?」

「ん? まさかお前? 『泣き虫小僧のりよーすけ』か!」

「そです、その涼介ですよ。」

「はっはっは、そっかそっか! いやー背伸びたな!」

『泣き虫小僧のりよーすけ』。

俺がそう言われるのには理由がある。

元々気弱で、よくいじめっ子達から泣かされていた。

その上自分で言うのもなんだけど? 感受性豊かだったらしい。

ドラマや漫画を見ては泣き、動物関連の話聞いては泣き、ゲームに感情移入して泣き? 終いには1年ぶりに会った友人の前ですら泣いてしまう始末。

ちなみに今もその泣き癖は治っていない。

「あれ? でもお前の一人称『僕』じゃなかったか?」

「あっはは? 色々あったんですよ?。」

主に中学の時に一緒に居た厨二病堕天使のせいだけど。

俺と堕天使ともう1人の友人? この3人グループは3年間離れることが無かったからね。

ん？でもあの墮天使って家が沼津なのに同じ高校に居なかったような？まあいつか。

「わんっ!!」

玄関から元気な犬の鳴き声が聞こえる。

あのもふもふ？あの目！間違いない!!

「しいたけ??しいたけか!」

「わふっ!」

「じ、じいだけえ〜！大きくなっただなあ〜!!」

こちらへ走ってくる旅館の愛犬、しいたけ。

久しぶりに会ったつてのに俺のこと覚えててくれるなんて?!顔をペロペロと舐められるけど、そのペロペロが懐かしくも愛おしいペロ!

「しいたけに触れてガチ泣きする奴初めて見たわ?。」

美渡ねえが何か言ってるけどそれどころじゃない!俺は今この1匹の命と感動の再会をしているんだ!!

「美渡ちゃん、お客さん?つて、駄目じゃないこんな可愛い子泣かせちゃ。」

「いや、こいつが勝手に泣いてるだけだぞ?」

「あ、志満ねえ? こんちは!」

「いらつしやい涼ちゃん。大きくなつたわねえ? ♪」

この人は美人3姉妹長女、高海^{たかみ}志満^{しま}さん。

しつかり者だけどたまにトリップするんだよね。

「ねえねえ涼ちゃん! 1回だけでいいから『お姉ちゃん』って呼んでみて?」

「へ?!」

「志満? それはいけない。」

お、お姉ちゃん?。昔の俺だつたら言えたのかもしれないけど結構来るものがある?

しかあし! 1ここでやらねば男が廃る! もう泣き虫りよーすけだなんて言わせない!!

「お、おお? お姉? ちゃん?。」

恥ずかしいいいいいいい!!

「? 美渡ちゃん。旅館の事は任せたわ。私この子の所に居候する。」

「バカ言つてないでさつさと飯の準備するぞー。」

「嫌! 私この子と暮らす!!」

志満ねえに思いつきり抱き着かれる。

全てが柔らかい? 包まれ具合が凄い? 口が裂けても言えないけど。

突如、その和やかムードに終止符を打つ叫び声が響き渡る。

「たっだいまー!!」

彼女が来たからか。

それとも俺の彼女に対する認識がそうだからか、俺の体は一気に強ばる。

そんな緊張をよそに、辺りを爽やかな柑橘系の香りが通り抜けていった? 気がした。

その人の名前は、高海^{たかみ}千歌^{ちか}。

美人3姉妹の末っ子であり幼馴染みだ。俺にとつての3人目の姉のような人。

そして? 初恋の人だ。

「あれ、どういう状況??」

「ちよつとな? 志満がダメになった。」

「ねえ千歌ちゃん。この子、誰だか分かる?」

「え? ん? ん? ん? ん?」

彼女は俺の周りをぐるぐる回って確認しだした。

めつちやいい匂い? 違う! 何考えてるんだ俺は!!

にしても動く度に頭のアホ毛がびよこびよこ動いていてとつても可愛らしい。

動きだけ見ると、この人がとても1つ年上だと思えないな。

「ん!」

「? な、なんででしょうか?」

ずいっと顔を寄せてきた。

あの? これでも思春期男子ですよ? 近過ぎじやない? 千歌ねえだけに。

「駄目だ〜! なんか見た事あるんだけどなあ?。」

「そんなバカ千歌にヒントをやろう。その1、お前の1つ歳下。」

「へ?。」

「ふふ? その2、小学校までは毎日の様に遊んでたわ♪」

「そしてその3? いつまで経っても泣き癖が治らない泣き虫だ。」

千歌ねえが目を丸くして立ち尽くす。

最後の1押しとして、俺は携帯に付いているストラップを彼女の前に差し出した。

大切な貰い物の? ミカンが付いたストラップ。

「それ? 私と同じやつ?。」

「? 俺の宝物だよ。千歌ねえがくれたから。」

「嘘? りよーちゃん?。」

「あつはは! ようやく気づいた?。」

「りよーちゃん? りよーちゃあああん!!」

「久しぶ? りいいいい!!」

手に持っていたスクールバッグを放り投げ、千歌ねえは走りながら飛びついてくる。

かなりの勢いだけど、そこは根性で踏ん張ってみせよう?!

「本当にりよーちゃんだ!急にどうしたの!？」

「親が海外出張つちやつてき。今日からここでお世話になるんだよ。」

「そうなの!?!私何も聞いてないよ!?!」

「だって千歌ちゃんに言わなかったもの♪」

「酷いよ志満ねえ!でもそつかあ?ちよつと見ない間に成長したね!誰か分かんなかったもん!」

「千歌ねえが変わらな過ぎるんだよ。」

「何を〜!これでも大きくなっただぞ〜!」

いつの間にか越してた身長差は、大体15cmくらい変わってた。

俺の胸までしか無いその人は、本当にあの時のままだ。

「でも一丁前に『俺』なんて言うようになっただね。」

「はは、茶化さないでくれよ。千歌ねえも綺麗になったね。」

「へ?／／／」

素っ頓狂な声を出した彼女の顔が赤くなる。

違うな?綺麗は綺麗だけどこれは?。

「前言撤回。可愛くなった!」

「?むう／＼／あんまりからかうんじゃ無いの!／／／」

ビシッ!と頭を軽く小突かれる。

本当の事を言っただけなのになあ?。すると彼女は抱き着いてた手を離し、静かに俺に言葉をかけてくれた。

「?おかえり、りよーちゃん♪これからよろしくね!」

昔見た大好きな人の笑顔。

その言葉を言ってもらえたことがたまらなく嬉しい。

あ、やば?涙腺が?。

「?ぐすつ?千歌ねえ?!!」

「ええ!?!ちよ、何で泣いてるの〜!」

「だつでぎ〜?!」

「もう?せつかく成長したのに中身そのままじゃん?おいで?」

彼女に優しく頭を掴まれ、そのまま抱き締められる。

必然的に頭はこの人の胸へ?胸?。

悲しき男の性よ、頼む。今だけは大人しくしていてくれ?。

「なあ志満。あれは感動で泣いてるのか、千歌の胸が強烈なのかどつちだと思う?」

「どつちもじゃないかしら?」

滝沢 涼介、これから十千万でお世話になります。
それと1つ年上のお姉さんは、やっぱり大きくなりました。

一緒に?・寝よ?

久しぶりの再会も束の間、俺を含めた4人は夕食の準備に取り掛かる。

今はシーズンオフだから、お客さんもそんな多くないって聞いてたけど何だか豪勢だなあ?。

何やら美渡ねえと千歌ねえはコソコソ話してるし?はっ!これはもしか俺の働きぶりが足りないってことではっ!?

「し、志満ねえ!他になんか手伝えることある!」

「あら、それじゃあそこにある食器類とか運んでもらえるかしら?」

「分かったよ姉ちゃん!」

「はふん?!」

「また無自覚キラーが出たぞ。」

「志満ねえに対してはりよーちゃん無敵だよね。」

「え?何のこと?」

1人悶える長女さん。俺なんかしたっけ??

「ほら、ボケーツとしてないでこれも持ってつてくれ。」

「了解です。」

「りよーちゃん、私も手伝うよ！」

「ありがとう千歌ねえ。」

「おーおー、涼介が来た途端随分働くねえ末っ子？」

「な、なにさ！／＼／＼いいじゃん別につ！！／＼／＼」

「千歌ちゃんつたらすっかりお姉ちゃんね〜♪」

「志満ねえもからかわないでよ！／＼／＼行こつ、りよーちゃん！」

「あ、うん。」

「？普段は働いてないのかな。」

「今失礼な事考えてたでしょ？」

「え!?ま、まつさかー?。」

「嘘！ニヤついてるからすぐ分かるもん！／＼／＼」

そう言っつてほっぺたを膨らます彼女。

恐るべし破壊力。

抑える?ニヤけるな?好きな人のプンプン顔じゃないか?ただの致命傷だ。

「?可愛い。」

「むー?っつていい!!」

「あだっ!？」

強烈なデコピンが飛んでくるう!!

「全く? 油断も隙もないんだから。そういう事はあんまりポンポン言うものじゃないの! ほら行こう!」

「あ、ちよ、待ってよ千歌ねえー!」

踵を返し、前を歩く彼女の耳が赤く見える。

デコピンが俺の色覚にまで影響を及ぼしているのか?。

てかまた可愛いって口に出してたんじゃん俺! 馬鹿っ!

「あ、そうだ。りよーちゃんちよつとここで待ってて?」

「へ?」

「いーよ、って言うまで入っちゃダメだからね! 絶対だよ!!」

それだけ言って彼女は、バタバタと扉の向こうへ消えていった。ここって確か? 食卓がある部屋だよな?

そして待たされること1分程度。

「りよーちゃん、良いよー!!」

「はーい。一体何が?。」

扉を開けた瞬間、俺を待っていたのはクラッカーの音と目の前の豪勢な食事達。

俺達が皆で準備してた夕食だ。

「これって?？」

「えへへ?りよーちゃんの歓迎パーティーだよ!」

「ま、簡単に悪いけどやっておこうって話になってさ。」

「うふふ?お姉ちゃん張り切っちゃった♪」

「じ、じゃあ?さつき千歌ねえと美渡ねえが話してたのって?。」

「りよーちゃんを後から連れてこいって言われてね。」

「バレたんじゃないかってこっちは冷や冷やしたぞ?。」

それじゃあ?働きぶりが足りないってのは、俺の早とちり??

はは、なんだよ?最初っから歓迎されてたんだ?志満ねえに。美渡ねえに。千歌ねえ

に。

こんな?こんなのさ?!

「こんなの泣くに決まってるじゃんくく!!」

「あつはは!絶対泣くと思ってたわ!!」

「涼君、本当可愛いわね♪」

「りよーちゃん泣きすぎだよお〜!」

「絶対泣くって思ってたの!?!確信犯なの!?!」

「なんだよ、嬉しくないのか?このこの?!!」

「嬉じいっですっ!!」

皆で食卓を囲んで?笑いながら食べた今日の夕食は、とっても美味くてほんのちよっぴりしょっぱかった。



「ふーっ?めっちゃ食ってしまった?。」

用意してもらってた空き部屋のベッドに寝転がりながら、今日の出来事を思い出す。

久しぶりに会った高海家の人達は、優しく俺を出迎えてくれた。

もちろん千歌ねえも。

なんというか、凄い成長してた?色々。

ミカンが付いたストラップを眺め、隣の部屋に居る彼女を思い出す。

「?好きだな、やっぱ。」

「なにがー?」

「どわああああああっ?!?」

本気で焦った! 心臓止まるかと思った!!

叫び声をあげながら飛び起きる。

「もー、あんまり大声出すと美渡ねえに怒られるよ?」

「いやいやいやいや! 千歌ねえいつの間ここに?!?」

「ずっとノックしてたし、入るよって言ったのに返事無いから入ってきちゃった!」

「あ、ああ、そうなの??それはごめん。」

「良いよ良いよ! で、何が好きなの?」

「やっぱ聞かれてた! でも今回は好きってしか言っていないからギリセーフか??」

「いや? 寧ろこれがチャンスだろ。」

「言うならきつと今しかないし、先延ばしにし続けたってどうにもならないんだ。」

「ずっと抱いてきた俺の気持ちをも? 貴方が好きですと、ただその一言が言えれば!」

「それは? その? ち!」

「ち?」

「言え? 言うんだ俺!」

「ち? 千歌ねえ!?! がくれたこのストラップが好きだなあーって! あ、あはははは!!」

もう嫌! へタレ! 涼介の意気地無し!!

「やっぱり可愛いよねそのミカン!美渡ねえは分かってないんだよ。」

「ははは?所でこんな時間にどうしたの?」

「あ、そうそう!私りよーちゃんの連絡先知らないから交換しようと思って!」

「そういえばそうだったね。じゃあはい、これが俺の連絡先だよ。」

「ありがと!これでりよーちゃんにいつでも連絡できるよ♪」

「まあそんなに連絡することあるか分からないけどね。」

「安心してよ、めっちゃスタンプ連打するから!」

「それはそれで困る!」

「ふふ?冗談はさておき、そろそろ寝よつか!」

「あれ、もうそんな時間?じゃあおやすみ、千歌ねえ。」

「うん!おやすみ!!」

そう言って彼女は立ち上がるが、歩き出す方向がおかしい。だって千歌ねえが歩いているのは、俺のベッドがある方向だ。

「ち、千歌ねえ?ドアはあっちだよ?」

「あつはは、りよーちゃんつてばそれくらい私でも知ってるよお。」

「えと?じゃあ何故俺のベッドに入ろうとしてるんですよ?」

「一緒に寝る以外に理由があるの?」

一緒に？寝る？一緒に寝る!?

そのタンクトップ一枚にしか見えない千歌ねえと一緒に寝たら、俺は理性との戦争が始まってしまおう!?

「待った待った待った!ちよ、ちよつと落ち着こう千歌ねえ!」

「りよーちゃんが落ち着いた方が良いんじゃない?。」

「すーはー?すーはー?。確認なんだけど?い、一緒に寝るっていうのは同じ部屋でつて事だよな?。1つの布団で2人つてことじゃないよね?。」

「このベッドで2人で寝るんだよ?。4月なんだから床とかで寝たら風邪ひいちゃうでしよ。あ、もしかしてりよーちゃん?照れてる?。」

「?そりゃあ?。まあ?。」

照れてる以上に色々とヤバイんです。

千歌ねえ、距離を詰めるのは少し待ってください。お風呂上がりのめっちゃいい匂いがするんです。

見えないように思いつき自分の内腿をつねる。じやなきやポーカーフェイスを保てない?!

「ほらほら、早く寝よーよー。子供の頃よく寝てたでしよ?。」

「んんんんん?!!で、でも?!!」

「一緒に?寝よ?」

?無理です。

これ以上は内腿がねじ切れます。

結局押し負けて、今俺は片思いの人と一緒に布団で寝てますよ。

この人は自分の涙目と上目遣いのコンボが、いかに強力なものかをそろそろ自覚した方がいと思うんだ。

嬉しさ半分、理性を残そうと必死になってるのが半分。

有り得ないだろうけど、こんな時に抱きつかれでもされたらと思うと?。

「んむう?りよーちやあん?。zzzz?」

??何でもない。

寝言と共に思いっきり抱き着かれる。

玄関先でのデジャヴを感じるなあ。

ってかそんな薄着なのに高1の男子をハグするってなかなか危機感というものが足りないんじゃないですか??貴方の事好きな思春期男子を抱きしめる時は、もうちよつと気をつけてもらわないと俺が死んでしまいますよ。

?でもそれって、千歌ねえがまだ俺の事『そういう目』で見てくれてないってことだよな。

顔を上げると、そこにはすやすやと眠っている彼女。

「千歌ねえ？ 貴方にとって俺は、ただの弟？ ですか？」

なんて？ この人が寝てる時にしか言えない自分が酷く惨めだな。

もう俺の理性との戦いは続きそうに無い？。

だつてスベスベモチモチだから。

何がとは言わないけどスベモチなんだよ。

顔に当たる柔らかさが半端じゃないけどさ？ この人下着着けてる？ のか？

止めよう！ この件に関してはこれ以上考えると理性がどうか男の性がどうかという問題じゃなくなってしまう！ エッチだと言われてもいいからちゃんともう一枚着てもらおう？。

戦い続けてたら眠くなってきた？ 落ち着くつていうのか？ 安心？ なのか？。

「？ おやすみ、千歌ねえ。」

はつきりした答えなんて出なかったけど、俺の意識はそのまま夢の中へ落ちていった。

◇

「やつと寝た?もう、りよーちゃん考え事してて全然寝てくれないから本当に寝るところだったよ!寝顔写メ頂きまーす?よし、OK!」

予め用意していた携帯の無音カメラでパシヤリ?。

うんうん、バツチリ写ってる!

にしてもあんなに小さくって泣き虫だったりよーちゃんが見違えるほど成長してて、私ビックリしちゃった。

「ふふつ?泣き虫なのは変わってないけど?そこもりよーちゃんの良い所だと思うよ。だからなのかな??君の事放っておけなくなっちゃうのは。りよーちゃんは私にとって?。」

『貴方にとって俺は、ただの弟?ですか?』

「つ?あれ?今何か胸が?きゅつ、てなった気がする。うくん?まあいつか!おやすみ、

りよーちゃん♪
「

お姉ちゃんは面倒なんです

「I 発殴らせろ！」

同じクラスの友人から告げられる一言。

こいつの名前は『佐久良さくら 宗弥そうや』。

アイドルオタクであり俺と同じように堕天使の影響を受けた1人。

そして親友だ。

その親友から何故こんな一言を投げられたのかというと、全てはこいつの質問から始まった。

「よ！居候先の旅館はどうだ涼介？」

「めっちゃ楽しいよ。懐かしくて何度泣いた事か？」

「お前本当にそこだけは変わってないよな？。お前の好きな先輩だつて居るんだろ？」

「まあ？でもあの危機感が無くてさ。昨日もいきなり一緒に寝ようつて言い出してどれだけ焦ったことか？まあ寝たんだけど。」

「は？」

「ん？」

「寝たのか？1つ年上の女子高生と??」

「ああ。」

「歯を食いしばれえ！」

そして今に至る。

まあ？俺の言い方も悪かったな。

「取り敢えず落ち着けて。」

「お前は？こつち側だと思ってたのに?!」

「別に何かあった訳じゃ？いや、あるか。」

「デメエっ!!」

おかしな奴だが悪いやつじゃない。結構気配りできるし俺よかモテても全然おかしくない性格と容姿。

中身が極度のドルオタな事を除けば。

「宗弥だつてすぐに春が来るさ?。」

「そんな遠い目で見られてもよお?まあいいか。ところで、お前浦の星女学院つて知ってるよな?。」

「ああ、内浦にある女子高だろ?。」

「そうだ。最近そこでスクールアイドルやってる子達がいるんだつてよ!3人だけで活

動してまだ正式な部にはなっていないらしいんだけど、今週の日曜日にライブがあるから一緒に行くこうぜ！」

「別にいいけど？でも誰がやるか分かんないぞ？」

「あー？何か駅前に行った時に赤い髪の綺麗な人と凄い元気なヨーソロー！って言うてる子と？」

ヨーソロー？もしかして曜さん？

あの人もスクールアイドルだったのか。昔は俺と同じくらい泣いてた記憶があるんだけどな？。

「後はあれだ、アホ毛が立ってる子。2人からは千歌ちゃん、って呼ばれてたような？」

「は？」

千歌ねえ？千歌ねえがスクールアイドル!?全然聞いてないぞ!?

何で2年生の彼女がこの時期に？。

「どうした？いきなり唸りだして。」

「怒らないで聞いてくれ？その千歌って人？居候先の人だ。」

「？てことはあれか。涼介君は現役スクールアイドルで素敵なお姉さんと昨日一緒に寝たってことか？」

「？ああ、そうなるな。」

「水臭いじゃないか、それならそうと言ってくれよなくあつはつはつは!! よーし喧嘩だ。」

それからは質問攻めにあつたよ? その上購買でパンまで奢らされるといふ謎のとぼつちり。こいつのスイッチが入るとろくなことが無い?。

何とか1日を終えた俺は、バスで十数万へ帰ってきた。

千歌ねえにスクールアイドルのことを聞かないといけないしね。

「ただいま?」

「お願い美渡ねえ! 会社の人200人くらい連れてきてさ?。」

「?はあ。」

「満員にしないと廃部になっちゃうんだよお!!」

「面倒臭い。てか、それで私が連れてつたつてお前達の為にならないだろバカ千歌。」

帰ってきて最初に目に付いたのはそんな姉妹のやり取り。美渡ねえはマジックで千歌ねえのオデコに『バカチカ』と書いている。

「お、涼介おかえり。」

「た、ただいま? 何の話?」

「あ、りよーちゃん! 今大変なんだよ! 私達がスクールアイドル部を作る為に、体育館満員にしなくちゃいけないくて?。」

「ああ？もしかして週末の？」

「知ってるの!？」

「友達と行く予定だったからさ。頑張ってるね、千歌ねえ。」

「ありがとうおくりよーちゃん?!」

「千歌ちゃん、そろそろ歌詞作らないと梨子ちゃんが怒る? ってそっちの子は?」

「曜ちゃん、りよーちゃんだよ!」

「えっ?! 涼介君!？」

「この人が渡辺 曜さん。千歌ねえと幼馴染みで、俺も小さい頃によく一緒になって遊んでいた。何か? 凄い活発系運動少女みたいになってる。」

「久しぶり涼介君! そっかあ? 話は聞いてたけど、印象変わりすぎてて分かんなかったよー。」

「曜さんも変わりましたね。昔は結構泣いてるイメージがあつたので?。」

「何を?! 泣き虫小僧がそれを言うかくこの!」

「あつはは、すみませんすみません!」

「千歌ちゃん? 曜ちゃん?」

「ひっ?! り、梨子ちゃん?!」

2階から降りてきたその人は、初めて見る人だ。

この2人よりもどこか大人びた印象で、このへんの人じゃないんだろうなっていうのはすぐ分かった。

何かめっちゃ怒ってるけど。

「ずっと戻ってこないと思つたら？何してるの？」

「ええつと？感動の再会？」

「もう？時間あんまり無いんだから、早く進めないと大変だよ??初めまして。私はこの2人と同じクラスの桜内 梨子です。」

「あ、初めまして。十千万に居候している滝沢 涼介です。」

「じゃあ貴方が千歌ちゃんの言つてた子ね？これからよろしくお願いします。」

「いえいえ、こちらこそ2人をお願いします！」

「ふふ、涼介君は千歌ちゃん達よりしつかり者かもね？ほら、早く作業の続きするよ。」

『はい！』

スクールアイドル、か。

結局どうして始めたのか、聞くことが出来なかった。部屋には彼女達を作ったポスターと、それを眺める美渡ねえだけが居る。

「？美渡ねえも行くんでしょ？」

「面倒臭いからやだよ。それに飽きつぱい千歌の事だしすぐ諦めるだろうさ。まあ気が

向いたら行くかもね。」

「美渡ねえ?。」

チラシだけ持つて美渡ねえは自分の部屋へと戻って行ってしまった。

「もう?美渡ちゃんつてばどうしてあんな言い方しか出来ないのかしらねえ?。」

「志満ねえ?。あの2人つてよく喧嘩するの?。」

「ふふつ、それはもう昔つからね。お互い変なところで頑固というか素直じゃないとか?。でもね?私はまだ学生だった頃の話なんだけど?。」



『ただいま。』

『あ!志満ねえだ!おかえり志満ねえ!!』

『ただいま千歌ちゃん。美渡ちゃんとお留守番出来た?』

『うん!あのね、美渡ねえがiiiiっばい遊んでくれたの!お絵かきしたりキャッチボールやったりしたんだよ!』

『あらあら?ありがとうね美渡ちゃん♪』

『?べつつにー。あくこれで楽になれるわ〜。』



「あの美渡ねえが?」

「口であんな事言ってるけどね?本当は、私やお母さんよりも千歌ちゃんの事大好きなんじゃないかしら。それに、美渡ちゃんの宝物って何だか知ってる?」

「え?いや、聞いたことないけど?。」

「ふふつ、それはね?」



「こんな田舎でスクールアイドルねえ?。」

千歌が持ってきたポスターには可愛らしく描かれたあの3人の絵とライブの詳細が書かれていた。

スクールアイドルがどういふものかは少しは知ってる。それに涼介が来るまで、飯の度にその話聞かされてたしな。

「それより、ここの振り付けはこうした方が大きく見えるんじゃない?」

「じゃあここで私が後ろに下がって?。」

隣の部屋から3人の会話が聞こえてくる。

襖を開けてこっそり覗くと、ノートに纏めたフォーメーションの確認をしていた。いっつになく真剣な妹の顔。

アイツのあんな顔見たの、いつぶりだっけ?。

何か始めても長続きなんかしなかった。それが今じゃあんなに楽しそうに1つの事に熱中している。

襖を閉じて、机の上に飾ってある1枚の絵を手を取った。

千歌が子供の頃、初めてくれた私の似顔絵。

曲がった字で書かれた『ありがとう』の文字。

『美渡ねえ!』

『ん?どした?』

『あのね？これ、描いたからあげる?!』

『？これ、私か？』

『うん。その？遊んでくれてありがとう？千歌ね？美渡ねえ大好き!』

「はあ？。私も甘ちゃんだよなあ。？会社に貼らせてもらうか。あくめんどくさ。」
そう口にしても嬉しそうに笑っちゃってる自分が、多分一番面倒臭いわな。



志満ねえから全てを聞いた俺は号泣していた。それはもうボロボロに泣いてたさ。

そして？今日がライブ当日の日曜日。天気は最悪だ。

雨は土砂降りだし雷は鳴るし?。

俺は宗弥と浦女の体育館で集合して、開始時間まで適当に喋ってた。チラホラと人はいるが、到底満員には程遠い。

でもまだ開始まで時間はある？それまでに来てくれれば?!

「皆さんこんにちは！」

「?え?」

突如ステージにスポットライトが当たり、3人の少女が照らされる。

おかしい?開始時間までまだ時間があるはずなのに?!

「私達は、浦の星女学院スクールアイドル?A q o u r sです!」

「お、おい?開始時間と違わないか?」

「ああ、早すぎる!千歌ねえ何で?。」

分からないことだらけだ。何かそうならざるを得ない状況なのか?単純に開始時間を間違えたか?。

ライブはそのまま進んでいったが、心無しか皆の顔が浮かない気がする。

そして、事件は起きた。

近くで雷の音がなっと思ったたら、学校内の電気も音響も全て消えた。

停電だ。

流石に会場内がざわつき始める。満員にならなかつた上に、このままだと停電のせいでライブそのものが中止になりかねない状況だ。

「何だよこれ?皆が、千歌ねえが何したってんだよ?!」

「涼介?。」

3人共あんなに必死になって、初めての事ばかりだったのに本気で取り組んできた。なのにこんな？。

高海家に来てから初めて流した悔し涙が頬を伝う。どうすることも出来ない自分が悔しい。

ステージの上で歌うあの人に言葉をかけたい。

泣きそうな顔をしたあの人を抱き締めてあげたい。

そんな事をして、現状が変わるわけじゃないのは分かっている？。

それでも?!

「バカ千歌ー!!」

突然体育館の扉が開き、声が響いた。

「み、美渡? ねえ?」

「アンタ開始時間間違えたでしょ!!」

さつきまで真つ暗だった体育館に電気がついた。

目の前に広がっていたのは、観客で埋まった体育館。文字通り、満員だった。

「おわ！なんだなんだ!? 非常電源がついたのか?!

「すつご? いつの間にこんな人が?!

「つたく、世話かけやがって。」

「美渡ねえ、やつぱり来てくれたんだ!」

「? 大雨でたまたま休みになったから来ただけだよ。」

そつぽを向いてそう呟く優しいお姉さん。

素直じゃないと言つてた志満ねえの言葉を思い出して、ちよつとだけおかしくなつてくる。

「あはは? そつか! そういう事にしておくよ。」

「何泣きながら笑つてんのさ、泣き虫小僧。」

ライブは無事終了。

約束通り体育館をお客さんで埋めた千歌ねえ達3人は、浦の星女学院の正式なスクールアイドル部『Aqours』としてこれから活動していくことが決まった。

ライブ終了後、宗弥と別れた俺は千歌ねえ達のところへ急いでいた。なんて言葉をかけようかなんてその場任せでいい。

たった一言伝えられた。

「?どーしたのりよーちゃん、ちよつと顔赤いよ?」

「や、その?あつついな〜ってね!こここの場所温度高いんじゃないかな〜!」

「涼介君?もしかして?。」

「ああく?頑張つてね涼介君!千歌ちゃんは手強いよ?」

「はは?頑張ります?。」

「え?何?私強いの?」

クエスチョンマークだらけのこの人は置いといて、曜さんと梨子さんにはバレてるらしい。

ええい、ままよ!

「と、取り敢えず美渡ねえが車で送ってくれるみたいなので、そろそろ帰りましょう!千歌ねえもお疲れ様!さ、帰ろう?」

彼女の手を握って、美渡ねえの元へ歩き出す。

相変わらず小さい手だなあ。

でも暖かい。

「あ?。」

「ん?どうかした?」

「?ううん、何でもない!行こつ、りよーちゃん♪」

「ああ！」

手を繋いだまま走り出す彼女の後を、俺も追いかける。

「？曜ちゃんも幼馴染みとして今の千歌ちゃんをどう思う？」

「あれは難しいですね？多分千歌ちゃんは戸惑ってるんじゃないかな？弟みたいな存在だった涼介君もすっかり男の子に成長してるから。」

「そっか？ねえ、ちよつとだけ賭けてみない？」

「え？何に？」

「千歌ちゃんと涼介君がどうなるか、ちよつと耳貸して？」

「あく？。ははっ！私も同じ答えの場合は賭けになるのかな？」

そんなやり取りが裏で行われていたことを俺が知ったのは、まだ少しだけ先の話だった。

お出かけと書いてデートと読むのでは? (前編)

あのライブから1週間。

休日の朝ほど気持ちのいいものは無い。

学校へ行くことも考えなくていいし今日は何して遊ぼうか、なーんてこともゆつくり考えられる。

そんな素晴らしい朝を俺はベッドの上で迎えている? 筈だったんだけどなあ?。

「? 何で俺床で寝てんだろ。」

原因なんか一つしかない。昨日いきなり一緒に寝ようと言い出した美少女のせいだ。

2時間おきに俺を布団から叩き落とすとか、どんだけ寝相悪いんだ千歌ねえ!!

取り敢えず起き上がり、布団の上で爆睡をかましてる千歌ねえの様子を見る。

「すぴー? すぴー? んやはは?。」

「緩いなあ? どんな夢見て笑ってんだろ。」

「りよーちゃあん? それは河童じゃなくてえ? 美渡ねえだよお? ZZZZ」

「ホントにどんな夢見てんの!?!」

相変わらず不思議な人だなこの人は。

ほっぺを人差し指でツンツンしてみる。

「?うにやあ?んく?ふへへ?。」

「嫌がつてるのか喜んでるのか?うりうり。」

「2人ともー!そろそろご飯よー!」

「はーい!今行くよ志満ねえー!!」

「かぶ。」

まあ何にせよ、今日は休日だ。今日のごことは今日考えれば良いさ。はっはっは!

?かぶ?

さつきまでほっぺたをつついてた人差し指が暖かい。

心なしか湿っている気もしてきたぞ?

ゆっくり視線をベッドの上に戻し、すぐさま思考を停止した。

そこに人差し指は無かったんだ。

だつて千歌ねえが啜えてたから?!

「?ん?んんんんんっ?!?ちよ、千歌ねえっ?!」

「んく?ZZZZ」

「起きて千歌ねえ!せめて口開けてくれえ!」

朝食の匂いにつられてかぶりつくとか、この人動物か!

それに変に動かれるとタンクトップから素敵なミカンが? って何考えてんだ俺!!

「ん〜? りよーちゃん何〜? 朝から元気だ? ね?。」

ようやく起きた彼女の口から人差し指が解放された。

指先と彼女の唇を結ぶ唾液の糸が、今起きたことを物語っている。

「お、おはよう?。」

「な? な、ななななな?! // //」

2人して固まってしまう。

これから俺の身に起こるであろう事は2つある。

真つ赤になった彼女に罵られるか、ビンタが飛んでくるかだ。

そして俯いた彼女が、静かに口を開く。

「りよーちゃん?。」

「は、はい?!」

「えつと? ご、ゴメン? 私寝ぼけちゃってたみたいで? あ、でもでも全然美味しかったっていうか? あれ、違、何言ってるんだろ私?! // // か、顔洗ってくるから先にご飯食べて!! // //」

それだけ言い残して走り去っていった。

予想に反してアタフタした千歌ねえだったけど、ちゃんと自分から指を食べたと分かっていたんだなあ。

そんな光景をさ？目の前で見せられて正気でいられる程俺は強くない。

もちろん美渡ねえが来るまで気絶してたよ。

下に降りて行くと、丁度千歌ねえと鉢合わせした。

「あ?。」

「?おはようりよーちゃん／＼／＼」

「お、なんだこの空気?」

「あらあら、若いっていいわね♪」

何やら盛大に勘違いしていらつしやる御二方に事情を説明する。

「あつはつはつは!バツカでえ!!」

「笑い事じゃないよ!!本当に恥ずかしかつたんだからね!／＼／＼」

「それより2時間おきに布団から落とす方が問題だと思っけど?。」

「ははは?。」

いつも通りの朝食を済ませ、部屋に戻ってくる。朝からハプニングがあつたもののひとまず落ち着いた。

今日は予定も特に無いし完全にフリーな日だ。さてさて何をしようかな?

「りよーちゃん、入っていい？」

「あ、うん。どうぞー。」

「えへへ？お邪魔しまーす。」

私服に着替えた千歌ねえがドアからひよっこり出てくる。

一々動きが可愛すぎる事案が発生している。そろそろ俺は死ぬんじゃないだろうか？

「どうしたの？千歌ねえ。」

「りよーちゃんって今日は予定とかある？」

「いや、何も考えてないからー日中空いてるよ。」

「じゃあ千歌とお出かけしようよ！再会してからバタバタしちゃって一緒にお出かけもできなかつたし？」

「俺でよければいつでもお相手しましょう！」

「ほんと!？」

目を輝かせながらずっと、と近づいてくる千歌ねえ。

まるで犬が尻尾を振るみたいに、頭のアホ毛がぴよこぴよこ動いている。

？生きてるのか？このアホ毛。

「ほんとほんと。じゃあ俺も着替えちゃうから待ってて。」

「分かった!」

目をキラキラさせながら俺の部屋で座る千歌ねえ。

? いや、あの? 着替えたいんだけど?。

「ち、千歌ねえ?」

「なにー??」

「そこに居られたら着替えられないなー? なんて。」

「あつ? ご、ごめん! 部屋で待つてるね!! / /」

朝と同じように、彼女は走り去っていった。

今日は? 本当に死ぬかもしれないな。

ちやちやつと着替えて彼女の部屋に呼びに行くと、肩から鞆をかけていつでも行けるよ、という視線をこちらへ向けてくれた。しかしその? なんだ? ショルダーバッグな彼女の胸がいつも以上に強調されているんだよ。

かつて宗弥から『パイ斯拉ッシュ』と呼ばれる女の子の最強武器について聞いたことがある。俺は今それを身をもって実感しているんだ? ありがとう。

「りよーちゃんどうしたの?」

「な、何でもない?!」

正面なんか向けるわけない。絶対ニヤけてる自信がある?。

彼女の頭を撫でながら必死にニヤケを悟られまいとそつぽを向く。

「えへへ? あ! 子供扱いしてるでしょー!!」

「そんな事ないよ?」

「むゝ? じゃあなんでそつぽ向いてるのー?」

「いや? その? 千歌ねえの私服が、可愛かったから?。」

「へ?」

なんとか顔を整えて彼女の方を見ると、何やらキョトンとしている? と思っただら何やら難しい顔をしだした。

「こんな顔見たことないかも。あ?!

「千歌ねえ、もしかしてトイレ行きたいの?」

「そんなわけないでしょ馬鹿りよーちゃん!! / /」

「痛ったあ!」

結構な勢いで頭を叩かれた。

俺は学んだよ。女子にストレートに言うのはデリカシーが無いということ。

まあ普通に考えたら分かるよな?。

「ところで今日はどこに行くの?」

「んゝ? 何も考えてないよ!」

「すっごい良い笑顔？じゃあちよつと服とか見に行ってもいいかな？」

「良いよー！りよーちゃんもそういうお年頃だもんね〜♪女の子の目を気にしちゃうんでしょ？」

「いや？だつて折角千歌ねえと一緒に出掛けるんだから、負けないようにちよつとでもカッコよくいたいじゃん。」

何も間違つたことは言つてないよな？千歌ねえの隣歩くんだもん、ある程度キリツとしてないとまた弟として見られちゃうかもだし！

「そっか？ん〜??」

「ど、どうしたの？呻き出して?。」

「ううん、何でもないよ！さあお出かけお出かけ〜♪」

今日も1日理性と戦う日が始まりそうだ?。



今日はりよーちゃんとお出かけ。

今は沼津の町を歩いてりよーちゃんの洋服を見に行く所。

なんだけど? 朝から私の調子がなんか狂ってるんだよね?。

そりゃあ寝惚けて指を食べちゃったのは私が悪いんだけどさ? // //

「あ、千歌ねえ。自転車来てるよ。」

「え? わつ!」

りよーちゃんに手を引つ張られて軽く抱き締められる。

「まだだ? 来て初日に一緒に寝てから、たまに胸がきゅつと締め付けられる感じがして?。」

「こんな感じになったの、多分初めてだよ?。なんだろう、これ。」

「千歌ねえ、大丈夫? なんか元氣無いけど?。」

「え? まつさかく! 元氣有り余っちゃってるよ!!」

りよーちゃんに心配かけるわけにはいかないよね! 後で曜ちゃんと梨子ちゃんに聞いてみよう!

それから私達は1件の服屋に来た。りよーちゃん慣れてないみたいで結構挙動不審になってる? そういう所は昔と同じで可愛いかも♪

「ねえねえりよーちゃん! これとかどう!? 絶対似合うと思うよ!」

「ミカン柄のシャツ? あっはは! 千歌ねえ本当にミカンが好きだね?」

「だってミカンだよ! 最早果物の王様と言っても過言ではないんだよ!」

「そこまでなの？じゃあちよつと着てみようかな！」

そう言つて試着室に入つたりよーちゃん。

うん、こうしてると何とも無い。やっぱり気のせいなのかな？

「じゃつじやーん！どう千歌ねえ？似合つてる？」

「あつははは！似合つてる似合つてる！！じゃあ次はね〜？。」

2時間くらいいたのかな？

久しぶりに2人で出掛けたから、いっぱい時間過ごしちゃった！まだまだ楽しむぞ〜
!!



千歌ねえの様子がおかしい。

楽しんでるように見えるけど、たまに考え込んだりボケーンツとしてる事がある？だ、大丈夫かな？もしかして俺と一緒にだどあんまり面白くないとかじゃないよね!?

やつば？いきなり自信なくなつてきたぞ？。

「千歌ねえ、そろそろお昼だけど何か食べたいのある？」

「うーん? あ、じゃあ駅前の喫茶店行こうよ! 新しく出来たらしくてすっごいお洒落だつて梨子ちゃんが言つてた!」

「了解! じゃあのんびり行こうか。」

何はともあれ、まずは昼飯を食べよう。

そしたら午後から頑張ればいいさ!

? けど俺はこの時知らなかった。

午後からの時間が、俺の心臓にも理性にも悪い半日になろうとは?!

お出かけと書いてデートと読むのでは？（後編）

駅前のお喫茶店に来た俺達は、取り敢えずランチセットとデザートとミカンパフェを頼む事にした。

「そういうば？女の子とこうやって出掛けるのって初めてだな？。」

「りよーちゃんどうしたの？考え事？」

「いや？この年になって女の子と出掛けたこと無いなあってさ。」

「じゃあじゃあ、私で練習しておきなよ！」

練習って言われても俺は千歌ねえしか見てないんだけどね？。

「こちらランチセットになりまーす♪」

「あ、ありがとうございます。」

「うわあ！りよーちゃんの方も美味しそう〜！」

「はは、じゃあー口どうぞ？」

「良いの!?!じゃあ私のもあげるねー！」

そう言って彼女は俺の方にパンケーキを刺したフォークを差し出してくる。

え？これってどういう事？まさか？まさか?!!

「はい、りよーちゃん！あーん♪」

「ぐふうっ!!」

なんて事だ？まさかリア充の嗜み、『食事中のあーん♡』を目の前でやられるとは?!

いや、でもこのまま食べると間接キスになるんじゃないか？この人は気にしない人なのか!?
はたまた本当に気づいてないのか!?

「りよーちゃん？食べないの?？」

「いや、その？良いの?」

「駄目だったらあげたりしないよ。」

宗弥、後で俺を思いつきり殴つてもらつても構わん。据え膳食わぬは男の恥だ!

「頂きます!!?美味い。」

「えっへへ♡じゃありよーちゃんのもちよーだい!!」

「えと?どうぞ?」

「ぶー!りよーちゃんは食べさせてくれないの?」

なんだこの可愛い生物。

「あ、あくん?」

「はむっ!ん♪美味しい♪」

「それは良かったです?。」

こんなカップルみたいなイベントを経験する事になるなんて？神様、俺心から貴方に感謝します？。

ん？カップルみたいな？？

今更気づいたけどこれってもしかして？世間一般で言うところのデートってやつじゃ？！？

この人は気にしてないのかな？いや、多分こんなに気にしてるの俺だけなんだろうけどさ。

「ち、千歌ねえ？。」

「ん？なに〜？」

「その、さ？千歌ねえはあんまり気にしない人？か、間接？キス？とか。」

「へ〜？」

聞き方つてもんがあるだろ俺の馬鹿！！

「間接キス？？あ／／／」

千歌ねえの顔がみるみるゆでダコのように赤くなっていく。暫く俺達はお互いの顔を見ることも出来ずじまいだった。

本当に気づいてなかったんだなこの人？。

「こちらデザートのミカンパフェになりま〜す♪」

「ありがとうございますっ!!」

「ひゃっ!あ、はい!どういたしまして!」

テンパリ過ぎて店員さんに食いつき気味になってしまったが、このタイミングでデザートを持ってきてくれた店員さん。ありがとう。

「デ、デザート来たから食べよっか!あははは!!」

「そ、そうだね!いや〜美味しそうだなあ〜!あっはは!!」

何とかやりきった?生き延びたぞ俺は。

大分HPとかその他諸々削られたけどな!

「あれ、涼介じゃん。」

「そ、宗弥?!」

「いやいや、そんな全力で嫌そうな顔しなくても?ってあれ?そっちの人って千歌さん?」

「あれ?私の事知ってるの?」

「もっちゃん!俺、涼介の友達の佐久良 宗弥って言います。この間のライブ、感動しました!」

「ほんと!?!見に来てくれてありがとうと〜!!」

千歌ねえが宗弥の手を握ってブンブンしてる。くっ?なんだこの敗北感?。

「応援してるんで頑張ってください!!おっと、涼介君や。」

「何だよ?」

宗弥のやつがこっそり耳打ちしてくる。

「そんなに拗ねんなって。別に取ったりするわけじゃないからさ。」

「?別に拗ねてないし。」

「あつはは!悪かったって!!それじゃあ俺はもう行くから、後はデート楽しみなよ!じゃあな!」

む?俺そんな拗ねてたか?いや、確かにちよつと悔しかったけどさ?。

意外と独占欲強いのかな、俺って?。

えーい、アイツめ!後で購買の焼きそばパン奢らせてやる!

「行こっか、千歌ねえ。」

再び彼女の手を握って次の場所へ歩き出した。



宗弥君?だっけ?友達と会ってからりよーちゃんがちよつと元気なくなっちゃった。どうしたんだろ?ちよつとムスツとしてる気がする。

「りよーちゃん?」

「うん?」

「?ううん、何でもない。」

「あはは、何それ。」

無理して笑ってるわけじゃないと思うけど?。

「あ、千歌ちゃん!涼介君!!ヨソロー!」

「曜ちゃん!!どうしたの?」

「梨子ちゃんと衣装の買い出しに来てたんだ♪2人はデートですかい?」

「や、その?そういうのじゃない、かなー?」

「にしし、涼介君照れてる?」

「曜さん、勘弁してくださいよ?。」

楽しそうに会話してる2人。りよーちゃん、調子戻ったみたいで良かった——。

「っ?!」

何、今の?今までのきゅって締め付けられる感じじゃない。

痛かった?。

「千々歌ちゃん!!」

「?え?」

「大丈夫？ 凄い難しい顔してたけど?？」

「う、うん！ 大丈夫大丈夫!!」

「なら？ 良いんだけど。じゃあまた学校でね!!」

「うん！ バイバイ曜ちゃん！」

どうしちゃったんだろ私の体？ りよーちゃんが帰ってきてから、ずっとこんな感じだよ?。



「千歌ねえ、海？ 行こ?？」

「うん、良いよ。」

明らかに変だ。

曜さんと話してる時の様子も、今日一日たまに考え事してるのも?。問い詰めるわけじゃない。ただ聞いておきたかった。

俺と居て楽しかったのかどうか。

今日だって一人で拗ねてしまったりテンパったり？ 俺は、この人の隣を歩いてもいいのだろうか?。

それから旅館近くの海へとやって来た。もう夕日が沈み始める時間帯。砂浜には俺達2人しか居ない。

「?1つだけ聞いていい?」

「どうしたの?」

「今日1日、俺なんかと居て楽しかった?」

「え?なんで?」

「千歌ねえ?たまに難しい顔してた。それに、俺も途中で拗ねちゃってたっていうか?自分のことばっかでき?。だから?俺と居ても、つまんなかっただろうなって。」

やば?自分で言ってる泣きそうになってきたな。

「りよーちゃん?そりやつ!!」

「わ。ぶつ!!」

いきなり顔に海水をかけられた。

「な、何を?」

「りよーちゃんはさ、優しすぎるっていうか?気にしすぎなんだよ。今日は私がりよーちゃんと出かけたかったから誘っていっぱい遊んで?。楽しくないわけないよ!」

「千歌ねえ?。」

「だから、本当は謝らなきゃいけないのは私なんだ。折角遊んでたのに色々と考え事し

ちやつて?ごめんね、りよーちゃん。」

「そんな?千歌ねえが謝ることなんて?!」

「てやつ!!」

「わぷつ!!」

「良いの!りよーちゃんはそのまま!だからね?また一緒に遊んだりお出かけしたりしてくれる?」

「?もちろん。俺でよければいつでも!けどその前に?おりやつ!!」

「冷たっ!!」

「へっへーん。仕返し♪」

「やったなあ〜!」

そこからは、日が暮れるまで海で遊びまくった。久しぶりの2人の外出は、色々あったけど?こんな日があつたつて悪くないと思う。

まあビショビショになつて帰つたから2人で美渡ねえに怒られたけど?。

流石に濡れたままだと風邪も引くだろうから、夕食の前にお風呂に入らせてもらった。

「いや〜いい湯だなあ?。生き返る〜?。」

「ね〜?旅館が家つてこういう所本当に良いよねえ〜?。」

「全くだよ? は?」

「おかしい。なんで俺以外の声ができるんだ? よりによつて千歌ねえの声が? だってそれだと今この場にあの人が居るってことに?。」

「また考え事してるでしょ?」

「いやいやいやいや!! な、何でここにいるのさ千歌ねえ!!」

「一緒にお風呂入ろうと思つて!」

「だと思つた!! いや、もう子供の時と違うから流石にこれは?!!」

「大丈夫だよ私水着だし!」

「俺水着じゃないからね!」

「今日一日一緒に過ごして分かつた。この人の中ではまだ俺は弟分だから、素でこういう事をしてくるんだ!」

「こっちはもう色々と限界が近いのに!!」

「まあまあお背中流しましょう♪」

「え、ちよ待つて待つて誰かHeeeeeeeeeelp!!」

「そこからの事は? まあ察してくれ?。」

墮天使、邂逅。

小鳥のさええずりが聞こえてくる清々しい朝。

俺が十千万に来てから早いもので1ヶ月が経とうとしている。ようやくここでの暮らしとか旅館の手伝いにも慣れてきた感じだ。あ、後千歌ねえからの不意打ちにも。

正直この間の風呂事件があったから、ちよつとやそつとじゃ驚かない自信だってある。

「志満ねえ、おはよう。」

「おはよう涼君。」

「美渡ねえは今日も仕事？」

「ええ、会社の方が忙しいんですって。悲しい顔して出ていったわよ？」

「あはは、そうなんだ？」

高校1年生にはまだ分からない気苦労ですなあ。

「ん〜？おはよう〜？。」

「おはよう千歌ねえ。まだ寝ぼけてる？」

「大丈夫？大丈夫？ZZZZ？。」

「立ちながら寝てるし?。」

「ごめんください。」

裏口の方から声がある。

向こうからつてことは宿泊客じゃ無いな? 声からして千歌ねえぐらいの女の子の声だけど、なんか聞いたことあるような?。

「あつ? 善子ちゃんだ。」

「善? 子?!!」

「善子ちゃん、入つて来なよー!」

「だからヨハネだつてば! あ? お邪魔します?。え?」

「は?」

部屋に入つてきたその子は? キリツとしたツリ目に黒髪ロングで、頭に特徴的なシニョンを携えていた。

俺はその子を知っている。

忘れるはずが無い? 今の俺を作り上げた張本人なのだから。

「善子? 津島善子か!?!」

「な? 何でアンタがここに居んのよ涼介?!」

「それはこちらの台詞だぞ墮天使ヨハネ! 何故千歌ねえの事を知っている!?!」

「フフツ？私とこの者は同じ組織に属する同系等の存在なのよ。まあ、下僕であるリトルデーモンの貴方には、難しい話でしょうけどね？。えっ、てかアンタ弟なの？」

相変わらずいきなり素に戻るんだな？。

俺もつい中学の頃のノリで話しちまったけど、高海家の皆さんがポカーンとしていらっしやる。

「あなた達、それで会話成り立ってるのね？。」

「てか知り合いだったの!？」

「弟子よ。不本意ながら。」

「師匠だよ。こんなんでも。」

「何よこの泣き虫小僧!」

「んだとこの美少女!」

「悪口下手か!」

くっ？こんなんでも世話になってるから強く言えないんだよ？。

「まあつまり？俺の一人称が変わったり色々と中学の頃世話になった奴って事で。それと善子。俺は本当の弟じゃなくて幼馴染なんだ。今はこの家で居候させてもらってる。」

「へえ〜？ラノベ主人公みたいな事やってんのね。」

「全くだよ?。」

あれ?でも待てよ?

「そーいや2人の接点って何かあったっけ?全然思い浮かばないんだけど?。」

「善子ちゃんがAqoursの1人だからだよ♪」

「Aqours??善子が?じ、じゃあ最近ホームページに上がったた新メンバーって?!」

「私。」

「ジーザス?。」

「?何よ?」

「いや、千歌ねえなら想像つくんだけど善子がやるなんて意外だったなあって?。」

「い、色々あったの!／／／」

「私達も部員が増えて、今6人でやってるんだよ!今度は東京でライブなの!!」

「え、マジで!」

聞くとところによると、6人まで部員の増えたAqoursは、東京で行われるスクールアイドルの大会に招待されたらしい。あのファーストライブから本当に大きくなってきたんだな?。

「でも平日だから、りよーちゃん呼べないんだよね?。」

「マジか?じゃあまた次の機会に呼んでくれないかな?」

「もっちろん！ぜーったい来てね！♪」

「ああ。善子のことも見に行くぞ☆」

「うっわ気持ち悪？。」

「んだとこのアイドル!!」

「悪口下手か！」

「じゃあ千歌はこれから2度寝するから後は2人でよろしくね？Z Z Z」

「え、よろしくって何を？寝るの早っ!？」

「アンタの幼馴染みも変わった人よね？。」

否定出来ないのが何とも？。

とにかく今日は千歌ねえも行動不能っぽいし、久しぶりにあいつを呼んで3人で過ごすか。

「じゃあ志満ねえ、ちよつと出かけてくるよ。」

「はい。遅くなる前に帰ってきてね。」

こうして十千万を後にした俺たち2人は、宗弥との待ち合わせ場所に向かった。

沼津港大型水門びゅうお。夜には綺麗なイルミネーションが彩られ、時期によってはカップルも訪れたりするリア充スポットの一つだぞ☆

「よ、宗弥。」

「やっと到着かよ涼介? って、え?」

「? 久しぶりね、リトルデーモン2号。」

「よ、よよよ善子!?! え、なんで!?! 俺何も聞いてないけど!?!」

「言ってなかったしな。」

前回敗北感を味わったからちよつとした仕返しの意味を込めたドツキリだ。ふつ、今回は俺の勝ちだろう?。」

「そんなに驚くこと?」

「いやビックリするだろうさ? なんで涼介と?」

「よく聞け宗弥? 善子、A q o u r s なんだ。」

「ほ?」

なんだその素っ頓狂な声。

「え、じゃあ最近A q o u r s に入った新メンバーの1年生3人って?。」

「私がその1人。」

「ジーザス?。」

「朝全く同じリアクション見たわよ?。」

「いや、うん。ありだと思っよ全然。」

「せめて目を見て言いなさいよ!」

「はっはっは！それじゃありトルデーモン失格だぞ宗弥？」

「アンタ人の事言えないからね泣き虫小僧。」

「んだとこのシニヨン!!」

「悪口下手か！」

久しぶりの中学時代のノリが炸裂しまくる。

クソ？楽しいじゃないか?!

元々気弱だった俺達がこんな性格になったのは確かにこいつの影響だけど、それに関しては別に嫌ってるわけじゃないしむしろ感謝してるくらいだ。宗弥も俺も。

そんな小つ恥ずかしいこと口が裂けても言わないけどな。

「そっかあ？善子がA q o u r sの一員か?。」

「何よ?。」

「よし、俺今日から善子神推しになるわ！」

「?べ、別に好きにすればいいんじゃない?。」

「顔、ニヤけてるぞヨハネ様?。」

「うっさい泣き虫リトルデーモン!!」

ふっ、いつまでもやられっぱなしの俺と思うなよ?

「まあ涼介は千歌さんが好きだからな。」

「おまつ!!」

「へく?千歌さんの事がねえ?」

宗弥のヤツ一言多いんだっつもの!!

見ろこの墮天使の微笑みを。絶対よからぬ事を企んでる顔だぞあれ!

「?手伝つてあげよつか?」

「何が見返りだ?」

「そんなもんないわよ。可愛いリトルデーモンの面倒を見るのも、主たる私の役目? まあ強いて言うなら駅前のレストランベリーチョコカップケーキね。」

「見返りあるじゃねえか!!」

しかも駅前のもつてことは、朝から並ぶハメになるんだな?くつ?受けるべきか?

「いい話じゃん。乗つとけよ涼介。」

「?不本意ながらご教授願いますヨハネ様。」

「ふつ、宜しい?。じゃあ千歌さんに渡すプレゼント買いに行くわよ。」

「くつそく?後で覚えてろよ!!」

再びリトルデーモンと化して歩き出した俺はこの屈辱を忘れないだろう?いつかりトルデーモンの反逆を見せてやるぞ墮天使ヨハネ!!

「??.」

「どした？善子。」

「ん？何が？」

「？いや、何でもない。」

「ふふつ、宗弥も変なやつね。」

◇

やって来たのはおしやれな雑貨屋さん。

正直善子がこの手の店を知ってるのは意外だった。てつきり黒魔術ショップとか厨二グッズの店へ連れていかれるものばかりだと？。

「アンタ失礼な事考えてない？」

「？まさか。」

「まあいいけど。千歌さんなんか欲しいものとか口にしてた？」

「ん？何も言ってなかったな。」

「シンプルに身近に持ち歩けるのでいいんじゃないか？ストラップとか！」

「それも考えたけど、昔もらってるからなく？。」

流石に同じ物をまた渡しても使い道に困るだろうし？。

「あ？あれとか。」

「ん？テディベアか？」

目に入ったのはオレンジ色のテディベア。あまり大きすぎず値段もそんなにかからないやつだ。

これだったら部屋に飾れるんじゃないだろうか。

「お前変なところで乙女だな。」

「可愛いものには目が無いんだ。」

「アンタはまるで可愛くないけどね。」

「んだとこの善子！」

「悪口下手か！」

「漫才してる場合かよ？お、じゃあこっちの青いやつお前のでいいんじゃないか？」

「しかし？恥ずかしながら俺の財産じゃ？。」

「ばーか、そんなぐらいい出してやるよ！」

「私も割り勘してあげるわ。リトルデーモンへの労いよ。」

「そんなの悪いって!!」

「今更気になる間柄かよ。」

「そうそう。逆にこういう時は素直に従っておくもんよ。」

なんて奴らだ？散々色んなこと言ってたのに俺の為にこんな？。

「ふだりども〜?。」

「おわあっ?! 待て待て待て、店の中で泣き出すんじゃない!!」

「私達まで変な目で見られるじゃない!」

「元々変だろ〜!!」

『言つたな泣き虫小僧!!』

2人の好意を受け無事プレゼントを購入。死ぬほど嬉しい? 持つべきものは友達なあ?!

それから夕方までゲーセンなりカラオケなり遊びまくった俺達は、いい時間というこ
とで解散することに。

「本当にありがとな、2人とも?。」

「はは、良いってことよ!」

「渡す時に泣きじゃくるんじゃないわよ?」

「流石にそんなヘマはしないさ? 多分。」

「おい。」

「善子、明日東京行くんだよな?」

「ええ?。」

「その? 頑張れよ。行けなくなつて、こっちから応援してつから。」

「もちろん俺もな！」

「?任せなさい!東京の人間達もこのヨハネのリトルデーモンにしてあげるんだから!」

そうして俺達は笑いながら解散した。またこうやって集まる事を約束して。

◇

「き、緊張してきた?。」

今俺がいるのは千歌ねえの部屋の前。

明日東京に行く準備をしていると、何故か俺も緊張している?。

大丈夫だよな?迷惑がられたりしないよな?

「ええい考えても無駄だ!男は度胸、いざい!」

部屋をノックすると返事がある。千歌ねえの了承を得て部屋に入ると、キャリーバッグだったり制服だったり衣装だったり?普段のゆるゆる系女子からは考えられない荷物まとめられていた。

「りよーちゃん、どうしたの?」

「その?さ。明日東京行くんでしょ?」

「うん？ちよつと緊張するけど、皆と精一杯やってくるよ！」

「俺も応援してるよ。それで？これ、あげる。」

「??わあっ！可愛い♡」

「今日、宗弥と善子に選ぶの手伝ってもらったんだ。いつも貰ってばかりだったから、たまにはなんかプレゼントしようと思つて?。」

「ありがとうりよーちゃん!!大事にするね！」

「ちなみに？俺とお揃い？だったりして。」

自分からお揃いって言うの、結構恥ずかしいな?。

「ホントだ！えへへ?りよーちゃんとお揃いだあ♪」

「可愛すぎる。」

「へ?何か言つた?」

「いいえ、気のせいでございます。明日頑張つてね、千歌ねえ！」

「うん！」

ちよつとだけ？彼女に近づけたかな？

確証はないけど、目の前ではしゃぐ彼女を見てそう思つてしまう自分が居た。

好きなら好きと言いなさい

『ごめんねりよーちゃん？今は、一人にして欲しい、かな？。』

東京から帰ってきた千歌ねえの顔は見たことも無いぐらい暗い表情だった。

何があったか、どう言葉をかけたらいいか分からなくて？励まそうとしたって上手く言えなかった俺に千歌ねえが言った言葉。

一人にして欲しい。

生まれて初めて、千歌ねえ自身から『突き放された』。

それだけで、何も出来なかった自分が？許せなかった。

せめて何があったのか知りたくて、俺は善子に電話をかけることに。

『もしもし？』

「あ、もしもし。善子、東京ライブお疲れ様。ちよつと聞きたいことがあるんだけど？いいか？」

『ええ。』

「帰ってきてから千歌ねえの様子が変なんだけど？向こうで何があったんだ？」

『そう？何も聞いてないのね。』

「ああ。今は一人にして欲しいって？」

『無理もないわ。あんな結果だもの？。』

「結果？」

『今回のライブは、会場からの投票制だったのよ。それでAqoursの順位は30位。30組中30位よ。』

「それって最下位って事じゃ？得票は!？」

『0よ。』

「?は？」

『0。私達に票を入れた人は？一人も居なかった。』

何だそれ？おかしいだろ。だって皆あんなに頑張ってた？ライブのPVだって感動するくらいの出来だった！

それが、0??

『言っておくけど、誰もミスなんてしてなかったわよ。私達は今出せる全力を出してこの結果だった?。そもそのレベルが違ったのよ。』

「けど? けどき?!」

『こればかりは、どう言っただって変わらないの。』

それから何を話したかは、余り覚えていない。

ただ一言。

善子が最後に言っただ言葉だけがずっと繰り返されていた。

『あの人はね? 1度も泣いてないのよ。』

それから2日経ち、千歌ねえの様子はまだ変わっていない。家の中で会っても元氣の無いまま? 学校へ行き、ご飯を食べて部屋へ戻る。そのサイクルだ。

「? 何やってんだろ? うな、俺。」

あの人に少しでも近づきたくて、沢山貰ったものを少しでも返そうとして自分を変えてきた。

それなのにな? ここに居るのは大好きな人の傍に居ることさえ出来ない、臆病で泣き虫なあの頃の俺だ。

「よ、涼介。こんな所で何してんだ？」

「宗弥か。ちよつと考え事をな。」

「A q o u r s の事だろ？」

「やっぱり分かるか？」

「当然。善子も全然元氣無いし、やっぱり東京ライブが響いたんだらうな？」

「？何かに夢中になつて、初めて挫折を食らうつてどんな氣持ちなんだらうな。」

「さあ、な。でもそれを俺達が理解しようとしたつて無理な話だ。それは彼女達だけの悔しさなんだから。」

「そういう？もんなのかな？。」

今の俺に何が出来るだらうか。

どれだけ考えても、頭の中はモヤモヤするばかり。

何か掴もうと手を伸ばしても、その手に掴めるのは空ばかり。

それから段々と千歌ねえとの会話も減つてきていた。あのじゃれてくる姿を見たのも、随分昔に感じる？。

家に帰り、美渡ねえに様子を聞いた。

「美渡ねえ、千歌ねえは？」

「まだダメだな？あいつが人生で初めて味わう本氣の挫折だ。千歌なりに色々考えてる

んだらうさ。リーダーとして?。」

次の日の早朝? 携帯の着信音で目を覚ました俺は、私服に着替えて朝の内浦を歩いていた。

着信画面に表示された名前は? 『津島 善子』。

電話で話したい事があると云われ、俺は待ち合わせ場所に足を運ぶ。

町の中はまだ眠っている。早朝のランニングで走る人や、漁に出る漁師の人がチラホラと見えるぐらいだ。

待ち合わせ場所が近づいた時、見知った姿が目に入る。

「よ。元気か?」

「あるように見える?」

「?ごめん。」

「アンタに謝られると調子狂うからそのままでもいいわよ。?ねえ、ちよつと歩かない?」
静かな町を2人で歩く。

そういうえばコイツと2人きりで歩くなんて、初めてかもな。

「千歌さん、まだ調子戻ってないの?」

「ああ?ここ数日ずつと変わってない?。」

「そう?。曜さんと梨子さんも色々話してるけど、上の空みたいよ。」

「そつか？俺なんか、何か出来ることがあるのかな？。千歌ねえの為に変わろうって思いながら、今だってただ見てる事しか出来ない？馬鹿で、ちっぽけで、泣き虫で?!結局何も変わっちゃいない?。」

「涼介?。」

自分が許せなかった。自分が大嫌いだった。口先だけならなんとも言つて、いざ目の前にすると何も出来やしない?泣き虫小僧のままだ。

「?それでも、私は救われた。」

善子が静かに口を開く。

「ねえ、覚えてる?あんたが私の所に来て弟子入りさせてくれって言ったこと。あの時はびつくりしたわ?コイツは何を言ってるんだらうって。けどそれから宗弥が来て3人で遊ぶ仲になつて?毎日が楽しかった。かけがえの無い私の宝物よ。だつてそうじゃなかつたら、きつと私は独りぼっちだったもの。あんたが最初に言葉を掛けてくれた?涼介が、私を助けてくれたの。」

「?過大評価だよ。俺は?今だつて、何も?!」

「涼介、こっつち向きなさい。」

「え?」

その瞬間、頬に激しい痛みが走った。

何が起きたか分からない。

だけど?。

「いい加減にしなさいよ!!」

善子の方を向くと、彼女は泣いていた。

目から零れ落ちる涙が、1つ?また1つと地面へ落ちていく。

「いつまでそうやってウジウジしてんのよ?!あの人を支えられるのは、もうあんたしかないの!!千歌さんの為に変わったんでしょ?!貰ったものを返したいんでしょ?!あの人があんたの『初恋』だって言うなら、ちゃんと気持ち伝えなさいよ!ここまできて言わないなんて、私が許さないから!!何が出来るかなんて考える前に、どうしたいか考えなさい!あんたがしたい事は?1番伝えたい事は何!?!」

ハッキリ怒りを含んだ口調で、善子が俺に言葉をぶつける。

そうだ??俺、決めたじゃないか?。

沢山の幸せを貰ったあの日々から、必ず恩返ししようって。

今度こそ言うんだってそう決めたのは、他でもない俺じゃないか?!

「?あの人の傍に居たい。あの人にお礼が言いたい。好きだって伝えたい?!」

「だったら?こんな所でイジケてる場合じゃないでしょ?」

「ああ?今更気づくなんて馬鹿だな、俺。」

「あんたが馬鹿なのは昔からよ。」

「はは、それもそうか?にしてもお前、グーかよ?。」

「ウジウジしてる方が悪い。」

でもおかげで目が覚めた。俺がすべき事。

俺がしたい事。

全部思い出したよ。

「確かにな?ありがとう。」

「いいから早く行きなさい。この期に及んで言わないとかだったらマジで嫌うからね?」

「もう大丈夫だ!行ってくる!!」

何が出来るかじゃなくて何がしたいか?それをあいつは思い出させてくれた。俺の為に泣いて、叱ってくれた。

あいつが背中を押してくれた分、もう迷いなんて無い！
俺は全力で駆け出した。大好きなあの人の元へ向かう為に。

「??頑張りなさい、『私の初恋』」
リトルデーモン

◇

携帯で時間を確認する。

十千万に着く頃には、もう6時になっていた。

いつも通りならそろそろ千歌ねえが起きるはずだ。

はずなんだけど？何やらおかしい。あの人の部屋の窓は空いているのに、何の物音も
しない。居ないのか？

代わりに聞こえるのは、砂浜を波がさざめく音だけだ。

どこだ？どこにいます？

辺りをざっと見渡すと、丁度十千万の正面の砂浜に、その人は居た。

海に入って立ち尽くしている。

もうなりふり構ってられなかった。震えた足を意地でも前に進め、名前を叫ぶ。

「千歌ねえっ!!」

「?りよーちゃん。」

彼女は既に海に腰まで使っていた。全身はずぶ濡れで、ひよつとしたら一回海に入つたのかもしれない。

「どうしたのさ、こんな所で。」

「何かが見えるかなって思ったんだ? 私が憧れた輝き? でも見えなかった。」

「そっか? スクールアイドル、続けるの?」

「続けるよ。だってまだ0だもん!これが私達のスタートなんだから、頑張らないといけないよ。」

そう言葉が続ける彼女の横顔は、必死に何かを我慢しているみたいで、弱々しくて? すぐにでも壊れてしまうんじゃないかって気さえした。

「皆もまた練習しようって言うてくれてるし、私ももう大丈夫?」

「千歌ねえ。」

彼女の頭を優しく掴み、胸元へ抱き寄せる。

「りよー? ちゃん?」

「俺が泣いてる時、辛かった時? 千歌ねえはいつもこうしてくれたよね。」

「?..うん。」

「もう、泣いていいんだよ。」

「っ?で、でも?私、リーダー?だから?私が泣いちゃったら、みんなも落ち込むでしよ?」

「なんでそんなに我慢するんだよ?なんでそこまで耐えようとするんだよ?!千歌ねえ!人で背負う必要なんて無いんだ。曜さんもいる?梨子さんもいる!A q o u r sの皆だっている!俺も、ずっと傍にいるよ。」

「うっ?ひっく?。」

「悔しいんですよ?」

「悔しい?悔しいよお?!あれだけ皆で頑張って、一生懸命皆に良い歌を届けようってやったのに?..なのになにに0だったんだよ!!」

悲痛な叫びも、胸を濡らしていく涙も?ずっと外に出るのを待っていたかのように吐き出される。

俺は泣いちゃいけない。この涙も、悔しさも?全部この人のものだ。だから全部受け止める。

そう決めたから。

暫くそうして、千歌ねえが大人しくなった。

目を真つ赤に腫らして?それでも、『もう大丈夫』と笑ってくれるこの人が愛おしい。空元気なんかじゃない、本当の笑顔。

「千歌ねえ、話したいことがあるんだ。」

「なに?」

「俺は、ずっと千歌ねえに守られてきた。沢山の思い出も貰った。だから、今度は俺が守ってあげたい。沢山の思い出を作っていききたい。1番近くで一緒に笑って、1番近くで一緒に泣きたい。」

まだ幼かったあの日から。

何も言えなかったあの日から。

ずっと思い続けてきた、たった1つの気持ち。

「千歌ねえ。俺は、貴方の事が大好きです。俺と付き合ってください!!」

グッバイ・ブラザー

Aqoursが東京ライブを終えて1週間。

夏の日差しが段々と強くなってきて、制服も衣替えのシーズンが到来した。

まあ放課後だから大分涼しくなっているんだが、ぶっちゃけどうでもいい？。俺の耳には、部活動で汗を流す青春少年・少女達の掛け声が入っては出ていつてる。

今日の授業だとか、HRの連絡だとか、全く覚えてない。

「おーい、帰るぞー涼介。」

「あー?。」

「ダメだこりや。」

「へえつくしゆい!!」

家に帰るのも億劫だ?そりや言ったのは俺だし後悔はしてないさ。
けど?けどさ?!

『ごめんなさい?!!』

「あんなにハッキリ断られるとは？思わなかったよなあ？」



『告白を断ったあつ?!』

「うん。」

新たに目標が出来た私達は、またいつもの日常へと戻ってきた。今日は練習が休みだったから、放課後に曜ちゃんと梨子ちゃんの3人で駄べってただけど、その中で話題がりよーちゃんの事になったからこの間の告白の事を2人に教えて?。

「なななな、なんで!?!」

「返答次第では私も怒るわ。」

「ええっ!?!」

質問攻めにされつつ梨子ちゃんに怒られそう?!

「一応理由聞いていい??!」

「?あのさ?私の中でりよーちゃんは、ずーつと一緒に遊んできた仲で?泣き虫だったりよーちゃんは千歌の弟みたいだね?ほら、私末っ子だから?こんな私でも頼りにしてくれるりよーちゃんが放っておけなかったんだ。」

暫く離れちゃったけど、久しぶりにあった今でもりよーちゃんは変わってなかった。あの頃のまま、泣き虫で可愛くて？私の大事な『弟』。

「だから告白された時、嬉しかったけど？違うのかなって思ってた。」

「いいの？」

「え？」

「千歌ちゃんは何？本当にそれでいいの？」

梨子ちゃんにじつと見つめられる。

まるで悲しんでるような？『何かに気付いてほしそうな』顔で私の事を黙って見ている。

「私は涼介君と会ったばかりだからあの子のこと良く分からないんだけど？でも、あの子は千歌ちゃんの支えになりたいんじゃない？」

「私の??？」

「ずっと近くで、誰よりも千歌ちゃんに寄り添って一緒に歩いていきたいって？。そういう事だと思うな。」

「??？」

「もう一回考えてみて。本当に涼介君は、千歌ちゃんにとって『弟みたいな存在』なの？」
りよーちゃんが帰ってきて嬉しかった。

また一緒にお出かけしたり、一緒に遊べるんだって思った。

『俺は、貴方の事が大好きです。』

「?ねえ、曜ちゃん。梨子ちゃん。私ね、りよーちゃんが帰ってきてからなんか変なんだ。手を握られたり、ぎゅってされると胸がきゅってなって苦しくなるっていうか?ん、なんて言えばいいんだろ?」

「?そつか。梨子ちゃん、ちよつといい?」

「何??クスツ、曜ちゃんも悪い事考えるのね♪」

「え??なにに?何の話??」

「千歌ちゃん!涼介君の告白断ったってことは?今涼介君はフリーです!」

「うん。」

「じゃあ私が涼介君に告白、してもいいかな?」

「?え?」

「久しぶりに会ったらちよつとカツコよかったしき!私も遊んでた仲だからチャンスあるかな?って!」

「ふふつ、確かに初めて見たけどいい子そうだったもんね♪すぐに恋人が出来ちゃうか

も。」

「それは？そう、だね？。」

『これ、あげる。』

『俺とお揃い？だったり。』

『千歌ねえく?!』

『俺も、ずっと傍にいるよ。』

「っ?!」

胸が痛い。どうして？なんでりよーちゃんの事思い出すとこんなに痛くなるんだろ
う？

曜ちゃんとりよーちゃんが楽しそうに話してるのを見た時もそうだった。

りよーちゃんが手を握ってくれた時と違う。

優しく抱きしめてくれた時とも違う。

痛い?？」

「？ねえ、千歌ちゃん。どうしてそんな苦しそうな顔してるの？」

「？痛い。胸が、痛い?？」

「どうしてだと思おう?」

「分かんない? 分かんないよ?。曜ちゃんが告白するなら応援しなきゃって思うのに、そう思えば思うほど胸が痛くて?！」

「教えてあげる。千歌ちゃん、曜ちゃんに嫉妬してるのよ。」

「嫉妬?!!」

「涼介君が離れていってしまいうんじゃないか、自分を見てくれなくなるんじゃないか? 自分より他の子といるほうが楽しいんじゃないかって。そのぐらい千歌ちゃんの中で、彼の存在って大きくなってるのよ。その痛みは、そんな不安や自分の気持ちを押し殺してくる痛みなんだから。」

私の気持ち?!

断ってしまった罪悪感? 違う。

離れてしまう寂しさ? 違う。

「千歌ちゃん、涼介君が帰ってきてずっと一緒に居たいって思った?」

「? うん。」

「心がポカポカしたり、辛くなったりしたことはあった?」

「うん。」

「手を繋いだりお出かけしたり?。」

「ずーっと笑っていたって、そう感じた?。」

「うん? うん!。」

「それが、『恋をする』って事なんじゃないかな?。」

「ずっと彼は待っていてくれた。」

「勇気を出して、それを伝えてくれた。」

「多分、私なんかよりも長い時間こんな苦しみを感じながら?それでも隣で笑ってくれた。」

「りよーちゃん、ごめんね?。」

「私馬鹿だから全然気づけなかった?。」

「自分の本当の気持ち。」

「私は、りよーちゃんが大好きなんだ。」

「私、行ってくる!りよーちゃんの所へ!。」

「そのいきだよ千歌ちゃん!。」

「私達も応援してるからね♪」

「あ?でも曜ちゃん告白するって?。」

「冗談だよ?」

「?え?」

「これが一番手っ取り早いかなーって☆」

「自分の気持ちちが分かって良かったわね、千歌ちゃん♪」

「ええええええええええっ?!?!?」

「はい、この話はおしまい!千歌ちゃん、行ってらっしゃーい♪」

「ちよっ、もう!2人とも後でミカンケーキ奢りだからねー!!」

でもありがとう曜ちゃん、梨子ちゃん。

私、伝えるよ!りよーちゃんに!!

私は走り出した?全速力で!

りよーちゃんの隣に、ずっとずっと一緒にいたいから!

「?千歌ちゃんってさ。」

「うん。」

「ああいう所、本当可愛いよね。」

「分かる。」

「ところで梨子ちゃん凄いい恋愛詳しかったけど、経験あるの？」

「本よ。」

「今度見てみたいからどんな本か？」

「本よ。」

「あ、はい。」



「ゲエツホゲツホ?! 最悪だ。」

先に帰ると言つて宗弥は帰つた為、俺は1人で十千万への道のりを歩いていった。

どうやら風邪を引いたらしい。そりゃあ振られてから30分も海の中で立ち尽くしてたらそうなるわな?。

やば? 眩暈がしてきた。

あそこに帰つたとして、俺は千歌ねえにどんな顔で会えばいいんだよ。

「とにかく寝たいな? 非常に不味い?。もういつその事道路で寝てやろうか?。」

「りよーちゃんっ!」

聞き慣れた声が俺を呼ぶ。

つい先日振られたばっかでも、どうやら俺はまだ片思いをこじらせてるらしい?あの人の声で幻聴まで聞こえ出すとは?。

「りよーちゃんつてば!!」

「ん〜??うわあっ!?!千歌ねえ、何でここに!?!」

「ずっと呼んでたよ!」

幻聴じゃなかったのか?大声出したせいで余計クラクラする?。

「どうしたの?」

「いや、何でもない?千歌ねえこそここで何してるの?」

「あのね?この間の事、謝ろうと思つて?。」

この間?ああ、自滅した告白の件か?。

「気にしなくて良いよ。俺がこじらせてただけだから、あれが千歌ねえの気持ちなら?」

「違うの!」

?泣いてる。千歌ねえが。

「私?馬鹿だから?りよーちゃんの事ずっと弟みたいな存在だつて思つてた?。そう決めたつてた?。でもね、今日曜ちゃんと梨子ちゃんに教えてもらったの!私の気持ち

?。」

初めてあつた時のように。

久しぶりに会つた時のように。

彼女が俺を抱き締めてくれる。

「私ね? りよーちゃんが好きなの。大好きなの。もう、どこにも行つて欲しくない? ずっと傍に居たい! ずっと傍にいて欲しい!」

それが、この人の気持ち。

あの時の告白の答えなら。

「俺で、良いの?」

「りよーちゃんがいいの。」

「馬鹿だし泣き虫だし、迷惑かけるよ?」

「私の方が迷惑かけてるもん! そんな所だつて好き!」

男として、ビシッと決めなきやダメなんだろうけど。

何でだろうな？涙が止まらない？。

「俺も？好きだよ千歌ねえ？今までも、これからも?!」

「ずっと待たせて、ごめんね？『りよーくん』。」

「千歌ねえ、今名前?。」

「えっへへ？せっかく付き合うことになったんだもん！呼び方だつて変えたいよ?。」

「千歌ねえ?!!」

「あはは！また泣いてる〜!」

「千歌ねえだつて泣いてるじゃん〜!」

「私はいいの！ね、折角だしりよーくんも千歌の事呼び捨てして?。」

「えっ!!」

よ、呼び捨て?ずっと好きだった年上の彼女を呼び捨て?!

よし、深呼吸?大丈夫だ、お前ならやれる涼介!!

「??『千歌』。」

「あつ?。」

そう言うなり、彼女は俺の胸に顔をうずめてきた。

これじゃあ顔が見えないじゃないか?。

「どうしたの? 千歌。」

「顔? 見ちゃヤダ?。なんか、絶対変な顔してる?。」

これは見てくれってことでいいんだよな。嫌よ嫌よも好きの内ってことで?

ちよつと強引だけど彼女の顔を上に向けてあげる。

「やっ、待つてりよーくん、やあ?！」

そこに居たのは? 慣れない呼び捨てに真っ赤になっている涙目美少女。

はい? ご馳走様です?!!

「うう? 見られなくなかったのに? // //」

「千歌可愛い。クラクラしてきた。」

「またそういうこと簡単に言う! // //」

「いや本当に。だって千歌が3人に見えるもん。」

「へ?。」

「そういえば? 風邪、引いてたっけ?。」

「ごめん? 後は? 任? せ?。」

「ちよつ、りよーくん!?! りよーくーん!!」

気を失ってからの事は覚えてないけど、目が覚めたら千歌にめっちゃ怒られた。

それからは何故かナース服で看病されてやたら悶々する日々を過ごしたけど、それは

また別の話？。

取り敢えず。

滝沢 涼介、一つ年上の彼女が出来ました。

不幸だなんて言わせない（閑話休題）

雨でも降るんじゃないかってくらいどんよりとした曇り空。こんな日は誰かが悲しんでるんだって、昔好きだったヒーローが言ってたっけ。

俺は歩みを進める。昔遊んだ思い出の場所へ。

俺と涼介と善子で見つけた秘密基地？内浦の海が一望できる少し小高い丘の上。

確証なんてない。

ひよっとしたら無駄足かもしれない。

でも、『誰か居る』。

そんな理由も無い直感を頼りにここまで来たんだ。

人気の少ない藪を漕いで林の中を進むと、少しだけ広い場所に出る。そこが俺達の秘

密の場所だった。

そして、体育座りで抱え込む一人の女の子が？そこに居た。

「やっぱり居たか。流星に風邪引くぞ善子？」

「??。」

反応の無い体に、俺は着てたコートを掛けてやる。

彼女は膝に顔をうずめたまま、一向にあげようとはしない。

「? 当てるやろうか。腹が痛い。」

「??。」

無言という事は違うらしい。

「今日もついてない1日だった。」

「??。」

「またもや違う? まあ、想像はついてるんだけどな。」

「失恋したろ? 涼介に。」

「?? 何で。」

「その何ではどつちののだ?」

「何でそう思うわけ?」

「丸わかりだよ。中学の頃から、善子恋する乙女の顔してたもんなあ。」

「してない。」

「無意識にあいつの事顔で追ってたし。」

「私じゃない。」

「いやいや?。」

「変な所で強情だな?。」

しょうがない、顔上げてもらうか。

「ちよつと失礼致しますよつと。」

「ん？何よ。」

「そんなに目を真つ赤にして、説得力皆無だつつの。」

「？うるさい。」

ありや？怒られちった。

でも無理もないわな。好きになったやつは一人の人間しか見てなかつたんだから。

「よし、叫ぶか！」

「は？何言つて？。」

「涼介のバカヤローーーーー！！！！」

「ちよ、あんた何してんのよ！！」

「昔っから、なんかあつたら叫べばいいって言うだろ？それにここなら人も来ないし、最高のロケーションだ。」

「何よそれ？。」

「叫ぼうぜ。でっけー声で、溜まってるもん全部出しちまえよ。」

善子は黙って立ち上がる。

そうして息を吸いこんで？叫んだ。

どっかの泣き虫に聞こえるくらい大声で。

「涼介のバカーーーー!!私、どんな思いで過ごしてきたと思ってんのよーーー!!」

「おう、言つたれ言つたれ!」

「こつちの気も知らないで惚気けてんじやないわよーーー!!」

「中学の修学旅行で女湯覗いた仲なのに裏切りやがってーーー!!」

「あんた達何してんの!」

「いやさ? 修学旅行と言えよこれっていうぐらい定番じゃん? だから無理矢理涼介を連れて女湯に?。」

「馬鹿だと思つてたけどそこまで馬鹿とは?。」

「オメエだけ善子の身体見れたらしいけどぶざけるなーーー!!!」

「こつちのセリフよっ!!／／／」

「うぼあっ!!」

強烈なグープンチ! ええいこの墮天使め? そんなに華奢な身体のどこにこんな力を?!!

「?見たの? 涼介。」

「修学旅行帰ってきてから1週間ぐらいあいつ善子と目を合わせてなかったろ? そゆこと。」

「??最悪／＼／」

「俺は見れなかったけどな！」

「聞いてないわよ覗き魔っ!!／＼／」

あの時は流石に俺も不味った。

もつと計画的にやるべきだったな？ってんな事はどうでもいいんだよ。

「やつと元気になった。」

「これを元気って言うならあんた眼科行きなさい？」

「ははは！やっぱりお前はいつも通りギヤーギヤー言うくらいが丁度いいや。」

「あら、喧嘩売ってるなら買うけど？」

そうだ。こいつにはこんな顔が似合ってる。

泣き顔なんかより、馬鹿やって笑って？たまに赤くなつて。

さて？もういつちよ叫びますか！

「涼介のアホンダラーー!!俺の好きな女の子泣かせやがってえー！！」

何をするにも2番目だった。

『リトルデーモン2号』

ずつと取れることは無かった、俺に押された烙印。

なあ涼介？このぐらいは許されるよな？

「ありえないほど運が悪くて!!友達作るのが下手くそで!!周りに気を使えるのに自分の事は後回しにして!!そんな不器用な堕天使を泣かせんなああああああつ!!」

「宗?弥?。」

「ふいふ?叫んだ叫んだ。叫びすぎて腹減っちゃったし、帰ろうぜ。」

「待つてよ!今の?。」

「??。」

「本気、なの?。」

ほほう、この可愛らしい堕天使はまだ疑ってるときた。俺の魂のシャウトが届いてなかったのかな?

「本気だよ。俺は善子の事好きだった。中学の頃から?今も大好きだ。」

「それじゃああんたは?宗弥は、ずっと?。」

「?不器用だよなあ俺達。いや、俺の場合は師匠の影響が強いな。うん。黙ってたのはおあいこ様ってことだよ。」

涼介が好きなのに伝えられなかった善子。

そんな善子が好きだったのに何も言えなかった俺。

似たようなもんだ。

いや?振られたばっかの女の子に告白しただけ、俺の方が最低だな。

「悪かったな、振られた直後にこんな事言っちゃって?。」

「? 本当ね。私、どうすればいいのよ?。」

「好きに決めてくれ。俺はお前の前で気持ちを言えた。それだけで充分満足なんだよ。ぶつちやけ付き合えたらそれはもう死ぬほど嬉しいけど、そんな高望みはしちゃいない。それに? このタイミングでしか言えなかった最低野郎だからな。」

俺の事を少しでも見て欲しかった。

涼介だけじゃなくて、俺もいるんだって気づいて欲しかった。

そんなわがままの塊。

「でもさ? 言いたかった。お前がどれだけ不器用で、どれだけ不幸で、どれだけそんな自分が嫌いだったって? そんなお前を、誰よりも好きな奴がここに居るって事を。」

折角泣き止んだこの子の顔を、再び涙が伝う。

何を言うわけでもなく、ただただ俺の方に歩いてきて抱き着いてくる。

「? あんた、馬鹿じゃないの???」

「だから馬鹿なのは師匠譲りだって。」

「うっさい?。すぐに答えなんて、出せない? そんなに軽く決めたく無いから?。」

「? そつか。」

「それに、私あんたの事ろくに知らないのに付き合えるわけないじゃない?。」

「はは、ごもつとも。」

「だから、これから教えてよ？宗弥の事。そしてあんたも私の事知りなさい？不公平だから。」

「それはつまり裸を見せてくれるという解釈で良いのか？」

「本当死ねばいいのに。」

「辛辣うつ!？」

「?気持ちの整理がしたい。」

「ああ。」

「時間かかるわよ?」

「知ってる。」

「ワガママとか墮天使とか言うし?。」

「全部可愛いな。」

「不幸だって持つてる!」

「その分幸せにしてやる。」

それでコイツが隣で笑っててくれるんなら?俺は何を掛けてもいい。

「ずっと2番目だった俺の事を1番だって言ってくれらるまで、何日でも、何ヶ月でも?何年でも待つてるよ。」

「ありがとう？でもーつ訂正よ。」

「へ？」

「私の事好きって言ったの？その？あ、あんたが？初めて、だから？／／／」

「??。」

「なんか言いなさいよ！／／／」

「え、あ、いや??。」

「やつべえ？ニヤケが止まらねえ?!え、何これ？普段つつけんどんな女の子ってギャツ
プヤバくない？それともこれが惚れた女の弱みってやつ？俺男だけど。」

「落ち着けえ？落ち着けえ俺？すーはー？すーはー？」

「じ、じゃあこれからはヨハネ様に一生の忠義を尽くさせて頂きます！」

「ふふつ、殊勝な心掛けよりトルデーモン。」

「では失礼して?。」

「え?。」

「善子のおでこに、軽くキスをする。」

「な、なななななななな?!!?!?!?!?／／／」

「忠義だけに？チュー?。」

「やかましいっ!!／／／」

「へぶあつ!!」

グーパンという代償の代わりに真っ赤な顔した天使を拝めたから良しとしよう。
急ぐわけでもない。

ゆつくりと？時間がかかってもいい。

もう、君を不幸だなんて言わせないから。

はっぴー ばれんたいん♡

バレンタインデー。

リア充の皆さんはカップルでイチャイチャし、非リア充の方々は大切な嫁と過ごす素敵な日。

まあ？後者は人それぞれかもしれないけど？。

今年にはリア充としてこの日を迎えることになった俺こと滝沢 涼介は、今一つの壁にぶち当たっている。

？彼女から一切話題が出てこない。

「何だよ、惚気か？」

「ちげーよ。ただ最近そう言う話題になると話を切り替えるし、今日も友達のとこ行くから遅くなるって？。」

「ほーん？まあ何とかなるだろ。」

「クツソお？他人事だと思いやがってえ?!」

「他人だもーん。それにお前は心配しすぎなんだよ。そんながつつくもんでもねえし、別にチョコ貰えなかったからって死ぬわけじゃないだろ。」

「そりやそうだけどきさ?。」

「千歌さんの事だから心配ないって。」

「??思い出せ、ファーストライブを。」

「ああ?まあ、ほら。時間の間違えとか記憶違いなんて誰にでもあるから?。」

「せめて目を見て言えよ?つか、宗弥はどうなんだ?」

「貰った。」

「はっ!」

嘘だろ?去年までずっと一緒に非リア充生活をした男が??先を越されただど??

「誰なんだっ!隣のクラスの子かっ!」

「善子。」

「なん?だと??」

善子?アイツと宗弥ってそういう関係だったの?え、俺知らないんだけど?。

「絶対勘違いしてっから言うけど友チョコな?しかも板チョコだし。」

「だ、だよなく!だって宗弥が貰えるって相当な?」

「お前の分預かってるけどどうすっかな。」

「この馬鹿で一言多い泣き虫小僧にどうかお恵みを。」

「素直でよろしい。ほれ、プチシユークリーム。」

「なんつっつでやねんっ!!!」

バレンタインにプチシュー1個って!

いや普通にありがたいけど!嬉しいけども!!

逆に1個だけってどこに売ってんだよ!

「?美味い。」

「おう、善子と俺とそこのコンビニに感謝しろよ。」

「コンビニって?コンビニってお前?。」

畜生?こんなので泣かされるとは思わなかった?。

けどそうだよな。がつついた所で状況が変わるわけじゃないし、もういつも通り過ご

すか?。

墮天使、後で絶対覚えてろよ?!

*

「ん?。」

「どうしたの？よっちゃん。」

「ふふっ、馬鹿が引つ掛かつてる気がするわ。」

「？」

「ねえ梨子ちゃん、これって温度これくらいでいいの？」

「うん、大丈夫よ千歌ちゃん。」

学校が終わってから私は、梨子ちゃんと善子ちゃんの2人と一緒に手作りチョコを作ってる。

だって今日はバレンタインだし？美味しいの作って喜んで欲しいし？。

りょーくん食べてくれるかな？

『ど、どうかな？作ってみただけど？。』

『これって？まさか？』

『ハッピーバレンタイン、りょーくん！食べて食べて？♪』

『じゃあ頂きます？美味しい！ありがとね、千歌♡』

「？えへへ／＼／＼」

「あんな緩みきつた顔始めてみたわ？。」

「変なのはいつも通りだし、最近ずっとこうだから大丈夫だよ。」

「もう梨子ちゃんってば、褒めても何も出ないよお〜！」

「重症ね。」

でも私しかあげる相手バレてないんだけど？2人は誰にあげるのかな？聞こうとしたけど上手くはぐらかされちゃった？ぐぬぬ。

初めてのお菓子作りは思ったより難航しちゃって？流石に鍋が爆発した時はどうなるかと思つたよ。

千歌のせいだけどね！☆

「うん、あとは冷やして固めれば大丈夫かな？2人ともお疲れ様♪」

「やったー!!」

「疲れた？。よくこの作業が続けられるわね?。」

「まあ？好きだし？それに、よっちゃんも筋がいいって言うか？やっぱり渡す相手の影響かな?。」

「はっ!?!／／／」

「そうだよ善子ちゃん！昨日板チョコ渡しておいて手作りも用意するなんてよっぼどだよー!」

「な、ななな?!!べ、別にそんなじゃないわよ!／／／ただ？リトルデーモンへの労い?っていうか?!?そう、労いよー!」

『はいはい♪』

「流すなあ〜！ニヤニヤするな〜！！／＼／＼」

「でもようやく渡せるよ？今日まで話題をそらし続けたからりよ〜くんビツクリするだろうなあ？。」

「え？」

「話題？出してないの？」

「へ？うん。」

何故か2人に引かれてる？え？千歌そんなにおかしいことしてたかな？

「？私は『涼介が拗ねてる』にかけるわ。」

「じゃあ私は『涼介君が寂しく泣いてる』にかけようかな？」

「うん、ちよつと待つて？理解が追いつかないんだけど？」

「千歌さんが馬鹿だからかしら？」

「酷い!？」

「ちなみにどうして？」

「ビツクリさせよーと思つて!!」

「千歌さん？思春期男子の欲望を舐めちゃいけないわ。」

「そう？思春期男子はこの日を心待ちにしているものなの。特に好きな人からのチョコ

レートはね?。」

「そ、そんなに?？」

「だって考えてみなさい。相手は泣き虫小僧よ?」

「今頃涼介君、貰えないって思ってた泣いてるかもなあ?」

「うええっ!?!どどどどうしよう梨子ちゃん!!」

2人に言われたら心配になってきた!

そう言えばりよーくん、私が話をそらすとシユンってたような?。

あーもうバカチカーー!!

「?ふふっ。」

「楽しんでるでしょ?」

「そんな事ないよ?けどこっちの予想以上のリアクションしてくれる千歌ちゃんが可愛
いから、つい♪」

「リリーって?結構サデイストよね?。」

*

家に帰ると、志満ねえからチョコを貰った。有難いんだけど？

「志満ねえ、なんでハートの片割れなの？」

「ふふっ、それは部屋に戻ってからのお楽しみかしらね？」

部屋ってどういう事だ？

まさか部屋のどっかに放置とかじゃないよな。だとしたら渡し方が斬新すぎる。

何にしてもちよつと疲れたし布団でひと休みしようかな？。

部屋の中に入ると、特に放置されたチョコとかは見当たらない。そりやそうか。

「まあ何にしてもひと休？み？。」

布団が不自然に膨れている。俺の部屋にはデカイぬいぐるみとかは無いはずだし、あつたとしても朝氣づくだろうしなあ？。

後変わったところといえば枕元からオレンジの毛が出ている事ぐらいで？？これアホ

毛じゃないか？

「？千歌ねえ？」

布団がピクツと動くが反応は無い。

なるほど？そういう手で来たな？

「アホ毛出てるよっ？」

「っ!!」

出ていたアホ毛が布団の中にひゅっ！と戻っていった。
楽しいなこれ。

けどどうしようか？このままだと埒が明かないし出来れば早めに避けてもらえると、俺が素敵な香りで夜眠れないという事態が起きずに済むんだけど？。

取り敢えず布団の横に座るか。

「よいしょつと？どうしたの千歌ねえ？」

「？りよーくん拗ねてる？」

「へ？拗ねてないけど？。」

「今日泣いてた？」

「あゝ？泣かされたかな？」

シュークリームにねっ!!

「その？りよーくんをビックリさせたかったんだけど？私、やり方間違えちゃったみたいで？。」

「やり方？ビックリ?!」

何の事かさっぱり分からないけど？。

布団の中から、小さな紙袋が出てきた。オレンジの袋にハートとかマスキングとか付いてて、以下にも女の子チックな袋。

取っ手の下に書いてある言葉は？。

『Happy Valentine』

「ち、千歌ねえ？これ、もしかして?!」

「今日梨子ちゃんの所で作ってきたんだけど？2人がりょーくんきつと泣いてるって
言ってたから？その、申し訳なくて?。」

布団から聞こえる声に元気は無い。

この人は自分が空回りして俺に迷惑をかけたと思ってるのか?。

「千歌ねえ、顔見せて?」

「?ん。」

布団から頭だけ出す彼女。

はい、可愛い。

「男ってどうしようもないからさ?こんな日はやっぱり期待しちゃうんだよね。確かに
ちよつと不安も感じちゃったけど、男子には通過儀礼というか?。」

なんて言えればいいんだろう。上手く言葉に出来ないな?ええい、余計な事を考えるな
俺!

言うことなんて一つしかないだろ!!

「とにかく!俺、今死ぬほど嬉しいよ!!ありがとう、千歌!」

「ん?／＼／」

もう布団ごと千歌に抱き着く。

なんかアホ毛がブンブンしてるけどこれはどういう反応だろうか?

「食べていい?」

「美味しいかどうか分かんないけど?。」

「頂きます!?!?美味い!」

「ほんと?!?」

「涼介、嘘つかない!てか、俺がビター好きなの知ってたっけ?!」

「昔そんな事言ってたな〜って思ってた!」

もう大分子どもの頃の話だ。

バレンタインがどういうものかハッキリ分かんなかった時に、確かにそんなことを言った気がするけど?覚えててくれたんだな?。

「ビツクリもしたしチョコも美味しかった。本当にありがとう、千歌♪」

「えへへ?／＼／あ、そういえば志満ねえから変な形のチョコ貰ったんだけど、これなんだろう?」

「俺も貰ったんだけど?多分、こういう事?じゃないかな?」

「え?あつ?／＼／志満ねえ!?!?!?!」

出来上がったのは、それはそれは綺麗なハートのチョコレート。
少しの間、2人で何も言えなくなる。

「えつと？食べよつか？？」

「？うん／＼／」

初めての彼女から貰ったチョコレートは、ちよつぴりほろ苦くて、優しさに溢れた素敵なチョコレートだった。

ちなみにこのあと滅茶苦茶チョコ食べた。

口実?何でもいいんです。

『お分かりいただけただろうか?』

「?どこ?」

「もう、あそこだよーくん!顔あるじゃん!!」

夏の定番。

花火とか夏祭りとか楽しい事が頭に浮かぶが、もう一つあることを忘れないでほしい。

心霊番組?。

どうして人はこの時期になると怖いものに惹かれてしまうのだろうか?

確かに幽霊だとか呪いだとか、やたらリアリティのあるヤツは怖いけどさ。

それでも?それでも俺が今怖いのは!!

「ひゃ〜?うわ、怖っ!」

隣にいる、腕に抱き着く一つ年上の彼女。

当たってます。挟まれます。

「ち、千歌ねえ?。」

「ん？どしたの??」

「その？当たってる?。」

「ほえ?」

「?む、胸?が?。」

「わあっ!!／／ご、ごめん!!／／」

「い、いや!こつちこそごめん!!」

あの告白の件以降、千歌ねえが過剰なスキンシップを取ってくるのは家の中か沢山人がいる所だけになった。

2人きりの時にやると恥ずかしいようで、顔を真っ赤にしてしまう。

?むしろ人が多いところの方が恥ずかしいんじゃないかなろうか?

でも本当は構ってもらいたいようで、歩いてる時でも袖をきゅつと掴んでくることがある。

口にはしないけど耳まで真っ赤になってるもんだから、俺の方ももちませんよ。ええ無理ですとも。

ちよつと前まで頼れるお姉さんだったのに?本来の妹属性に加えてそんなピュアな部分見せられたらもう?。

「ご馳走様です。」

「へ?何が?」

「ううん、こつちの話。ミカン食べる?」

「食べるー!♡」

「じゃあ?はい、皮がむけましたのでどうかお納めを。」

「うむ、よきにはからいたまえ♪はい、どーぞ?」

千歌ねえがミカンを一粒差し出してくる。

ん?どーぞ?!

「食べないのりよーくん?」

「食べていいの?」

「勿論!はい、あーん♡」

「あ、あーん??美味いでふ。」

「えへへ?／＼／りよーくん、私も!私も食べたい!」

「はい、どうぞ。」

「むゝ?。」

「へ?」

「りよーくんは食べさせてくれないの?」

「そそそそんなわけ無いじゃないか千歌ねえ!はいあーんっ!!」

「あ〜ん！ん〜美味しい〜♪」

危ない危ない？ミカン大名のご機嫌を損ねるところだった？。

未だにあ〜んっていう文化はちよつと恥ずかしくてなれないんだよなあ？。ちなみに俺の指までちよつと食われたことは内緒だ。

「ほれそのバカツプル。そろそろ寝なよー。」

「はーい！」

「バカツプル？。」

美渡ねえと志満ねえに付き合ってる事は話してある。

ニヤニヤされたぐらいで特にお咎めは無かったが、その日以降美渡ねえにはちよちよくバカツプルと呼ばれている。

そんなにですか？！

何はともあれ確かにもう遅い。明日が休みとはいえ千歌ねえは朝練もあるみたいだし、そろそろ寝るか？。

「じゃあ千歌ねえ、俺はそろそろ寝るよ。」

「うん、お休みりよーくん。」

いつも通りの何気ない1日がまた終わった。

だけど何だろな、この？ちよつと寂しい感じ？。

前まで多かったスキンシップが減ったからなのかな？

付き合ってるだけでも幸せなのに、欲張りな自分がいる。寂しいのかもな？。

「り、りよーくん？」

「ん？どうしたの千歌ねえ？」

暗い部屋の入口から声がする。

「その？一緒に寝てもいい？」

「へ？」

「あつはは？心霊番組見ちゃったから怖くなっちゃって？」

「？ふふつ、俺で良ければどうぞ？」

「えへへ、ありがと／＼／＼お邪魔しまゝす。」

布団に潜り込んでくるなり抱き着いてくる彼女。

さつきまでの寂しさは、もう感じることは無かった。

本当？単純だな、俺って。

「ん、やっぱりここが落ち着く♪」

「そりゃ良かったよ。寝れそう？」

「うん？もう眠く？なって??。」

それから数分もしない内に、スヤスヤと寝息を立てる千歌ねえ。

寝顔は残念ながら見えないけど、これ以上は贅沢というものだろうか？。

ふふっ、昔は俺が怖いのだメで千歌ねえに良く抱きついてたのに？待てよ？

もしかして？いや、よせ。これが事実だったら俺は悶え死ぬ事になる。

しかし気になる？俺は気になる事があると夜も眠れない男だから？たえ我が身を犠牲にしようとも、暴いて見せようこの真実!!

「千歌ねえ、眠った？」

「すう？すう？。」

「流石に寝ちやったか。じゃあこれから言うのは俺の独り言で勝手な解釈だな。？千歌ねえ、嘘ついたでしょ？」

「??。」

「本当はあの時と同じで、心霊番組とかお化けとか怖くなかったんだよね。でも怖がって？ううん、怖がった『ふり』をしてずっとくつついてきてた。夜も一緒に寝ようって言うって。??寂しかったんでしょ？」

スヤスヤと立っていた寝息は聞こえない。

代わりに抱き着いてくる力がほんの少しだけ強くなった気がする。

ああ、やつぱり？。

「俺も寂しかったよ。だからまたこうしてる事が凄く嬉しい。ははっ、理由なんか無

くったっていつでもこうしていいのに。でも?ありがとう、『千歌』。」

俺も眠くなってきた?。」

今言ったことが本当かどうか、分からないけど?もし、この人と俺が同じような考えだったら。

?嬉しいよな。

「独り言も話したし、そろそろ俺も寝るかな。お休み?千歌。大好きだよ。」

そこで俺の意識は途切れた。

「???そういう事、思っても言わないでしょ普通?/?/?/?寝れるわけないじゃん馬鹿あ?/?/?/?」

チュツ。

「?今日はほっぺたで勘弁してあげるのだ!/?/?/?お休み、りよーくん♪。」

2泊3日のLove Travel (1日目)

爽やかな風が電車の窓から入ってくる。

外では秋の訪れを知らせてくれるかのような真つ赤な紅葉が咲き誇り、まるで別世界なんじゃないかって？そう、思ってしまう。

所謂ローカル線という電車に乗って、俺達は目的地へと揺られていた。

「りょーくん！すつごい綺麗だね!!♪」

「うん、そうだね千歌ねえ。」

隣で腕を組みながら、子供のようにキヤツキヤとはしやく彼女。

俺達は今デート？とは違うか。2人きりの旅行に来ている。

事の発端は一週間前？。

「ねえ涼君？」

「ん、どうしたの志満ねえ？」

「最近千歌ちゃんとはどう？」

「どうと言うか？いつも通り幸せな日々を過ごしてるよ。」

「あらあら♪良いわねえ、青春?そんな2人にちよつとしたプレゼントなんだけど?。」

「え?。」

「はい、これ。商店街の福引きで当たっちゃった☆」

「1等、『2泊3日の温泉旅行ペアチケット』?マジで!。」

「丁度練習も空いてるみたいだし旅館もシーズンオフでお客さんもそんなに居ないから、2人で行っておいで。あ!大人の階段登ったら早めに連絡ちょうだいね?。」

「ぶつ!?!無い無い!絶対無いからっ!。」

とまあ、こんな風に志満ねえからのご厚意ということでチケットを貰ったわけ。

なのだが?!

女の子とどこかへ旅行なんてしたことないぞ!どうすりゃいいんだよ!?

と、とにかく変な事を言わず変な発言をせず?いつも通り?いつも通りでいいんだぞ、俺。

「りよーくん?どうしたの?なんかボケくっとしてるけど?。」

「な、何でもないよ!どんな旅になるのか楽しみでしょうがなくてさ!。」

「そうだね!まずは美味しいもの食べるでしょ?それから食べ歩きして旅館でご飯食べて?。」

「ははは！千歌ねえ食べてばっか。」

「えへへ？だつてワクワクしてるんだもん♪うゝ、早くつかないかなあ!!」

そう言いながらみかんを頬張る千歌ねえ。ほっぺたが膨れるぐらい口に入つてゐる姿は、この時期冬眠に入る小動物の様になっている。

はい、可愛いです。

思わず顔がニヤけるのを堪えて目をそらす。

ヤバイな？俺はこの3日間、命をすり減らして過ごさなければならぬらしい。

持つてくれよ、俺の理性。

なんやかんやあつて俺達がやってきたのは、長野県の阿智村。昼神温泉郷と呼ばれる一帯だ。

ここは有数の温泉地で村の中にもいくつか足湯があつたり、大小様々な温泉旅館が立ち並んでいる。他にも呼び名があるんだけど？まあそれは後にするか。

適当に駄べりながらブラブラしていると、一つの足湯が目の前に現れた。先客として、1組の夫婦だろうか？40代ぐらいの男女が足をつけてゆつたりしている。

「千歌ねえ、足湯あるけど入っていく？」

「入る入る！」

「すみません、この席に座つても大丈夫ですか？」

「ああ、気にしないでも良いよ？」

「優しそうな女性だ。隣の男性はパツと見目つきが鋭いが、うんうんと頷いてくれる。」

「じゃあお言葉に甘えて？んっふう〜？。」

「あはは、りよーくん変な声〜！」

「いやいや、気持ちよすぎて出るから！ちよつと入つてみなよ！」

「千歌はそんなことないもんね〜!?んっふう〜？あつ。」

「ほら見たことか。」

「う、うるさい！／＼／＼」

立てたフラグを見事に回収していくスタイル。

実に微笑ましいですなあ？。

「あらあら、仲良しなのね♪」

「あ、すみません騒がしくしちゃって？。」

「良いのよ、ウチの主人は何も喋らないから貴方達ぐらい賑やかな方がおばさん楽しいわ。2人は観光？」

「はい！温泉旅行なんですよ〜♪」

「あらそうなの？それじゃあゆっくりしていかないかね！それにしても思い出すわね〜」

「この人と初めて出会ったのもこの足湯だったから?。」

「え、そうなんですか?。」

「そう、ずっと昔だけどね? 最初はぶつきらぼうな人だなんて思ってたけど? そこに惹かれちゃったから何も言えないわね。」

そう言つて静かに微笑む女性。隣で主人だと言われた男性は、何も話さないが目をキョロキョロさせている。結構動揺してるのかな?

にしてもこの2人の空気はなんとというか、凄く心地良い。お互いがお互いの事を知ってるからこそ、そんなに会話もしなくていいのかもしれない。

ただの自分の想像だけど、正直そういうのは憧れる。

「お2人は仲良しなんですね!。」

「それはもう! ふふ、不思議よね。全く対照的なのに喧嘩したことないのよ?。」

「? その? コツとかつてあるんですか?。」

「コツなんて呼べるものじゃないけど? 信じてるからね、この人の事。そうじゃない?

あなた♪」

男性は明らかに目を逸らし出した。

あれは僕にも分かるぞ。照れてる。

言葉には出さないけど、きっとこの人は凄い奥さん想いなんだなあ?。」

「?俺も、そう?なれるかな。」

「り、りよーくん?それって?／／／」

「え?あつ?。」

思わず口をついて出た言葉。

ほとんど無自覚で言ってしまったけど、これって思いつきり結婚してる前提じゃないか?!ぬおおおお!!恥ずかしい!!

体温が高いのは足から伝わってくるお湯の温かみだけじゃない。

千歌ねえの顔がどんどん赤くなるに連れて俺の顔も熱くなってくるから、思わず目をそらしてしまった。

「まあ!初々しいのおばさんホント大好き!2人なら大丈夫よ、きつと♪」

そうして俺達は足湯と素敵な2人に別れを告げて、次の目的地へと向かった。

千歌ねえのご要望で、美味しいものが食べたいと言うことだったから昼食がわりに軽く何か食べることにした。

阿智村の名物といえは?蕎麦。

これを食べるのを楽しみにしてたのは千歌ねえだけじゃない。事前に調べまくった俺の情報網が役立つ時がきた!

「まずは、ハハ!蕎麦屋の『兼平』さん!!」

「いえ〜い!!」

「腹も減ったし何食おうかな? やっぱぎる蕎麦かな?」

「私ぶっかけ!」

5分ぐらいしてほぼ同時に料理が運ばれてきた。

あまりこういうしつかりした店で蕎麦を食べた覚えが無いから、楽しみで楽しみでしようがない。

「ではでは?!」

『頂きま〜す!!』

「ん〜♪美味しい!!」

「本当に美味しい? 生きててよかった?!」

「あ! りょ〜くんまた泣いてる!!」

これはしようがないよ? 幸せだもん。

足湯に入って静かな山間で蕎麦を食べる。そして好きな人と温泉旅行?。

志満ねえ、本当にありがとう? 圧倒的感謝?!!

本格蕎麦を満喫した俺達は、更に食べた。旅の目的が温泉旅行なのか食べ歩きツアーなのか分かんなくなってきた。旅の目的が温泉旅行なのか食べ歩きツアーなのか分かんなくなってきた。旅の目的が温泉旅行なのか食べ歩きツアーなのか分かんなくなってきた。旅の目的が温泉旅行なのか食べ歩きツアー

だつてさ?。

「えへへ? 幸せだなあ? ♡」

隣でこの人が笑ってくれている。

それだけでも、充分すぎるくらい幸せなんだから。

「オレンジジュースは美味しいですか?」

『みかん』ジュース! も、さっきからわざとでしょ?」

「ははは、ごめんごめん! でもそんなに美味しい?」

「勿論! みかんは正義なんだよ! 果実の極みなんだよ!!」

「じゃあ一口頂きます。」

「へ?」

そう言つて千歌ねえの持っていた『みかん』ジュースを一口貰つた。うん、確かに美味い。

油断したら泣きそうになるぐらいには。

お礼を言おうとしたら、何やら赤くなった顔で口をパクパクさせている。

「? 魚の真似?」

「なわけないでしょ! // // りよーくんのニブチン!! // //」

二、ニブチン?? この感受性豊かなことで知られる泣き虫小僧のりよーすけがニブチン

??

なにやらご機嫌を損ねるようなことをしてしまっただろうか？。

「か、かかか？ 間接？／＼／＼」

「間接？ あ、あゝ？ なるほど。」

「無自覚なの!?!」

「いやゝ、普段あんまり気にしてなかったから？。 あ、トイレ行ってきていい？」

「むゝ？／＼／＼どうぞ!!」

ほっぺたをぶくゝつとさせてそっぽを向いてしまった。 トイレから戻ってきたら何とか許してもらおう。 足早に少し離れたトイレへと向かう。

けどこの時の俺は知らなかった？。

まさか戻ってきたらあんなことになってるなんて？。

*

「?りよーくんの馬鹿／＼／＼」

トイレに行った年下の彼氏にそう独りごちる。

無自覚間接キス? うう、飲めない? //

だってさ! これに口を付けたら私がりよーくんとつて事だよね??

うむむ? どうしたものか?。

「あれ、可愛いお嬢さんだね。」

「今一人なの?」

「え?」

一人で頭を捻ってる私に声をかけてきたのは2人組の男の子達。なんかこう? フラック? つて言うのか分かんないけど?。

「ねえねえ! 今つて暇してるの?」

「えっ、あ、いや?。」

「これから俺ら喫茶店に行くんだけどさ。一緒にどう?」

「あ、あの! 私? 今人を待って?。」

「えく? 大丈夫だつて! なんならその友達? にも連絡して来てもらつてさ!」

「そうそう! 俺らそんな悪い人間じゃないつて!」

そう言つて距離を詰めてくる2人。

流石にここまで来たら馬鹿な私でも分かる。

これ、ヤバイやつだ?。

「あ、あの?でも?。」

りょーくんお願い、早く帰ってきてきて?!!

「ねね、その『オレンジ』ジュースも持って行っていいからさ!」

「?え?」

「そうそう!好きなら俺らも『オレンジ』ジュース奢るし!!」

『オレンジ』?ジュース?

さつきまで散々りょーくんに言っただのに?これは?『みかん』ジュースだって?!なんか思い出したらムカムカしてきた?!!

「??いざして?。」

「え?」

「そこに正座してつつ!!!」

*

トイレが綺麗だった。

なんかこう？凄く居心地が良かった？。それしか言葉が見つからない。

ほんの1、2分だったけど良かったなあ。

「いやいや、こんなアホな事考えてる場合かよ俺。早く戻って千歌ねえに機嫌直しても
らわない？と？」

トイレを出たら、さつきまで2人で居た通りは直線的だからすぐに千歌ねえが見え
た。

千歌ねえに言いよる男の2人組も。彼女は今にも泣き出しそうな顔をしている。

何も考える暇なんか無い。

気がつく俺は全速力で駆け出していた。

俺が離れた隙に千歌ねえにあんな顔をさせてしまった。こんな事なら離れなければ
良かった。傍にいるって言ったのに俺は何してんだ?!

「千歌っ!!」

「そこに正座してっ!!!」

その一声で立ちすくむ。

一括したのは他でもない？さつきまで怯えていた千歌だ。

「え、いや？せ、正座？」

「早くしなさいっ!!」

『は、はいいいっ!!』

「全くも〜! ぜんっぜん分かってないよ! これは『オレンジ』じゃなくて『みかん』なの!!」

「ち、千歌?!」

「? りよーくん。」

激昂した表情から優しく微笑む千歌。

そんな彼女が俺にかける言葉は?。

「りよーくんも正座して?」

「? はい。」

傍から見たらなんと奇天烈な光景だろう。ジュースを片手にした女の子に正座させられて説教を受ける男3人衆。人通りの少ない所で良かった、なんて思う日が来るなんてな?。

5分かな? 10分かな? それはもう熱い熱いみかん講義が始まったよ。

「だからこそ! みかんは最上級なの! 分かった!」

『はいっ!』

「分かったならよし! はい、解散!!」

『ありがとうございます! 先生!』

「もう、手のかかる生徒達だよ！」

「?千歌。」

「あ、りょーくん?ごめんね、私ヒートアップしちゃって?うわあっ!!」

手を取って抱き締めた。

「ごめん、千歌?。俺、傍に居るって言ったのに肝心な時に近くにいれなかった。千歌を?不安にさせた?。」

「りょー?くん?。」

あの時の泣きそうな彼女の顔が忘れられない。あれは俺の失態だ。

たった一つの約束も?守れなかった。

「?大丈夫だよ、りょーくん。りょーくんが気にすることなんて無いんだよ。ほら、結果的に何も無かったし、何だかんだあの2人もそんなに悪い人達じゃなかったし?ね?。」

「でも?。」

「確かに、ちよつと怖かったけど?でもりょーくん、来てくれたよね?普段『千歌ねえ』って呼んでるのに呼び捨てで呼んでくれて?走って来てくれたの、ちゃんと見えてたよ!

ありがとう、りょーくん♪」

そう言っただけ抱きしめてくれる千歌。

強くならなきや。

この人の傍で、自信を持って立つために。

「もう絶対離れない。俺は千歌の？彼氏だから！」

「りよーくん？あんまりストレートに言われるのはまだ慣れないかな？／＼／＼」

「？良いなあ、青春。俺もあんな恋がしたいなあ？。」

「だから言つたる？したことも無いのにナンパなんて上手くいかないって？。怖がらせ

ちやつたから、後で美味しい店紹介しなきゃな。」

「そうする？。もうナンパなんてしない？。」

「こらあつ！問題児達！！／＼早く帰りなさいーい！！／＼」

『ご、ごめんなさ〜いっ！！』

「あつはは？。」

色々あつたけど、自分がどうあるべきか分かつた気がする。

それから2人で旅館へと向かい、目一杯寛いだ。少し早い入浴を済ませ山の幸尽くしの夕食を食べ？1日の疲れを癒すにはお釣りが出るぐらいだよ。

夕食を食べ終えた時に、女将さんが部屋の中へ入ってきた。

「失礼します。お布団の準備が整いましたので、お部屋にご案内を致します。」

「あ、ありがとうございます？す？。」

「あ〜〜！！足湯にいた？！」

「あら！今日のお客様って貴方達だったのね!!」

この旅館の女将さんは、足湯にいた優しい女性だった。
ってことはあのご主人は？。

「ここってまさかお2人の?」

「そうなの！私が女将で主人が料理長！ふふつ、ほんの少しの出会いがこうしてまた会えるなんて？あの人もきつと喜ぶわ。」

「奇跡だよ!!」

「それじゃあ、お部屋に案内するから付いてきてもらえますか、素敵なお客様方?」

女将さんに案内された部屋からは阿智村の景色が一望出来た。山間の村で時間帯も夜だから、都会から見るような夜景とは程遠い。チラホラと街灯の明かりが見えるぐら
いだ。

それでも車の音や喧騒が聞こえない静かな世界。

代わりに聞こえてくるのは、流れる川の音と季節を告げる虫の合唱だけだ。

「良い部屋だね?。」

気づいたら隣に座っていた彼女が静かにそう呟く。

いつもは結んでいる髪を下ろして、浴衣に身を包む彼女を見るのは何だか新鮮だ。

「そう、だね。」

「明日からどうしようか？ 楽しみで？ 寝れ、ない？ かも??。」

そう言つて俺の肩に寄り添うように頭を乗せる千歌。

スヤスヤと気持ちよさそうに眠っている。

「はは、言つてるそばから眠っちゃつてるよ?。」

本当に色々あつた。初めての事だらけでよつほど疲れたんだろな。かくいう俺も実は眠気がやばいんだけどさ。

彼女を抱えて布団へと運ぶ。

「?明日からまた宜しくね。お休み、千歌。」

部屋の電気を消し、川のせせらぎと虫たちの声を聞きながら、俺も眠りにつく事にした。

明日から始まる、楽しい時間の為に。

2泊3日のLove Travel (2日目)

阿智村で過ごす事になった俺と千歌ねえの、2泊3日の思い出旅行。

ちよつとしたトラブル(?)はあったものの、今日も清々しい朝に目を覚まして出かける予定?だった。

「??。」

「ち、千歌ねえ??」

ムスツとした顔でそっぽを向いてる千歌ねえ。そして頬から来るヒリヒリとした痛み。

恐らく俺の頬には綺麗な紅葉の柄がついてることだろう。

しかしあれだな。ほんのちよつぴり耳を赤くしてる顔がまた可愛いな?。

違う涼介、そんな事を考えてる場合では無い。

「あのみ?。」

「何ですか『エツチな』涼介さん。」

「すみませんでしたあつ!!」

深々と土下座をする。

ははっ、見てくれよ？二日連続で正座して女の子に土下座をする男の醜態を？。

いや？うん。俺が悪いんだけどさ？。昨日一緒に寝たのは覚えてるんだけど、どうやら寝ぼけながら千歌ねえがお持ちの『2つのみかん』をお触りしてしまったらしい。

それも成人向け雑誌の如く。

そうでなければ、朝起きた時に彼女の胸に顔をうずめてるわけが無いんだ。

感想は？うん。

「あの、寝ぼけてたつてこと？事故扱いにはして頂けないでしょうか？。」

「寝ぼけてても限度があるよ！／／／ガッツリだったもん！！／／／その？ち、千歌の？

胸？／／／」

あ、やっべ。

鼻血出そう。

「ち、ちなみにどんだけやらかしたのかなりつて？。」

「それ聞く！？／／／」

「嘘ですごめんささい！！」

「もうっ！？寝ぼけてあれだったら起きてる時どんだけなのさ？／／／」

「え、何？」

「何でもないっ！！／／／」

「ポンキッキ!!」

反対側も思いつきりぶたれ、布団から吹っ飛ぶ。

なんてパワー? 善子にグーパンされた時より飛んだぞ?。

朝からドタバタしたものの、今日1日何でも言うことを聞くといい約束をして許してもらった。

みかん大名は慈悲深い?。

そろそろ朝食の時間なので食堂に向かっていると、女将さんと出会った。

「おはよう。」

「あ、おはようございます。」

「おはよーございます!」

「あら? ふふ、まさか旅館の中で紅葉が見られるなんて♪」

「あつはは? 俺ですよ。」

「ツーン。」

「仲が良いのは素敵な事よ。」

「そう見えます?」

どっからどう見ても女の子を怒らせた図にしか見えないと思うんだけど?。

「勿論よ。だって彼女さん嬉し?」

「わー！わー！／／女将さんっ待って！！／／」
 「むぐっ。」

慌てて女将さんの口を抑える千歌ねえ。

昨日知り合ったばかりの人の口を塞ぎに行くのかい姉さんや。

「ぶはあつ。ふふ、ごめんなさいね？内緒にした方がいいかしら?？」

「あ、いや、その?うう?／／じ、自分で?!?いつか言います?／／」

「こども簡単に千歌ねえを真つ赤にするなんて?この女将さん、出来るっ!!」

「よく分かんないけど千歌ねえに何か期待してて良いの?」

「うう?／／うー／／!!!」

「ガチャピンっ!!」

今度はグーパンで殴られた。

何で?朝からこんな事に?痛みなのか嬉しさなのか分からない涙が、ほろりと頬を伝う。

「さ、先に食堂行くからね!／／まったくもう!!／／」

「あらあらまああ♪」

女将さんの優しい笑顔だけを受けて、俺も遅れて食堂へ行き、2人で朝食を食べる。

主に頬が大変な事になってるが、これで今日の予定がスタート出来そうだ。

「さあ気を取り直して!!出掛けよう!!」

「どこに?」

「ふっふっふ?不肖滝沢 涼介、きちんと調べてます故。その名も朝市!」

「おお?!」

昼神温泉朝市。老若男女問わず、阿智村の人達が利用する市場で、家族連れやカップルなんかのお散歩にもうってつけ!?まあネットとか雑誌情報だけど。

「さあ行こう千歌ねえ!今日も美味しいもの食べるぞ〜!」

「お〜!!」

「坊主。」

突然女将さんの旦那さんと呼ばれビクツとする。何やら手招きされているが?俺何かやらかしてしまっただか?!

「千歌ねえ、ちよ、ちよっと待ってて!!」

「?いーよー!!」

旦那さんに呼ばれた先は厨房。キヨロキヨロと周りを確認した後、旦那さんは俺にこそこそと話しかけてくる。

「坊主、すげえ顔だけど怒らせたか?」

「え?あ、いやあつはは?そんなところです。」

「はっはっは、そうか。所で今日の夜は何か考えてたりするのか?」

「一応は? コシヨコシヨ?。」

「ん? ほう? そうか。なら取っておきの場所を教えてやる。」

今日の夜は、千歌ねえに内緒でどうしても見せたい物があった。俺も見たかつたつていうのもあるけど? こればかりは、流石に地元の人になんとか聞こうと思つてた事。

場所。そして時間。旦那さんは俺に色々教えてくれた。というかめっちゃ笑顔で、一緒に行く時まで言ってくれた。この人本当に昨日と同じ人ですか??

「それじゃあ夜に旅館に戻ってくるので、お世話になります!」

「おう、いいってことよ。そこからどうするかはお前さん次第だな。」

「はは、なるべく頑張ります?。」

旦那さんからの用件を済ませ、千歌ねえの元へ戻る。こっちはこっちで何やら女将さんと話してるけど、会話は聞こえない。俺の姿を見るなり女将さんが千歌ねえを渡してきたけど、何やら顔が赤いんですが?。

「どうかした?」

「な、何でもないっ!! // //」

「なら良いけど? じゃあのんびり行こ? う?。」

歩き出そうとした時、違和感に気づく。

? なんか、俺の袖重くありません?

チラツと横目で見ると、千歌ねえが案の定俺の服の袖をきゅつと摘んでいた。「あ?。」

殆ど無自覚だったようで、気付くなりすぐさま離してしまった。

もう可愛すぎて廊下で転げ回リたかったけどそれは後回し。十千万に帰ったら転がろう。

今はただ?。

「千歌ねえ。行こ?」

「? うん / / /」

ほんのり熱を帯びたこの小さな手を離してしまわないように、しっかりと握る事にしよう。

それから俺達は朝市を巡り、おやきとかイナゴの佃煮を食べ? 足湯に入ったり写真を撮ったりとエンジョイしまくった。明日にはこの素敵な村から帰らなければならぬ。

思い残す事は無いように? この一瞬一瞬を全力で過ごした。

そして? 夜が来る。

旅館に戻った俺達を待っていたのは、女将さん夫婦の2人だった。用意してもらった車に乗り込み、深き山道を走っていく。

「ねえりよーくん。結構深い所まで来たけど、これからどこに行くの?？」

「ん〜?ある意味旅のメインかな?」

「メイン?？」

そう、これから行く場所はこの村のもう一つの呼び名を持つ場所。

数多くの人を魅了し、いつだってこの村の人達を見守ってきた場所。きつと願いだつて叶うんじゃないかって?そう思ってしまう。だからこそ、人はこう呼ぶのかもしれない。

「『天空の楽園』、だよ。」



女将さん夫婦に下ろしてもらった場所は山頂まで緩やかな上りが続く山道。懐中電灯で道を照らし、2人で一緒に登っていく。

俺達の間に会話は無い。千歌ねえは、これから何が待ってるのかワクワクしてるから。

俺は?多分違う。

多分っていうのは、ハッキリと自分の中で確証がなかったからだ。懐中電灯を持つ手が無意識の内に震えてる。

「ははっ? 参ったな?。」

「りょーくん?」

「どしたの?」

「ううん? 何か難しい顔してたから?。」

「そっか? 楽しみで緊張してきちやっただんだなきつと。」

「? うん、そうだね。」

何か言いたげな表情だったけど、その続きが出ることは無かった。

そうして少し歩き、開けた場所に出る。旦那さんに言われた通り、2人で懐中電灯を消してゆつくり歩を進める。

「千歌ねえ、準備はいい?」

「うん、いいよ。いっせーのー? でっ!!」

上空を見た俺達の目の前に広がったのは?

星の海だった。

「わくわく!!」

「すっぴん?!」

視界を埋め尽くすのは、濃紺の空に散らばる大小様々な宝石の様な星達。内浦で見た星空も凄かったけど、それ以上だ?。

「凄い!凄いやよりよーくん!!」

「ああ?本当だね?こんなの見た事ない?。」

「あーやっぱりカメラ持ってくれば良かったあ?!!果南ちゃん大喜びするだろうなあ?」

星空を見上げて立ちすくむ俺の手を取り、千歌ねえがクルクル回り出す。

「ね、りよーくん!」

「何?」

「踊ろう!!」

「へ?でも俺ダンスやったこと?。」

「こういうのは思うまま!ね?」

アイドルをやつてるとか、自分の彼女だからってだけじゃない。俺には、楽しそうに踊るこの人がキラキラして見えた。この人が持っている輝き。

これが？好きだったのかもな。

彼女の手を取り、自分の元へ引き寄せる。

「わつとと？りよーくん?!」

「?ねえ、千歌。」

ピクリと彼女の体が反応する。普段なら暗くて見えないはずの顔が、今日は星の光に照らされて良く見える。未だに慣れてないのか、ちよつと照れを含んだ後に『えへへ?』なんて笑うこの人が愛おしい。

「好きだよ、千歌。」

「いきなりどうしたのさく／＼／＼」

「??。」

「??りよーくん?」

『そこからどうするかはお前さん次第だな。』

旦那さんの言葉が頭をよぎる。

「俺、焦ってたのかもしれない。」

手の震えは最高潮だ。

「今の状況が楽しくて、幸せで？このまま変わらずに居られたらきつとそれだけで充分なんだろうなって？思ってた。」

「りょーくん？。」

「けど俺の本心は違った。変わることを望んでる？例えそれが俺の独りよがりで、我儘だったとしても？。」

こんな風にしか聞けない臆病な俺だけだ。

胸を張って貴方の隣に居れるような男じゃないかもしれないけれど？。

それでも。

「千歌。俺はこれからどんな時だつて千歌と一緒に居たい。喧嘩もしたり、悲しませることもあるかもしれない。でも？それでも、俺の側に居てくれますか？」

ちよつぱり驚いた様な顔をして、彼女は優しく微笑む。

「もう、告白した時も言ったよ？私は、りよーくんじゃなきや駄目なの。りよーくんの側に居させて欲しい？ずっと一緒に歩いて行きたい。卒業しても、大人になっても？それだけは、ぜーろーろーろーったい!!変わらないよ♪」

？ああ。やつぱり俺、この人の事が大好きだ。

こんな事言われて嬉しくないやつなんて居るもんか。気付いたら手の震えは止まっていた。

もう、大丈夫。

「千歌、愛してます。」

「うん。私も愛して？」

彼女が言い切る前に、引き寄せる。

そして？俺と彼女の唇の距離は、『0』になった。

「ん?!んう?。」

一瞬ビクついたその小さな身体も、そのまま身を委ねてくれる彼女の気持ちも、今こ

うしてるキスの感触も?全てが愛おしかった。

そんなに深いキスをしたわけじゃないし、長いキスでもない。けど間違いない。今この5秒くらいは、今までの人生で一番長く感じた。

ゆつくり唇を離していくと、真つ赤になってふるふるしてる彼女の姿が。

「い、いいいきなり?!////」

「あつはは、ごめんごめん。あんまりにも好きすぎて?。どうだった?」

「どうって言われても?////した事無いから分かんないよ?////」

「それもそうか。」

むしろ下手くそって言われたら泣いてたぞ。

「で、でも?。」

「ん?。」

「何か、ポカポカして?幸せで?癖になっちゃいそう?かも////」

自分で言っておいて急に恥ずかしくなるのは反則じゃあないですか?何ですかその破壊力。

クツ?からかいたい?!俺の顔も熱いし余裕は無いけど?からかいたい?!!

「じゃあさ?もう1回、いっとく?。」

「?自分だって余裕無いくせに////」

「ん、ん〜!? そそそそんなことないけどなあ〜?!」

「良いよ、しよ? / / /」

「へ?」

煽りに乗っかってきた千歌に唇を奪われる。

馬鹿な? 俺のさつきまでの緊張はなんだ? たんだ?! でも身体が小刻みに震えてるの
で、何も言わないことにしておこう。

変わることを望まなかったわけじゃない。変える勇気が無かった。

けど、もう大丈夫だな。

隣で手を繋いで一緒に星を見てるこの人が居れば、何だつて出来そうな気がした。

明日、目一杯楽しもう。この旅を飾る素敵な最後にする為に。

俺達は女将さん夫婦が迎えに来るまで、ただただこの星空を見つめていた。

2泊3日のLove Travel (最終日)

「りよーくーん、おーきーてーよー!」

破壊力を秘めた声と共に体を揺さぶられる。朝が来ているのは自分でも分かっているつもりだ。

しかし、いかんせん布団から出られない?。寒いとかめんどくさいでは無く、昨日あった手前までもに顔を合わせられないんだ。

だから取り敢えず寝た振りをする。

「ねえつてばー!」

「?・ぐう。」

「ぐぬぬ?まだ起きないか?。」

我ながら酷すぎる演技力だけど、それに気づかないこの人はどれだけピュアなんだろう。

まあかれこれ5分ぐらいやってるから、そろそろ起きないと悪いかな?。

よし、腹を括ろう。

「起きないと?・ち、ちゅー?・しちやうよ?／／／」

前言撤回。

このままの現状維持決定です。

いやね? やましい事とか関係無しにこんな事言われて『じゃあ起きよう』ってなる男の子なんて居ないと思うんですよ。

ちゅーの部分だけ小声だし?。

「ほ、本当にしちゃうよ? // //」

「?・ぐん。」

「うう〜?! // // りよーくんが悪いんだからね!! // //」

ぐんってなんだ俺。

目を閉じていても、顔の上に影がかかっているのは分かる。めっちゃ近いのも分かる。吐息が聞こえるぐらいには?。

「う?・うう?・起きてよ? // //」

ヤバイヤバイヤバイ。

何だこれ? 何かもうガバツといっってしまったみたい?!

キスするとかしないの前にその距離で話されたら色々なリミットが外れそうなんですよ!

1分近く待ってもこのままなのは余りにも俺の体に毒だ。

生殺しだよこれ。拷問です。

うん？ 諦めよ。

この距離をキープする為に彼女の後頭部に手を回す。

「へ？／／／」

「？やるなら一気に来てくれた方が有難いです。」

「ううえああつ！？お、起きてたの！？／／／」

「結構前から。」

「んぐぐぐぐ?!動けない！?!／／／あ、あの？りよーくん？近いんだけど？／／／」

「千歌が近づいて来たんだもん。千歌だけに。」

「ほんつと叩くよ!?!／／／」

「おはよ、千歌。」

軽く彼女の言葉を無視して口の横にキスをする。朝からマウスとマウスは不味い。主に理性と恥ずかしさが？。

「えっ、あ、やあ？うう？／／／」

彼女はそのまま力無く俺の体の上に崩れ落ちくる。

「？動けません。」

「知りませんっ!!／／／」

「なんて事でしよう。」

「?緊張しないの?」

「してないと思います?」

「心臓が早いからしてると思う。」

「ならそれが答えです。」

これは後々黒歴史になることだろうか?あんなことが許されるのは少女漫画に出てくるイケメンだけだ。

「何で敬語なの?」

「恥ずかしさで混乱してるのです。」

「?顔真っ赤だもんね。」

「?お互い様です。」

起きよう。やることはやったんだ。もう起きてもバチは当たらない。

あ、ちなみに昨日の件があったから呼び方も変えたよ。

むくりと起き上がると、彼女は俺の体の上をゴロゴロ転がり落ちていく。

なんだこの可愛い生き物。

「じゃあ飯に行こうか?。」

「う、うん?ねえ。」

「ん? んむっ?!」

完全に油断していた俺の口が塞がれた。

なんて事だ? 朝からマウスとマウスだなんて?!!

「おはよ、りよーくん♡」

「? これは夢だ。寝よう。」

「うええっ!?! ちよ、起きてつてば!! 千歌やり損じゃんっ!! / / /」

ふふっ、もう騙されないぞ。朝からこんな事が起きるのは大抵夢さ。どうせ目を覚ましたら何事も無かったかのように?。

「起きろおっ! 涼介えっ!!」

「ぶほあっ?!!」

ノーガードの腹部に落下してくる肘鉄。

これはあれだ? 朝に食らつていいやつじゃない? いや、いつ食らつても嫌だけど本当に? 無理?。

「ごめん? なさい? ガクッ。」

「よし、じゃあご飯食ベに行くよー!」

「はい? あの、首? 締まって?。」

お構い無しにズルズルと引き摺られる。

決めた。からかう時は5分だけにしよう?。」

飯を食べ終えた俺達は、着替えて荷物を纏める。志満ねえ達にお土産も買っていていかなくちやいけないしね。流石に同じタイミングで着替えられないから、先に着替えてもらつてる間におトイレタイム。

「何買つていこうかな?蕎麦とか?いやいや、美渡ねえは食べるだけだろうな?。」

ブツブツとシンキングタイムを繰り返す。部屋に戻ったら千歌に聞いてみよ。

「千歌?。」

「わーーーーーっ!!／／／」

「失礼しました?。」

ノックつて大事だと思う。それがたとえ旅館であろうが家であろうが、女の子と2人で居る時は忘れちゃいけないね。

「?オレンジだったなあ。」

「見たでしょ?。」

「ひっ?!!」

閉めたはずの襖の隙間から声がする。

後ろを見てはいけない。きつとホラー映画の主人公達はこんな恐怖と戦っているの
だろう。

「この間の心霊番組なんかよりよっほど怖い。

「見たよね？」

「す、すみません?。」

「ノック、してね？」

「気をつけます、はいっ!!」

襖がピシヤリと閉まる音がする。

「おかしいな? ああ言うのってラブコメだとラッキースケベって言うんじゃないのか? めっちゃ怖かったぞ。」

「あれ、おかしいな? 涙が出てきた?。」

『泣きたいのはこつちだよ馬鹿あつ!! / / /』

聞こえてらした。

まあそんなかこんなで朝からドタバタしてたものの、何とか荷物を纏め終えた。宿の玄関には女将さんと旦那さんの姿が。

「本当に、色々とお世話になりました。」

「気にしないで頂戴。何か息子と娘がまた出来たみたいで、私も嬉しかったわ♪」

「うう〜? 女将さん〜!!」

「よしよし? また来てね、千歌ちゃん。」

「絶対来ます〜?!」

「坊主。」

「は、はい。」

「お疲れさん。」

「旦那さんのお陰です。」

「あら、涼介君に何か悪いこと教えたのかしら?」

「あつはは?。」

実はキスした事をこっそり伝えて2人でガッツポーズしてました、なんて言えるわけがない。

何にせよ感動の別れ?俺までつられて泣きそうだ?。

「じゃあ、そろそろ行きますね。」

「ええ。また会えるのを楽しみにしてるからね。」

「じゃあな。仲良くしろよ?」

旦那さんの問いかけに、2人で目を合わせ答える。

『勿論っ!!』

こうして俺達は旅館を後にした。



「さてさて？土産は買った。帰りの電車にも時間はある。何をしようか？」

「んむ？んむむんむ。」

「ごめん、俺のタイミングが悪かったね。飲み込んでからにしようか。」

「んぐつ。」

ほっぺたをリスみたいにパンパンにしている。

くっ？油断していると俺の理性を壊しにかかってくるなこの人は。

「ぶはあつ！そんなに時間あるの？」

「んぐ？そんなには無いけど半端に残ってるね。」

「そっかあ？。あ、じゃあ写真撮ろうよ！この町の景色も、私達の事もいっぱい撮って思い出にしよー！」

そう言うと、カバンから何やらゴソゴソと棒のようなものを取り出した。

「それ何？」

「ふっふっふ？その名も『自撮り棒』!!」

「何か女子高生みたいだね。」

「女子高生だよっ!!」

「ふふっ? それでどうするの?」

「これに携帯をつけてく? はい、りょーくんこっち寄って!」

「こ、このぐらい?」

「もつと!」

「こっか!!」

「もつと!!ぎゅ〜って!!」

「OH!!」

「はい、チーズ!!」

カシャツという音とともに、一枚の写真が保存された。

不意打ちをくらって何だか凄い顔をしている。

「?これ撮り直しきくかな。」

「駄目です!これも大事な旅の思い出、一瞬の輝きなのです!」

「そうなんですか。」

「そうなんです!」

もう少しキメ顔したかったけど、隣で嬉しそうに写真を見る彼女の顔を見ちゃったら?これはこれでいいかなって思ってしまう。

それから俺達は写真を撮りまくった。

この村に来ることはこれから先何度だって出来るかもしれない。

でも？ 『今の』俺達がこうしてるこの時間は、2度と過ごすことは出来ない。ああしておけば良かったって思わないように、電車が来るまでの間全力で楽しむ事にした。

それから電車は1時間半程で駅へと到着した。窓の向こうで流れていく夕暮れの景色を見ながら、この3日間の事を思い出す。隣で肩にもたれかかって眠る彼女を起こさないように、そつと頭を撫でる。

頭一つ分小さくて、恥ずかしがり屋で？ 頑張り屋な少女。

2人の写真で一杯になった携帯のフォルダに笑みがこぼれてしまう。

この人に隣で笑ってもらえるように、もっと色々な事を知っていかなくちやな。

「お休み、千歌。」



「あの？美渡ねえ？。」

「どした？」

「なんで赤飯が出来てるの？」

「致したんだろ？」

「致してませんっ!!」

「ええ？お前折角2人つきりで同じ布団に寝て3日も過ごしたのに？」

「良いんだよ、キスは出来たか？ら??あ。」

「ひゅ〜！赤飯でいいじゃん♪」

「忘れてくれえええええっ!!」

※シヤチだ！イルカだ！果南ちやんだ！！

ジリジリと太陽が照りつける夏の1日。

部屋の中で扇風機に当たりながら力無く倒れている俺達。

セミの声がうるさい？とにかくうるさい？。

暑い時って、何でちよつとした事でイライラしちゃうんだろう。こんな時はあれだな？海に行きたい。

「りよーくん、海行こう海。」

「同じ事考えてた。」

「じゃあ果南ちゃんも呼ぼうよ！」

「果南？果南ねえの事？」

松浦 果南。俺からしたら全員姉のような人達ばかりだが、あの人はずば抜けて俺達や曜さんにとつてのお姉さんだった。

何をするにも先陣を切り、俺達はそんなあの人の後ろに付いて色んな事を教えて貰った。

まあ？姐御肌っていうか、アグレッシブが強すぎて当時の俺は付いていけなかったり

したんだけど?。」

その果南ねえが、それこそ小学校ぶりに来る。

「ふふふ? 果南ちゃん絶対りょくんの事分らないと思うよ?。」

「随分楽しそうだね?。」

「当然! 果南ちゃんの驚く顔楽しみだもん♪」

にしても? あの人はもう高校3年生か。

どんな風になつてるか想像もつかないな。

緊張半分、ワクワク半分で砂浜へと向かう。千歌が果南ねえに連絡を取ってくれたみたいだから、もう時期来る頃だろう。

「あ、水上バイク。」

淡島方面から1台の水上バイクが走ってきた。

太陽の強烈な日差しをものともせず、水しぶきを上げながら爆走している。

この時期に水上バイクなんてやったらさぞかし気持ちいいだろうな?。」

誰だか分からないけど、ウエットスーツに身を包んだポニーテールの女性に乗ってる? カッコイイな?。」

「おーーーーーい! 果南ちゃーーーーーん!!」

「? はい?。」

果南??誰が?こつちに向かつて来るのは女性が駆る水上バイクだけだよ?

俺達のいる場所に来た女性は、水上バイクを止めてサングラスを外す。あれ?あれれ

??

「やつほ、千歌♪」

「か?か、かかかか?」

「ん?ん?あ、涼介君か!!」

「はい!そうですツ!!」

おかしい?!人のこと言えないけど、あんなにちまーん、つてした子がこうなるのか!?

どういう成長をしたんでしょうか?。

「随分大きくなつたじゃん!」

「こつちの台詞だよ?本当に誰だか分かんなかった。」

「にしし♪じゃあ?久々の再開を記念して?。」

「な、何?かな?」

下をぺろりと出し、両手を構えて果南ねえはジリジリと詰め寄ってくる。

「何つて?ハグ?」

「思春期男子にその格好でハグは刺激が強すぎると思います。」

「そうかな?ま、大丈夫大丈夫!」

「俺が大丈夫じゃ?!」

「ていつ!久しぶりだね泣き虫♪うりうりっ!!」

一瞬の隙を突かれ、危ないと思った時には既に遅し?。色々と成長なさってる懐へすっぽりと収まってしまった。

分かった。千歌が余りにも無防備なのはこの人の影響だ。

絶対に!

「む?おふたりさん?。」

『あ?。』

1人、置いてきぼりにしてしまった。ほつぺたをぶくぶくとさせながら、傍から見ても分かる目でじつとり見られている。

ち、違うんです千歌さん。これは不可抗力で?!

「近いから離れるっ!」

「はいっ!」

「りよーくん。」

「ご、ごめんなさい!!」

嫉妬全開DAY!DAY!DAY!

そんな所まで可愛いと思えてしまうけど今はそれどころじゃない。

ピンタが来るか口を聞いてもらえなくなるか？何にせよ後で怒られるな、これ？。

「ん。」

「ありや？」

「果南ちゃんのはここは千歌の場所です。」

てつきり怒られるかと思いきや何故か果南ねえに抱き着く千歌。

え？どゆこと??

「モテ期が来た。」

「？果南ねえ。」

取ってやったみたいな顔をしてる果南ねえに一言申したい。いや、別に？妬いてないけど??そりや果南ねえはカツコイイし美人だし昔から世話になつてるけど??

果南ねえに抱き着いてる千歌の後ろに抱き着く。

「この人は俺のです。」

「りよーくん?／＼／＼」

「千歌?。」

「何見せられてるの、私?？」

まあ冗談も兼ねた再会はこれくらいにして?だ。

幼き日の思い出が頭をよぎる。

色々あったよなあ?。港から飛び込みさせられたり朝から晩までノンストップで遊んだ挙句親に怒られたり?。

ん?。良い思い出が無いぞ?

「んむむ?。」

「どうしたのさ?」

「果南ねえと関わったのって、俺が泣くか怒られた思い出しが無い?。」

「??気のせいだよ。」

「せめて目を見て言っただけ欲しい。」

「あはは!水が気持ちいい!!♪」

「まあ、若干1名?。」

「変わってないものもあるけどね。」

久しぶりに会えるからある程度気持ち昂つたけど、問題発生だ。

千歌を経由しないと会話が續かない?!

「ん?何の話?」

「涼介君が千歌の事溺愛してるって話。」

「そんな話は一言もしてなかったはずだけどなー。溺愛はしてます。」

「もう? / / /」

「はいはい、ご馳走様です。」

「つてか、果南ねえ。俺達が付き合ってるの言つたっけ？」

「曜から聞いてたよ。とつても嬉しそうに話してたしね♪まあその分梨子ちゃんを抑えるのが大変らしいけど?。」

「梨子さん、何してんだろ?。」

「でも果南ちゃんも彼氏いるよね?。」

「え?。」

「ここで爆弾発言、我らが千歌っち!!あのサバサバ系女子の果南パイセンが徐々に赤くなつていくぞおっ!!」

「な、何で?。」

「だつてこの間、嬉しそうに男の人と歩いてたじゃん。」

「や、ちがつ!!／／あれ?は?。パシリだからっ!／／」

「なーんだ、パシリの人が!。」

「それで良いんですか高海さん。」

「この辺じゃ良くあるもんね。」

「どうなつてんだこの街。」

相変わらず果南ねえは挙動不審になつてるし顔の赤みは引けていない。

何だか新鮮だ。

「?何?／＼／」

「いやあ、珍しいものが見れたな〜って?。」

「えいつ。」

「目があああああああああつ!!!」

良い子の皆はやっちやいけないぞ☆

「もう?いつちよ前に年上をからかって／＼／」

「にしても目潰しって?目潰しって?!」

「あつはは!りよーくんまた泣いてる〜。」

「な、泣いてなんかいないやいつ!!」

くっ?後で絶対弄り倒してやる?!

幼き日々の分と今の目潰し分、倍返しでなっ!!

結局千歌はまた海に遊びに行ってしまったので、砂浜には俺と果南ねえの2人きり。

勇気を出して、さつき気になったことを改めて聞いてみる。

「実際どうなの?」

「何が?」

「その?パシリの人。」

「まだぶり返すか?／＼／＼」

「待つて待つて!せめて目潰しは勘弁して!!?別に茶化したりしないよ。ただ、なんて言うか?果南ねえ、難しい顔してるし。」

「ふくん??ま、心配しなくても大丈夫だよ。本当にそんなのじゃないんだ。私だつて、これが好きになるつて感覚なのかも分からないしね。独りよがりとか、勘違いかもしれないから、何も言わない。」

「果南ねえ?。」

「今は、これでいいんだと思う。逃げかもしれないけど、『アイツ』とのんびり過ごす毎日が意外と楽しいしね。」

『アイツ』と口にした途端、果南ねえは優しく微笑んだ。こんな顔?するんだな。

「そっか?頑張つてよ。」

「何?バカツプルの余裕かこのく!」

「あつはは、違う違う!」

「ま、でも心配してくれてありがとうね♪」

「いえい?え?。」

「ん?どうかした??あ。」

「むーーーーーっ!!」

本日2度目の失敗。

流石のみかん大名もカンカンみかん。

「2人とも知ってる? 2度目ってね? 無いんだよ。」

「ち、千歌? 一旦落ち着こ? ね?」

「そそそそうだよ! 冷静に考えれば実は誰も悪くない事が?」

「2人とも正座っ!!」

夏の日差しで暖まった砂浜の上。膝が焼けるんじゃないだろうか?。

なんか、果南ねえが正座して怒られてるのシユールだな。

「大体果南ちゃんは誰彼構わずすぐハグするし、りよーくんはウエットスーツに鼻の下伸ばしてるし!」

「あっはは? 良いかな? 思ってる?。」

「寧ろ千歌のウエットスーツ姿見たら死ぬる。」

「うるさいっ! / /」

「はいっ! ごめんなさい!!」

「はあ?。結局、1番変わってないのが?。」

「1番強いんだなあ?。」

「口を開かないっ!!」

『すみませんっ!!』

それから5分間説教は続き、何事も無かったかのように3人でワチャワチャした？そんな1日でしたとさ。

長達の導き（尋問）

俺がやってきたのは浦の星女学院の生徒会室。隣には一つ年上の彼女さん。

相對するは果南ねえを交えた3年生の3人。

申し訳なさそうな顔をしてる果南ねえ。

まるで遊びがいのある玩具を見つけたような顔をしている金髪的女性。

そして？ 厳格な表情の浦の星女学院、生徒会長。

「？ どうしてこうなった。」

「いや、ごめんね涼介君。千歌と2人で涼介君の事話してたら、厄介な2人に捕まっちゃった？」

「あら、厄介だなんて酷いわね、☆マリー達は2人の事が知りたいだけよ！ ね、ダ、イヤ？」

「？ そうですわね。それで、千歌さん？ そちらは貴方とお付き合ひしてる方で宜しいんですか？」

「そうです。俺が彼氏です。」

「ちよつと待ってて貰えますか？」

「あ、はい。」

いかんいかん、思わず反応してしまった。果南ねえと金髪の人は目をそらして吹き出してしまっている。

普通に恥ずかしい。

「えつと？そう、です。沼津の高校に通つてる年下で？幼馴染みで？か、彼氏？です？／＼／＼」

「そこは普通に言ってくれた方が俺も照れずにすみませお姉さん？てか、俺皆さんの名前がまだ？」

「あら、ごめんなさい！私は鞠莉。マリーって呼んでね？♪」

「はい、マリーさん。」

「？善子以外で初めて呼ばれた。素直に嬉しいわ。」

うん、それは良かったです。取り敢えずハグしてくるのは勘弁してください。

果南ねえの時もそうだったけど、思春期男子には刺激が強すぎる物が当たってるんです。

？当ててんのかな。

「あ、あの？距離が？。」

「お礼にいいものを見せてあげる。」

「?え??」

耳元で何やら小悪魔の囁きが聞こえる。

いいもの?心当たりが無いけど?。

「むー?」

「ほら鞠莉。正妻がお怒りだから離れな?」

「ん?千歌つち嫉妬ファイヤーしちゃった??ほっぺ膨らまして可愛い♡うりうり♡」

「もー!!//やめーへー!!//」

何だろうな、あの光景?凄く目に良い。

『て』のタイミングでほっぺを伸ばすから、『やめへ』になっててすこぶる可愛い。

そんな千歌のほっぺたをムニムニしてる先輩と目が合った。

「??」

「??はっ!」

ウインクをバチコン☆と決められて全て理解した。

あの人は、これが俺の目の保養になると知ってて作り上げてくれたんだ!

鞠莉さん?いやっ!

「マリーさんっ?!」

「ブイッ♪」

「え? え?? 2人で何の話してるのさ?」

「とーにーかーく!! 話はまだ終わっていません!!」

「あ、えと? 生徒会長? さん?」

「私はダイヤ。黒澤ダイヤと申します。」

ダイヤ?? なんて名前だ?。

カッコよすぎるだろ!!

「な、何ですの??」

「名前、カッコイイですね!!」

「カッコイイ? ですか?」

「?? 涼介君、善子みたいだね。」

「因みにく? ダイヤの妹はルビイって言うのよ?」

「鞠莉さんっ、人の妹の名前を勝手に?!」

「姉妹揃ってカッコイイ!!」

「そ、そうですか?? ま、まあそれ程でも?。」

「一瞬で陥落したわよ果南。」

「予想はしてた。」

「はっ!?／＼／」

良いなあ?俺もなんかこう?カッコイイ名前かなんか欲しいなあ?。

そんな事考えてたら、脇腹あたりをきゅつと引つ張られる。

「?どしたの千歌?」

「???ダイヤさんばかり、狡い。」

口を尖らせ、目をそらして?俺の服をつまみながらこの年上のお姉様はそう仰るんだ。

はあ??死んでくるか。

と言うかここで死にそう。出血多量で倒れそう。

上を向かないと、にやけ面がバレそうだ。

「千歌は?ギャップがいいよね。」

「?ぎやつぶ?」

「画数が多くて漢字は大人っぽいのに、声に出したら可愛らしいって言うギャップ。あと普通に可愛いです。」

「むう?／＼／子供っぽいって言うてる?／＼／」

「そん、な事は無いよ?」

初めてこの距離でスネ顔上目遣いのダブルパンチをくらった。

ギリギリ耐えたけどあと一撃食らったらもう？ヤバイ？。

取り敢えず、頭を撫でて？

「んっ？くすぐつたいよ？／／／」

「?!がはっ。」

「え？ちよ、りよーくん!?!どうしたのー!?!」

もう？ダメだ？これが無自覚の強さか？。

「微笑ましいわ〜♡」

「？果南さん、あのコント止めてきてください。幼馴染みでしょ？」

「この間1人で相手した身にもなってみなよ?。」

「よし、復活。今更なんですけど？何で俺は呼ばれたんでしようか??？」

「私達は特にないんだけど?。」

「硬度10でカッチカチの誰かさんがね〜?」

「涼介さん?でしたわね。」

「は、はい?。」

「私達は未熟ながらもスクールアイドルです。同じ高校生と言えども、立場は違う?お分かりですね?」

「は、はい?。」

「であれば、私達の？A q o u r sのリーダーである千歌さんとそういう関係になる。」
「えと?。」

「貴方のするべき事？分かりますね。」

「??はい。」

「ダイヤ？そういう事は?。」

「いえ。折角なので言わせて頂きますわ。」

生徒会室をピリピリとした空気が流れる。

「やっぱり？スクールアイドルと言っても、もうA q o u r sは地元じゃそこそこ有名なだ。」

そのリーダーだっていう子と付き合ってるってのは？不味いのかな。

「涼介さん。」

ダイヤさんが口を開く。

何を言われるんだろうか？別れてくれとかそういう事を?。」

「千歌さんをよろしく願いますわ。」

「へ??」

俺と彼女以外の全員がすっ転ぶ。

「なっ、何ですの全員で?。」

「いやいやいやいや!!別に言っただけじゃなく言いたい事ってそれ!?!」

「そ、そうですが?」

「今までの『許しませんっ!』って感じの雰囲気何だったのよ!?!」

「何を言ってるんですか。お2人の仲がよろしいのは先ほどの様子で充分分かります。それで涼介さんが自分のすべき事を分かっていると言うなら、それでいいじゃないですか。」

えっと?つまりダイヤさんは初めから否定するつもりなんか無くて?ただ俺がどう思ってるか知れたかったってこと?!

「あ、あの!」

「?何ですの?」

「その?何も、言わない?んですか?一応スクールアイドルと付き合ってるって、世間的には良くないんじゃない?」

「なら別れますか?」

「嫌です。絶対無理です。」

「ふふっ?ならそれでいいのではないのですか?貴方達は、そのままの方が似合っていますよ。何かあつたら私達が全力で支えます。」

「ダイヤ?さん?。」

「勿論、マリー達も♪可愛い後輩の為ですもの!」

「まあ、夫婦漫才は程々ぐらいがいいけど?妹分と弟分の事だから断る理由はないしや。」

正直怒られるんじゃないかって思った。でも?果南ねえも、マリーさんも、ダイヤさんも?支えてくれるって?言ってくれた?。

あ、やば?泣く。

「うっ?ぐすっ?。」

「は?ちよっ、何で泣いてるのですか!」

「いつもの事なので大丈夫ですよ!」

「ええ?。」

「ダイヤざあん?マリーざあん?果南ねえ??ありがどー?!」

「?千歌っち。」

「どうしたの?」

「彼1日持ち帰ってもいい?」

「へ？」

「めっちゃ甘やかしたい。」

「や、それは？だ、駄目？です。／＼／＼」

「こーら。あんまり後輩を困らせるんじゃないの。」

「あ、あの？本当に大丈夫なんですわよね??」

「大丈夫でずく?!」

「全くそう見えないのは私の目がおかしいんですか？」

千歌が繋げてくれた新しい出会い。

いや、まあ？ほぼ向こうからだったけど?。

どう頑張っても、一学生の出来ることなんて限られてくる。

だから？その時は、素直に頼りたいって。

そう、思えた素敵な出会いだった。

「あ、因みに鞠莉ちゃんはここの理事長だよ。」

「へ？」

「YES♪」

「どうなってるのー？。」

初デートは突然に。

今日は久し振りの土曜日。こんな日はのんびりするに限るなく？。

土曜日なんて毎週あるだろって思うかもしれないが、今日は本当に久し振りの土曜日なんだよ。

だつて？。

「りょーくーん？みーかーんー？。」

「はいはい。さあ、口を開けるのだ！」

「あーん。」

「ほいつ。」

「おいひ〜〜!!♡」

はい、可愛い。

じゃなくつて!!千歌が休日に住るっていうのは最近だと結構久しぶりだ。今日はスクールアイドルの練習も休みたいで、俺の部屋でゴロゴロしている。

そんな俺は餌付け中。

「おーい、バカップル。」

『何〜??』

「うおっ、遂に2人で認めやがった?。アンタ達休日なのに部屋でゴロゴロしてるわけ?」

「練習も無いしいいもーん。」

「まあ?特に予定も無いしね?。」

「天気もいいしデートでもしてくれば?」

デート?デートかあ?。

でも俺達結構2人で?2人で??

あれ?付き合ってからデートした事?無くない?

「行こうっ、千歌!!」

「うわあ!?!何!?!何!?!」

「俺達?付き合ってから2人でデートした事?無い?。旅しかしてない?。」

「??確かに。四六時中一緒だから忘れてたよ。」

「さり気なくバカツプルアピールすな。」

「行こうりょーくん!準備しよう!!」

「そうしよう!!」

そうと決まればさっさと着替えて?。

「あの？千歌？」

「なーに？」

「前もやったけど？着替えれないな〜って、思ったり？」

「??あ／／／ご、ごめん！今出るからっ!!／／／」

うん、久しぶりすぎて忘れてたんだなきつと。そういう事にしておこう。決してここで俺の着替えを見たいとかそういう事じゃないと思う。そんな事になったら俺が大変だ。

着替えを終わって千歌の部屋の前に行き、付き合う前の事を思い出す。確かあの時はパイ斯拉が衝撃的過ぎたんだよなあ？今回もそうだったらどうしようか。

幸せ。

「千歌く、準備でき？」

「わーーーーー!!／／／」

「失礼しました〜?。」

ヤバイヤバイヤバイ。

パイ斯拉の事で頭がいっぱいだった?!

何が幸せだバカ涼介!!

?今日は白だったなあ。

「ねえ。」

「ひいつ!!」

「千歌この間旅館でなんて言ったっけ？」

「ノ、ノックをしろと?!」

「りよーくんなんて言った？」

「ノックをしますと言いましたっ!」

「だよね? 自分でするって言ったよね??」

「はいっ! 馬鹿な男でごめんなさいっ!!」

「3度目はさあ? 無いからね?」

「すみませんでしたあっ!!」

後ろでドアが締まる音がする。

本当に怖いやつだった?。ラッキースケベなんてもうやらない。絶対やらない。

「?終わったよ//」

「は、はい?。」

さっきまでの冷たい声とは裏腹に、いつも通りの可愛らしい声。なんかもう?あの瞬間だけ別人みたいになってるよね?。

あ、パイストラ。

久し振りのお出かけと相まって、今日は沼津まで足を運ぶことにした。通学の時にも思っただけど、ここから沼津までバスでも結構時間がかかる。まあ普段なら宗弥が途中で乗ってくるし暇はしないんだけど、今日は千歌がずっと居るんだ。暇になることは無いし、まさか休日で宗弥が乗るなんてことは――

「あれ？涼介じゃん。」

クソおおおおおおおつ！！！！

「2人でデートですかい？」

「そうだよー！♪」

「あいや、それじゃああんまりお邪魔できませんなあ。」

「何してんだよこんな休日に？」

「いやいや、ちよつと沼津まで用事がな??」

「ふくん?。」

「本当だから、そんな目をするのを止める。後見せつけるんじゃない。」

ほぼ無意識で千歌の手を取っていた。

当然だろう?付き合う前に散々妬かせられたんだから?。

「買い物かなんかか?」

「ん?残念ながら?。この間善子に格ゲーでコテンパンにされたから、そのリベンジ

マッチー！」

「ああ？成程。アイツ強いだろ？」

「正直舐めてた。ま、取り敢えず沼津まで行ったらバイバイだから、それまで辛抱してくれよ。」

「別にそんなんじゃねーし。」

「ならそろそろ手を離してやらないと、お前か千歌さんのどつちかキyun死するんじゃないか？」

「??手?」

そういえば握りっぱなしだった。目線を上げて千歌の方を見ると、真っ赤になりながらプルプルしている。

この間キsまでしたのに、未だに手を繋ぐとガチ照れモードに入ってしまうのは、新鮮ですなあ?。

本人曰く、体と体が接触するのはまだ恥ずかしいって言ってた。

なんかいやらしい。

「えっ?と。ごめん千歌、そろそろ離れた方が良くないよね?」

「ダメっ!／／／」

「え?」

「あつ、やつ、違くて?その?うう?／＼／＼」

「分かつてる。分かつてます。何も言わなくて結構ですから!」

思いつきりニヤけてるであろう顔は反対側の窓の方へ向ける。何も言っていないし何もしてないのに、さつきより握る力が強くなるつてのは?そういう事ですよね?!

「はいはい、ご馳走様でした。後はお2人でごゆっくり?。」

そんな言葉だけを投げかけ、宗弥は墮天して行つた。

墮天して行くつていい言葉だよなあ?。

「さてさて、これからどうしますか?姐さん。」

「ふっふっふ、実はもう決めてあるのです!!」

「な、何だつて!?!あの千歌が事前に予定を決めているだつて!?!」

「失礼な!私だつてちゃんと考えるよ!?!折角の、デ、デート?なんだし?／＼／＼」

んんんんんんつ!!

「じゃ、じゃあ行こつつか!俺楽しみだなあー!!」

「それじゃあしゅっぱーつ!!♪」

彼女に手を引かれてやつて来たのは喫茶店。まずはお茶しようじゃないかという事です。すね。

ん?ここつて確か?あの時の?。

「みかんパフェが食べたくなったのだよ。」

「なるほど。」

「いらつしやいませ！2名様ですな？」

あの時助けてくれた店員さん？やっぱりここは、前千歌と出かけた時に寄った喫茶店だ。

ふっ？まさかこんな形で再び訪れる事になるうはな？これもまた運命——

「りよーくん置いてくよ？」

「待って!!」

いつの間にか案内されていた。しかも同じ席に？今だから気付くけど、ここカウンターから丸見えじゃない？カップルさんが周りにいっぱいだけどそういう席なの？

「千歌、何食べる？」

「みかんパフェ！」

「そうでした。」

「りよーくんは良いの？」

「千歌の貰うから珈琲で。」

「そういう事サラツと言うんだもんなあ？変わっちゃったなありよーくん？およよ？」

「その泣き方初めて聞いたよ。それに、関係が変わっただけで俺は変わってないよ？な

んなら好きだった人とここに来て嬉しきのあまりいつでも泣ける。」

「ここで泣くのは勘弁だよ？」

そう？人の本質は変わらないんだ。だったら素直な泣き虫小僧のままいた方がいいじゃないか。だってそれが？俺っていう人間で——

「お待たせしました♪」

「待ってましたっ!!」

「?うん。知ってたよ。」

あの時助けてくれた店員さんはニコニコしながらパフェを持ってきてくれる。

どうやら今日は深く考えたらいけない日みたいだ？だってタイミングが？うつ?。

「はい、りょーくん!」

「へ?な、何が?」

「何って?食べないの?」

「食べます。」

「じゃあはい!あ〜ん?♡」

やっぱりそういう事ですよねっ!!でもさ?未だに恥ずかしいんです?なんかこう、『食べさせてあげる♪』っていう感じが!とつても!恥ずかしいんですっ!!

前回は良かったから大丈夫だと思ってた。けど今回は明らかに違う事が一つある?。

『?????』
『♪』
周りの暖かい視線が、痛い。暖かいのに痛い。

店員さんもカップルさん達も揃いも揃ってどうしたんですか!? 何でそんなにキラキラした目で見つめてくるんですか!?

こんなに見られてたら流石の千歌も?。

『??』
『??』
『??』

にこやかに笑いながら耳は真っ赤。絶対気付いてる。

「ち、千歌?? 気付いてるなら? 止めた方が?。」

「そうしたいけど? ここまで来ちゃったから戻るに戻れない? / / /」

四面楚歌。発進したのはいいものの、ブレーキが付いていなかった特急高海号沼津行き。

ならその電車は誰が止める? 俺が止めるしかないじゃないか!

「あくん!?? 美味しいでふ。」

噛んだ。

『わああ??』
『♪』

クソツ！クソうツ！！顔が熱い！俺に食べさせた方も顔が真っ赤じゃないか！

しかし如何せん俺だけ食べるのもアレだよな、うん。

こうなったらサービスゲームだよ。

ごめん、千歌。後でなんか奢るから。

真っ赤になって俯く彼女からスプーンを受け取り、パフェを一口掬う。勿論フレッツ

シユなミカンを添えて。

「ほい！」

「えっ!?ま、まさか?ほんとに?／＼／＼」

「本当に。」

「で、でもこんなに見られてたら恥ずかしいよ?／＼／＼」

「『ここまで来ちゃったから戻るに戻れない』?だっけ?」

「ぐぬぬぬぬ?!／＼／＼?頂きますっ!!／＼／＼」

千歌が半ばヤケクソでスプーンに食らいついた瞬間、店内には歓声と感嘆の音が響き渡り、俺達は2人同時に机に突っ伏した。何なんだこの店?いや?悪い気はしないけど
キツ。

何にせよ、満足しましたか皆様?。

いい笑顔ですねお姉さん?鼻血は拭いてください?

この盛大なドッキリ番組じゃないかって思える程の、『非日常』。
千歌はさつきから『ううっ、ううっ？／／』と呟きながら頭にアホ毛をプスプスと刺してくる。

人のこと言えないけど、こんなに照れてるの久し振りに見たかも。

？ 確証はないけど、今日1日身が持たない気がするな。

「??ま、いつか。」

少女の涙には気をつけて

喫茶店で波乱の時間を過ごした俺たち2人は公園のベンチに腰掛けていた。並んで座り、両手で顔を隠しながら休憩中。

色々疲れたんだよ？主にメンタルが。色々とすり減らしたし、周りからのご要望があれだけで終わらなかつたのが一番でかいなあ？。

そしてこの空気。何を話せばいいんですか？誰か教えて偉い人！

考えろ？考えろ、涼介！！

『あのっ!!』

被ったあっ!!

「ち、千歌からどうぞ?！」

「え、あ、じゃあ?あの?。」

緊張か、恥ずかしさか?ほんの少しだけ手汗をかいていたその小さな手が、俺の手をぎゅっと包み込んでくる。

「手?握ってていい、かな?／／／」

「勿論。」

「隠すつもりも無いぐらいニヤけてるね?。」

「え?そう?♪」

そうなりますよ。だって今まで向こうからそんな事一度も言わなかったのに、今日は千歌の方から来てくれたんだよ?嬉しくないわけないさ!

恥ずかしいから口には出さないけどね☆

「何にせよ、今日は大変だなあ?。」

「ねー?どうしたんだろうね。」

「俺達はただ遊びに来ただけ——。」

「だから誤解なんだって!!」

俺達が座ってるベンチの正面。少し離れた所に、1組のカップルがいらっしやった。何やら揉めてる様子ですね。

「もう聞き飽きたわよ、あなたのそんな言い訳っ!!」

「言い訳なもんか!」

「?なんか、壮絶だね。」

「千歌さんや、あまり目を向けてはいけませんよ。」

「うん?分かつては、いるんだけど?。」

そう言いながらも、どこかチラチラと目の前の光景を確認している。まあ気持ちは分かるよ?。ああ言うのつて自分も似たような環境にいますと、どうしても気にしちゃうんだよなあ?不安になるというか何というか?。

ん?俺達別に仲悪くないよな??

「ん?りよーくん、どうかした?」

「へ?な、何で?」

「何か力が強くなったから?。」

「あ?あつはは?。俺達は大丈夫だよなつて、ちよつと心配になつちやつて?あ!でも別にやましい事があるとかじゃなくて、純粋に心配になつただけというか何というか?!!」

何をテンパってるんだよ涼介?焦る事なんか何も無いじゃないか。こんなにアタフタしてたら逆におかしいだろう。

何で俺つてこうなんだろうな??。

「りよーくん。」

「ん?何?」

「ちゅっ♡」

頬に触れる柔らかい感触。

微かに感じたミカンの香りが、体の中へスツと落ちていく。

「?へ?」

「えへへ?ちよつと頑張つてみた♪」

「千歌?。」

「私もあんまり人の事言えないけど?これでもりよーくんの事は分かつてるつもりだよ?だから?そんな顔しないでよ、りよーくん。ね?♪」

そう言つて優しく抱き締めてくれる。

ずっと近くに居て、この人の可愛さにキュンキュンしっぱなしだったけど?やっぱり敵わないな。

一つ年上のお姉さん。ただ隣に居るだけじゃなくて、『隣に居れるように』って思つてるのは?俺だけじゃ無いのかな?。

『???』

?物凄い視線を感じる。

予想はしてた。けどそれ以上に鋭い視線が刺さる。これ、絡まれたくないなあ?。

「俺達にも、あんな頃があつたな?。」

「ふふつ、確かに。でもあの時はあなたが私を抱き締めてくれたじゃない。」

「そりやあ？泣いてる顔させたくなかったし？」

「？ごめんね、キツイ事言っちゃって。」

「いや、俺の方こそ？変な誤解を生むような事しちゃったからさ？ごめんな。」

お、無事解決したようですね。良かった良かった？いや良くない。確かに時間も経ってきたし俺達以外人も居ないけどさ？ここでキスをされるととても困ります。

「ひゃ〜？／＼／＼」

ウチのピュアツピュア少女が覚えたらどうするんですかっ！！両手で顔隠してるけど指の隙間から見てるんですよっ！！

ああ可愛いつ！！

結局？さつきまでの喧嘩が無かったかのようにカップルは何処かへと歩いていった。

『???』

再び訪れる静寂。本当に？どうするんですかこれ？。

「り？りよーくんは、さ？キス？したい？」

「へあっ！ま、ままままあ？したくないと言えば嘘になると言いますか？。」

恥ずかしい話？俺達が阿智村へ泊まりに行った時以来、キスはしていかない。あんまり多くやるものでもないと思っていたし、特別感を持たせたいというのが俺達2人で出した答えだったから。が、しかし——。

「?!?する?お、大人の?キス?／＼／」

俺、死ぬかもしれない。

「大人のつて?ち、千歌さん?どういうのかご存知で?」

「それくらい千歌でも知ってるよ!／＼／し、舌?とか——。」

「わー!わー!!!分かった!OK!!言わなくても大丈夫っ!!」

真つ赤になりながら、必死になって説明しようとする彼女の言葉を止める。何だろう?物凄く恥ずかしくなってきた。このいけないことを言わせてる感?先生、もう直視できません。

ここはなんかこう?クールに?スパツと決めよう。俺の頭から導き出されるベストアンサーは?これだ!!

「?家でなら、したい?かも。」

「つ?そう、なんだ?／＼／」

何がベストアンサーだ馬鹿野郎!素直な欲求ダダ漏れじゃないかよおっ!!

「あ、いや、そんなにマジで考えなくて大丈夫だよっ!?!本当に、千歌に強要したりするわけじゃないしむしろ今の生活で満足というか?!」

「だ、大丈夫っ！私頑張るからっ!!」

「えっ。」

「あ?い、今のは違って?うう?/?/?/?」

「昼間っから何話してんのよ?。」

『わああああああつ?!?!』

後ろから聞こえた声に腰を抜かし、2人揃ってベンチから滑り落ちる。

声の主は、何故ここにいないか分からない堕天使だった。

「驚きすぎじゃない?」

「よ、よよよ善子っ!?!何でここにいるんだよっ!?!」

「何でって?勝利の凱旋よ。」

「?負けたんだな、宗谷。」

「私の14戦14勝。」

「これは酷い。」

そういうやアイツ、めっちゃめっちゃゲーム下手くそだったっけ?。頑張れ我が友よ。道のりは果てしないぞ。

「まあもう少ししたら宗谷も来るだろうし?そっちの邪魔したりしないから安心してよ。」

「いや、別に邪魔というわけじゃ?」

「あ!それじゃあ善子ちゃん達も一緒に回ろうよ!」

「え?」

「皆で回った方が楽しいだろうし、私達も今日は色んな人に振り回されてるといっ
つか何
というか?」

「?良いの?」

「今更畏まるような間柄でも無いだろ?それに?俺はお前の事、邪魔だつて思っ
たこと
は1度も無いよ。」

そう言つて難しい顔をしている墮天使へと笑いかける。真面目な顔をしてると美形
なのは認めるけど、今の顔は別の事で悩んでる顔だ。昔っから世話になつてる人に?
そんな顔して欲しくはないよな。

「???そういう所よ?。」

「ん?何か言つた?」

「何も言つてないわよ、泣き虫小僧。」

「んだとこのスクールアイドル!」

「ぶつ?相変わらず悪口下手ね。じゃあ今日はお言葉に甘えるわ。」

「善子ちゃんが丁寧な言葉を使つてる?!」

「な、何よ！私だつてそんなくらは使うわよ！／＼／＼」

「随分気まぐれな墮天使だなあ？」

「あ、千歌ちよつとお手洗いに行つてくる。」

『りよ。』

「うわつ、ビックリした？そこハモるんだ。すぐ戻つてくるね!!」

そう言つてトテトテ小走りでトイレへと向かつていった。ここに残されたのは俺達2人。千歌とは別の意味での静寂が訪れる。

「どう？上手くいってる？」

「んあ？ああ？バツチシ。」

「その割に浮かない顔してるわね。」

「これはキュン死しそうな時の顔だ。」

「あつそ。」

2人になつた途端随分素つ気ないじゃないか。どうしたと言うんだ今日の墮天使様は。

「幸せ？」

「？幸せだよ。自分があの人とこんな関係になれるなんて思つてなかつたからさ？」

「??涼介は、さ。どんな時思つたの？千歌さんが？ううん、誰かの事が好きなんだつて

?。」

「? お前本当に善子か?」

「何よ?。」

「いや? らしくないなつて思つてさ。」

「私だつて女子なんですけど。そういう事気にしたりとか、人並みにはするわよ? 墮天使だけだ。」

「そつか?。まあどんな時つて言われたら難しいけどさ? その人の事が頭から離れない時、かな。」

いつからか、ずっと千歌の事を考えるようになっていた。彼女の一举手一投足、言葉の一つ一つに一喜一憂して? 楽しかったんだ。この人の側に居ることが出来たら、どれだけ幸せなんだろうつて? そんな事ばつか考えてたつて。

「難しく考えるものでもないんじゃないかな? いや、散々悩んでた俺が言うのも説得力0 だけどさ?。」

「? そう。まあそうよね。ねえ、涼介? 私は——。」

その口から発せられた言葉が分からなかった。理解するまで時間がかかつてしまつたんだ。

余りにも信じられない言葉は、まるで刃物のような鋭さを持って俺の心に突き刺さる。

そして？これが招いた事態を、俺はまだ知らなかった。



「よし、髪型もOK！」

身だしなみを整えてりよーくんの元へと戻る。色んな事があつてちよつと疲れちゃったけど、このぐらいいじゃへこたれないもん！

明日からまた練習も始まつちやうから、今日の内にりよーくと沢山遊んでおかなきゃね♪

ベンチがあつた方へ歩いていくと、善子ちゃんとりよーくんの2人が何か話してる。2人とも真剣な顔だけど？何話してるんだらう？

「お待たせ——」。

「私は好きよ。」

近くにあつた物陰に隠れる。

あれ？何で私？隠れたんだろう。自分の手は震えていた。何でか分からない。

好きって？言つたよね？善子ちゃん。

何に対して？何でりよーくんと面を向かつて？

分かんない？分かんないよ？。で、でもりよーくんは違うよね！だつてさつきまで2人で遊んでたんだし、私達は付き合つてて？。

「俺も好きだよ。」

「っ!!」

今の声は誰の声？

「？違う。」

違わない。だつてずっと聞いてきた声じゃん。

「違う、違う?!あの声はっ!!」

あの声は?りよーくん。

「あの声は?違う、よ?。」

目の前で起きた事が信じられなくて?耳で聞いた言葉を認めたくなくて?。物陰で蹲る。

目からは涙が出ていた。

泣きたいわけじゃないのに。

りよーくんの事疑ってるわけじゃないのに。

「何で??何で、止まんないの?!!」

どれだけ擦っても涙は止まらない。胸の痛みは無くならない。

善子ちゃんはりよーくんの事が好きなんだ。

りよーくん、も???

目を擦る表紙に、近くにあつた草に腕がぶつかる。

「誰?」

「っ!」

「千歌?!」

全速力で家まで走り出す。この場にいるのが辛かった。一刻も早く立ち去りたかった。

だって、苦しいんだよ?。

こんなの知りたくなかった?!

「ちよっ、千歌っ!?!」

りよーくんの声が聞こえる。ごめんね、りよーくん? 気づけてあげられなくて? やっぱり千歌じゃ? 駄目、だったよね?。

涙を拭うことも忘れて、ひたすら走り続けた。

「千歌?!」

「おっす、涼介。喧嘩でもしたか？」

「宗弥？いや、別にしてないけど？」

「そうなのか？千歌さんすげえ泣いてたけど？」

「？まさかつ！」

「善子？」

「???ごめん、涼介？多分、不味いことになったかも。」

コワレタモノ

「私は——涼介の事好きよ。」

「お、サンキュー。」

「??。」

「??え?。」

「何よ。」

「いや、だって?え?友達としてでしょ?。」

「???はあ。」

「な、なんだよ?。」

「言わなきゃ分かんないかしら?手を繋ぎたい、デートをしたい、隣で笑っていたい、キスもしたいし——」

「ちよ、待つて待つて!ちよつと一旦止まってくれ!ひっひっふー?!」

理解するのに時間がかかった?。だ、だって普通そうだろ?もう付き合ってる人が居るって分かってて、今幸せか?なんて聞かれて?その後が好きって言われて?。そりゃあ友達として〜とか思うに決まってる。

「?マジなやつ、だよな。」

「大マジよ。」

「だ、だつてお前?俺が振られてしよげてる時?!

動揺を隠せず、言葉を上手く発せず。そんな情けない部分丸出しの俺をよそに、善子は顔を上へと向ける。その横顔は、見た事のない顔?笑つてるのか、呆れてるのか、どうしようもなく投げ出しているのか?泣きたいのか。

そんな顔をしている事に、こいつは気づいてるのか。今何を感じて、何を考えているかは分からない。ただ?何となく、胸が痛かった。

「?なんで?だよ。」

なんで教えてくれなかったのか。

なんでこのタイミングなのか。

なんで?俺の背中を押したのか。

聞きたいことは山ほどあれど、その疑問達がすんなり口から出ることは無かった。

「?自分でも思った。何してんだらうつて。あの時、勢いに任せて全部言つてしまえば良かったつて。でも?そんな勇氣なんか無いわよ。ずっと見てきた相手が、自分の事そういう目で見ていない。どれだけ親しくても、友達以上恋人未満の関係が変わることは無い。」

「そんな事?。」

「無いつて言う? アンタが??」

「??。」

「ぶっ。」

「んだよ?。」

「さあ? でもね? 涼介。」

上を向いていた善子は、俺の方へと向き直る。いつものヘラヘラした笑いでも無く、墮天使ヨハネとしてでも無く、1人の年相応の少女として微笑んでいた。

「感謝してる。」

「??。」

「あの時言つた事は本当。私は、アンタに助けられた。アンタが居たから、自分で居られた。誰かを好きになる辛さも、嬉しさも、沢山教えて貰つた。だから、その? ありがとうね。」

「? ゴメンな。」

俺が千歌の事をずっと焦がれていたように、コイツも俺の事を見ていた。気にかけてくれていた。同じ経験をしてきた俺達の全く違う点? それは、好きな人が誰かに恋をしていたかどうか。

出会い方とか、過ぎた時間とか?どこかで1つ違ってたら、俺は?なんて答えていただろうな。

「あつはは!何謝つてんのよらしくもない!」

「うるせえやい?。」

「でも?一つ、約束して?」

「何だ?」

「——千歌さんにセクハラしたらぶ〇殺すから。」

「切り替えの速度早すぎんだろっ!!」

振った俺にこんな事言う権利はないかもしれないけどな?

少なくともたつた今好きだって言った相手にだぞ??

普通『ぶ〇殺す』宣言なんか出るかつ!!!

「はっ!こつちはとつくに振り切れてんよ泣き虫小僧。」

「んだとこの?!?!ツンデレ。」

「ふふっ?相変わらず笑口下手なのよ、ばーか♪」

?言えるかよ。振り切ったとか言いながら、目に涙なんか浮かべたヤツに。

10秒だろうか、20秒だろうか、そんなコイツの顔を見てられなくて、善子が再び話しかけてくるまでの間、ほんの少しだけそっぽを向いた。

「まあでも？何か分かるわ。千歌さんに惹かれる理由。」

「マジぼん？」

「マジぼん。あの人、自分は普通だつてよく言うけれど？普通の人自分からアイドルやるだなんて言い出さないわよ。」

「それな。何だかんだ言い出したら最後まで止まらないし、その上周りによく見てるし？。」

「真顔でサラツと言えないようなことも言うし、何故かついて行つちやうカリスマみたいなものもある。ああいう所？私は好きよ。」

「俺も好きだよ。」

そこまで言った時、近くの草むらから物音がした。何かか？いや、誰かが草むらで動いた音。

「誰？」

「っ！」

「千歌?！」

それは、トイレに行ったはずの恋人。その人は、こちらを向くこと無くそのまま走り

出した。

「ちよつ、千歌っ!？」

声を掛けるでも無く、連絡があつたわけでもなく、まるで俺達だけをこの場に残すかのように走り去つたのだ。急にどうしてしまつたのかは分からない。それでも？それが異常だつて事ぐらいはすぐに分かつた。

「千歌??」

「おつす、涼介。喧嘩でもしたか？」

「宗弥? いや、別にしてないけど?。」

「そうなのか? 千歌さんすげえ泣いてたけど?。」

泣い? てた? ?? え、どうして? 俺らが褒めちぎり過ぎたから?

「?まさかつ!」

「善子?」

「??ごめん、涼介? 多分、不味いことになつたかも?。」

「え?。」

折角涙を拭いたのに、コイツはまた泣きそうな顔で俺に全てを教えてくれた。確証な
んか無い。

それでも、このタイミングで、一番あつてはなら無かつた事。

一番千歌を傷つけてしまうかもしれない事。

それが何を意味するかも知らずに、ただ彼女の後を走り出した。歯車が既に軋んでいるのにも気付かずに。



『千歌さん？私とアンタが両思いだって思ってる？。』

手当り次第、千歌の行きそうな場所を走る。息が切れても、膝が笑っても、脇腹が痛くなっても？走る。

善子が悪いだなんて言うつもりはさらさら無い。アイツはただ、自分がどれだけ辛くなっただけケジメをつけるつもりで俺に本心をぶつけてきたんだ。

それに――

『こんな？つもり無かったの？？ゴメン、涼介？ごめん、なさい?!』

あの泣き顔が頭から離れない。

人前であんなに泣く善子を見るのは初めてだった。だからこそ？アイツにも、千歌に

も、そんな顔をさせてしまった自分に、殺意にも似た苛立ちを覚える。

誤解だとか、彼女の早とちりだとか、そんなの関係無い。

俺は千歌を悲しませた。

隣に居ると再三自分に言い聞かせたのに、彼女を？泣かせてしまった。

もしこの世界がゲームの様だと都合の良い世界なら、いつペン死んでセーブポイントから、つていうのを迷わず選んだのにな。

「はあつ？はあつ？ん？メール？梨子さん？」

差出し人は千歌の同級生？桜内 梨子さんからだつた。

『涼介君、こんにちは。よっちゃんから話は聞きました。千歌ちゃん、さつき家に帰ってきてたよ。』

「家？か。」

十千万？きつとあそこには志満ねえも美渡ねえも居るはずだ。自分の大切な妹が恋人とデートに行つて、泣きながら帰ってきた？あの2人が黙つてるわけない、よな？。

再び走り出し、十千万の前へと着く。

俺が戻つてくることを知つてたかのように、美渡ねえが扉の横で待つていた。

「あの——」

「おかえり。」

「あ、うん？千歌、は??」

「部屋に居る。全く？今度は何やらかしたのさ?。」

「言い訳にしか？聞こえないと思うけど?。」

それから美渡ねえに全てを話した。善子に告白された件に関して、アイツの名前を伏せることにした。人の気持ちを誰彼構わず言う事には抵抗があったから。

「タイミング悪いと言うかなんというか？まあ、行きなよ。今の千歌に伝わるか分からないけどね。」

「うん?。」

歩き出し、家の中へ入ろうとした時、美渡ねえに腕を掴まれた。昔から喧嘩して、千歌を良く見てきた一人の優しいお姉ちゃんが目が、俺に突き刺さる。

「あんなんでも、アタシらの妹だ。分かってるな?。」

「?うん。ゴメン、美渡ねえ?。」

「志満も私も、今回ばかりは手伝えない。やるだけやってきな。」

そう言つて、美渡ねえは先に家の中へと戻つていった。やるだけやる?それはつまり?。

千歌の部屋の前に立ち、深呼吸する。気配はするけど物音はしない。それでも、この部屋に在るであろう大事な人へ言葉を掛ける。

「?千歌。話を、したいんだ。その?ごめん?こんな事になつて?。あ、あのさ!今回の事はちよつとした誤解というか?」

「——いで。」

「だ、だからさ!その事情も含めて全部説明したいんだ!本当に善子とは何も無いって言うのとか、今の状態とか?千歌、俺は——。」

「来ないでつ!!!」

「え?ち、千歌??」

「ごめんね?今は、会いたくない。その声も、顔も、君の全部が?辛いんだ?。あつはは?ダメな恋人でゴメンね?私には、何も、無い?から?。」

「そんな事無い!俺には千歌が必要で?」

「大、丈夫?!善子ちゃんが?居てくれる、から?。」

美渡ねえの言葉から、きつとこうなつてしまうかもしれないとは、思っていた。俺の言葉も、今の彼女には届かないと。

いや?俺の言葉だからこそ?今の千歌には、きつと届く事は無い。覚悟はしてきた?つもりだったのに——

「気づけなくて?ごめんね??りよーちゃん。」

どんな否定の言葉よりも、それは刃物のように心に突き刺さる。

どんな拒絶の言葉よりも、それは銃弾のように心に穴を開ける。

彼女が呼び方を戻した。それが意味する事は、俺達にとつては大切な事。

だって、彼女が言ってくれたんだ。

告白して、告白されて、返事を聴いて？ 恥ずかしくなりながらも、折角付き合ってたんだから呼び方を変えようって?!

そう言ってくれたのに？ それが戻った。

俺達は？ もう、そういう関係では無くなってしまうた。

「ごめん、りよーちゃん?。」

やめて?。

「今は、りよーちゃんの事、分かん? ない?。」

やめてくれ?。

「一人にして、欲しい？かな？そしたら、りよーちゃんの事、また？応援、出来るから？」

ぽつぽつと絞り出すように、彼女は声を絞り出していった。その言葉の一つ一つが、心臓を、心を、大切な何もかもを握り潰していく。

扉の前で力無く膝を付き、口を開く。

それは言つてはいけない言葉だった。分からないはず無かつたのに？今の彼女に、ただ追い討ちをかけるだけの言葉だつて分かつていたのに？！

「分かつ、た？ごめん？ごめんね？千歌ねえっ?!」

それだけ言つて、逃げるように走り出す。

階段を駆け下りて、十千万を出て？行く先なんて無かつたけど、それしか出来なかつた。

だつて？そうでもしないと、おかしくなりそうだったから。自分がしてしまった過ちが怖くて、辛くて、逃げて、逃げて、逃げて？じやなきや、押し潰されると思った。

あの言葉に。

あの涙に。

階段を降りる時間こえた、悲鳴にも似た彼女の泣き叫ぶ声に。
涙が出ないのは何故だろう。

あれほど泣き虫小僧と呼ばれていたのに？あれほど彼女の為に色んな事で泣いてきたのに？なんで？。

「??:メール?母さん?」

悩んでいた俺を他所に、海外へ出張していた母親からのメールが入る。仕事に一区切りついて日本へ帰るから、居候生活も終わりになるとの話だった。

それはつまり？彼女と身体的な距離も離れるという事。

会うことも？無いのかもされない？誤解を生み続けたまま。

きっと少し前の俺ならば抗議をしたのだろう。

それでも？

『分かった。』

誰に相談することも無く、それが間違いだと微塵も疑いもせず、そのメールに答えを

返した。

俺は、もう隣に居られないから。

それが、お互いの為だと言いついて聞かせて、再び当てもなく、ただただ歩き続けた。

止まったのは彼女だろうか。

止まったのは自分だろうか。

それとも——。

もう、俺達の歯車は？動きを止めていた。

※泣き虫だっていいじゃない

暗くなった部屋の中。

少し前なら見慣れていた光景が視界いっぱい広がる。自分の部屋。天井と部屋と、窓の外を交互に見る時間。一人部屋で、隣の部屋なんか無い。無論、好きだった人も居ない。

住み慣れたはずの自分の家なのに、どこか遠い場所のようにすら感じる。それはきつと自分の心がそうあるからだ。

彼女を傷つけ、何を言う事も無くこんな所へ逃げてきた。この部屋は独房だ。

それならそれでいい。いつその事ここに閉じ込めてくれた方が有難い。美渡ねえも、志満ねえも、A q o u r s のメンバーも？

散々好きだ何だの言っておいて、俺は千歌を傷つけた。

隣に居ることすら投げ出してしまった。

「??何、してんだろ。」

あの日から3日。俺は携帯の電源を切りっぱなしにしていた。メールも、着信も、携帯に表示される名前が怖かった。誰であっても、上手く話をする自身が無かった。

誰であつてもだ。

俺の背中を押してくれた善子も、学校で気を使つたり今でもA q o u r sのメンバーと繋がつてくれている宗弥も?。

久しぶりに起動した携帯電話。着信履歴は? 35件。

色んな人から連絡が入っていた。梨子さん、果南ねえ、ダイヤさんにマリーさん? 善子? 宗弥?。

分かつてはいた。それでも? あつて欲しかった名前は、そこに無かつた。

ははっ? 自分から距離を取つた様なものなのに、なんて身勝手なんだろう。なんて汚いんだろう。

「涼介? どこ行くの?」

「ちよつとその辺ブラついてくる。」

「遅くならないようにね。」

母さんからの言葉に流し返事で了承し、家を出る。急に帰ってきた母さんは、特に何を話すわけでも無く出張に行く前の日常を過ごしている。

別に気にして欲しいわけじゃないし、この家に帰つてくると言つたのは俺だ。

夕暮れに染まる道を1人で歩く。あちこちで夕飯の支度をしている匂いや、友達と笑いながら家へと帰る子供達。そんな当たり前前の光景が広がるこの街で、1人歩く自分が

酷く惨めだった。

気を紛らわすためか、はたまた無意識の内にそうしていたのかは分からないが、俺は公園へと来ていた。子供達が帰った後のすつかり静かになってしまった公園。改修も幾らかかされているため、所々真新しい所があるが、俺の好きな場所が変わりは無かった。公園のブランコに腰掛け、何をするわけでもなく時間を浪費していく。そんな俺の足元へやってきたのは、1匹の猫だった。

「?どうしたんだお前。もうお家に帰らなきや怒られるぞ。」

「みやあゝ。」

その猫は丸々とした体に、どこかふてぶてしい顔をしている猫だった。手を差し出すと、その体つきからは想像出来ないような動きで、俺の頭の上へと鎮座する。

「?重いんだけど。」

「みやあつ!」

「?聞いちや、くれないか。」

「つたくもう?フーさんっては何処に??あれ?フーさん?」

公園の入口に一人の男の人が立っていた。俺より少し背の高いであろうその人は、こつちの方へと歩いてくる。

フーさんという名前に心当たりは無いし、ましてや俺がフーさんなわけ無い。

この人は何を言ってるんだらうか。

「やつと見つけたよフリーさん？さあ、家へ帰るよ。」

「にやあつ。」

「こら、ワガママ言わない！その少年にも迷惑がかかるでしょ!？」

「にやあゝつ!!フシャーッ!!」

「いったあ!!殴ったね!?!もうおこだぞ僕は。泣いて謝つても許さないからな?？」

「あの?。」

「ごめんよ少年！今からコイツを引つべがすから！ぐぬぬぬぬぬぬつ?!」

？変な人だ。

とりあえず、地味にフリーさん？の爪が引つ掛かつて痛いから待つて欲しいんだけどな。

「駄目だあつ！何で今日はこんなに意固地なんだよ?。」

「あの?別に大丈夫です。予定とか無いので。」

「そうかい??!ごめんよ本当に。はあ?こりやあまた怒られるなあ?。大体顔も知らない子を名前だけで探してくれつてのが無理あるつて?。」

「誰か探してるんですか?」

「あつはは?まあ、ね。この辺にいるらしいんだけど、『滝沢 涼介』君って知ってるか

な?」

その名前が出た瞬間、思わず体がビクついてしまった。

この人は、俺を知っている。俺は初めて見るつてのに、何で?。

「??そっか。フーさん、知ってたんだね。」

「?何の用ですか?」

「か——えつと? 幼馴染みに言われてね。君が悩んでるだろうから、同じ男同士で話を聞いて欲しいってさ。」

「そう、なんですか??。」

「言わなくても大丈夫だよ。」

「へ?」

この人は今なんて? 言わなくていい? って言ったか? えつ、あれ? じゃあ何で?。

「?何で俺を探してたんですか?」

「どんな子か気になつてね! かな——幼馴染みも随分と心配してたと言うか可愛がつてたと言うか? まあそんな感じだったし。」

「なら尚更このまま帰ると不味いんじゃない?。」

「君は聞いて欲しいのかい?」

「それは?。」

すぐに答えられなかった。答えなんかどうの昔に出てる癖に、また一回、強がった。

「? 滝沢 涼介君。感受性豊かで、泣き虫で、良い意味でも悪い意味でも真つ直ぐな少年!」

「な、何ですか急に?」

「これ、全部僕の幼馴染みから聞いたことなんだ。合ってる?」

「? 分かりません。」

「まあそうだよ。でもさ、君の事幼馴染みから聞いて、自分で君と会って、話をして、分かったよ。本当、その通りの子だなって。」

「? 馬鹿にしています?」

「まさか! でもさ、君の性格も? 良い所も悪い所も、全部こんな風に流れてるって、ちよつと不公平だと思わない?」

悪巧みを企んだ子供のような笑顔で、この人はそう口にした。確かに俺はこの人の事を知らないのに、この人はその幼馴染みさんから色々と聞いているらしい。

「だから、ここで僕達が会った事はお互い秘密にしておこう!」

「え? いや、でも?。」

「君の気持ちを僕が無神経に聞いていい理由も無いしね。その代わり君がもし僕に聞きたいことがあるのなら、何でも答えてあげるよ。」

「?それこそ不公平じゃないですか。」

「あつ、それもそうか。はははっ!じゃあ君が前を向けたら、その時は僕も聞きたい事聞くからそれでチャラって事で!♪」

「??じゃあ?一つだけ、聞かせて欲しいです。」

「良いとも!」

「——大切な人を傷つけた事、ありますか?」

「分かつてる?こんなのはただの八つ当たりだ。この人の笑い顔が羨ましくて、今の自分を見たくなくて、皮肉めいた言葉しか出てこない。」

「無いよ。」

「?ですよね。」

「じゃあ君の悩みはその大切な誰かに対するものなんだね。」

「??俺は傷つけました。好きな人を。背中を押してくれた親友を。謝ることも、向き合う事も出来ない?こんな意気地無し、そばに居ない方が良いって思うのに、まだ期待してる自分がどこかに居て?もう、分かんないんです?。でも、俺は皆のそばにいる資格なんか無いって事だけは分かる。俺は居ちゃいけないんだ?だから——。」

「恋愛ドラマを見て毎回思うんだけどさ。」

俺の言葉を遮るように、彼は口を開いた。その顔にさつきまでの笑顔は無く、どこか遠くを見つめるように、ただ前を向いていた。

「喧嘩した時とかシリアスな場面でよく言うよね。『資格が無い』って言葉。僕はずっと不思議だったんだ？誰がそんな事決めるんだろう、何を根拠にそんな風に思うんだろうって。」

「？自分以外居ないんじゃないですか？」

「そうだろうね。でもさ？相手がその人の事を『資格が無い』って思っていないかったら？それは只の被害妄想だ。」

「っ?!」

「まあドラマと現実の違いから一概には言えないだろうけどね。それでも、好きな人にも一回距離を置かれて諦めるくらいなら？『それで終わり』ってことじゃないかな。」

「じゃあっ!!」

今ので確信した。

この人は、俺の？俺が犯した事について言っている。

そんなのは独り善がりだと。

単なる妄想だと。

自分でも分かるぐらい、頭に來ていた。

この人の言う事が正しい事だから。的を射られて、何も言い返せなくて、もう八つ当たりする事しか残されていないから。

「俺はどうしろって言うんですか?!人を傷つけた事の無い貴方は、このクソみたいな俺にどうしろって言うんですか?!」

「??僕がああしろこうしろ言ったら、君はしてくれるのかい?それはそれで良いけど、それで君が変わるわけじゃない。君の根底にある芯は変わったりしない。涼介君は、もう少し自分の事信用してあげた方が——。」

「もううんざりなんですよっ!!こんな性格じゃなかったら、彼女を傷つけることもなかった!俺が変われていたら、あんなこと言わずに済んだっ!!あんな?泣かせる事も、無かったんだ?。」

心が苦しい。縄で縛りつけられたかのように、ギリギリと胸を締めつけてくる。さつき出会ったばかりの人に本当の事を言われ、ただ八つ当たりして?何で?何で俺は、こんな事しか?。

「今の涼介君は、僕の幼馴染みそっくりだ。」

「?え?」

「その子には2人の親友が居てね。子供の頃から毎日の様に一緒に過ごしてた。でも、その内の1人が海外へ留学する事になって離れ離れになったんだ。当の本人は嫌だと言ったんだけど、僕の幼馴染みはその親友を突き放した。友達の将来を願って、今の君のように『これで良かった』と思ってるね。」

「??。」

「けど、それからの彼女は見てられなかった。平気なフリして、笑って過ごして?本当は寂しがり屋な癖に。誰も居ない所でたった1人で泣いていた癖に?だから、そばに居てあげたかった。親に説明して、彼女の爺ちゃんに頭を下げて居候させてもらって?。今の君は、その時の彼女に本当にそっくりだよ。」

「俺は??。」

「?別に自分のした事が彼女を救っただなんて押しつけがましいことは思わない。けど、支える為が変わろうとは思った。助ける為に、笑ってようって思った。」

いつの間にか俺の頭から彼の膝の上に座っていたフーさんを撫でながら、彼は静かにそう言った。

それは、大切な誰かに向ける目だ。今の俺には真似出来ない目。

この人は?その幼馴染みの事?。

「自分を変えるって、きつと気持ちを我慢することじゃないと思う。『人を傷つけるワガママだ』って自分じゃ思うかもしれないけれど、それで前を向ける人もいる。それを望んでる人もいる。だから伝えるんだ。一緒に泣こう。一緒に喧嘩しよう。一緒に笑い合おう——『君は、1人じゃないよ。』って。誰かとそうして過ごしたら、なりたいた分に変われるんじゃないかな?」

何の迷いもなく、彼はそう答えた。元々迷いとかそういうのは無かったのかもしれない?でも、この人の言ってる事が、不思議と自分の中でハマった感じがした。

前を向く勇氣は、まだ無い。彼女と?千歌と向き合う気持ちの整理は、まだ出来てない。

それでも、自分が何をすべきなのかは分かった気がした。

「?俺、伝えたいです。大切な人に。」

「そっか?じゃあちゃんと一言なくちやだね。じゃあ僕はそろそろ帰るよ。帰りが遅くなるよと幼馴染みに怒られるからね。」

「あの!名前?聞いてもいいですか?」

「あずまこ東 昂太?淡島からやって来た、只のパシリだよ。」

「淡島??パシリ?」

『だってこの間、嬉しそうに男の人と歩いてたじゃん。』

『や、ちがつ!!／／あれ?は〜?パシリだからっ!／／』

果南ねえと遊んだ日の記憶。果南ねえの反応?パシリ?まさか、昂太さんの幼馴染つて?!

「あの一!」

「ん?」

「松浦果南を?果南ねえを、知ってますか?」

「——知ってるよ?大切な人だもん。バイバイ、涼介君♪」

どこか寂しげな顔をした昂太さんは公園を後にし、俺は一人、夕暮れの公園に立ち尽くしていた。



昂太さんに話を聞き、考える時間は出来た。俺がしなければならぬ事も、分かった気はする。それでも、前に進む一歩だけが出なかった。

誰かに連絡をしようかと思つた。怒られるのは分かつてるし、それが当然だとも思つた。

なのに、何故手の震えが止まらないのだろう。

何故俺はこの期に及んで躊躇っているのだろう。

1人で出来る事なんて、もう――。

『~~~~~♪』

「つ!!着信?? 曜、さん?」

いきなり鳴り出した携帯電話にビクついたものの、画面に表示された着信相手の名前を確認する。

渡辺 曜さん? 果南ねえと一緒に、ずっと千歌ねえと過ごしていた幼馴染みの人?。

「出なきや? 電話?。」

スマホの画面をスライドするだけ。それだけでいいんだ。なのに指は震えたまま、動いてくれない。

10秒ほど、コールは鳴り続け、部屋の中は再び静寂に包まれる。電話に出られなかった。

違うだろ？出なかったんだ。

また逃げた。

いつだってこうじゃないか。泣き虫で、強がりで、口先ばかりで、何も出来ないクソガキのままじゃないか。昂太さんに教えて貰って前を向こうとした。なのにこれじゃあ、意味が無いじゃないか。

胸の痛みが増し、誤魔化すかのように携帯を部屋で投げ捨てる。そんな臆病者はっ？百も承知だ。

だけど？

「どうしたら？いいんだよ?。」

もう、分からなかった。彼女が来るまでは。

「——じゃあ、いい加減電話に出て欲しいな。」

汗をかき、肩で息を切らしながら彼女は立っていた。疲れ果てた顔は、彼女がどれだ

け走って来たのかを物語っている。

「曜、さん?？」

「居るなら返事してくれないと、曜ちゃん寂しいぞー？」

「?ごめん。なんでこんな所に?」

「涼介君のお母さんが入れてくれてね。隣、良いかな。」

こちらが了承する前に、私服姿の彼女は隣に腰掛けた。何を聞かれるのか、何の用があつて来たのか、彼女は何も口にしない。

ただ一言――。

「お腹空いた。」

「自由ですか。」

「しようがないじゃーん。誰かさんが音信不通で、今日もずーっと走りっぱなしだったんだよ?」

「?すみません。」

「?ねえ?私、珍しく怒ってるんだ。」

静かにそう言う彼女に、少しだけ肩が震える。

大切な幼馴染みを傷つけられて、その本人が逃げ出して?考えるまでもない。彼女は俺に怒りの言葉をぶつけに来た。

絶対許さないと。

もう、千歌には関わるなど。

それを言いに来たんだ。

「涼介君さあ？ダメじゃん、千歌ちゃんをあのままにしちゃ。ああなった千歌ちゃんは大変なんだよ？ちゃんんと2人でごめんなさいしてね。」

「??えっ?」

「何?まさか謝れないとか?」

「ち、違うよ!その?関わるなって?言いに来たんじゃないの?」

「へ?あつははははっ!考え過ぎだよ!!そんなわけないじゃん!!」

お腹を抱えながら、曜さんは俺の布団で転げ回っていた。

どうして。

どうしてそんなに笑ってられるのか。

どうして罵声をぶつけてくれないのか。

俺は、曜さんに取っても大切な人をあんなに泣かせたのに。

距離を取られたのが怖くて、それが正しいって強がって彼女から距離を置いたのにな? どうして?。

「あく笑った笑った?。泣き虫小僧は随分被害妄想が激しいね♪幾ら親友で幼馴染みで

も、2人の話にどうこう言う権利なんて無いよ。」

「じゃあ? 何で、来たんですか?」

「電話も繋がらないし、友達君に聞いても『今はそつとしておいて下さい』って言われるし? もうそろそろ泣いちゃってる頃かなーって思ってた。」

「??泣いてなんか、いないです。あの日からずつと? 涙が出てこなくて?。」

「嘘。今だっって泣いてる癖に。」

「そんなわけ——。」

彼女がこよなく愛する海のように。どこまでも深い群青の瞳が、じつと俺の顔を見つめてくる。心の中まで見透かされそうなのその眼に耐えきれず、顔を逸らすことしか出来ない。

それでも、彼女は言葉を続けた。

「ずつとずつと泣いてる? 涼介君の心が、悲鳴を上げてる。」

「ち、違?。」

「どうしてそんな顔をしてるの? 何がそんなに怖いのか?」

「俺はっ?。」

「君の考えてる事、全然分かんないよ。だから——ぶっちゃけトーークツ!!しよっか♪」

頬に両手を添えられ、子供のような笑顔で彼女はそう言ってきた。曇りも、憤りも、何一つ無い純粋な眼で。それから俺の顔を見ないように気を使ってくれたのか、彼女はそのまま俺の後ろに背中を預けるようにして座ってきた。

「ぶっちゃけ??」

「そう! ここには千歌ちゃんも、果南ちゃんも居ないから? 言えない事、あるんじゃないかな?」

「?でも? また、迷惑かけるから?。」

「そんな事考えなくていいんだよ。君はあんまり思っていないかもだけど? 私だって千歌ちゃんと同じ年なんだから、もっと頼って欲しいの。じやなきや? 寂しいじゃん??。」

顔が見えないから、今曜さんがどんな顔をしてるかは分からない。でも、悲しげな声だった。

また繰り返すのか?

何も出来ない癖に強がって、1人で来てくれたこの人を傷つけて追い返す。

本当に、それで――。

「?曜さん。」

「??何?」

「俺、怖いんだ？千歌ねえに会うのが。」

「？うん。」

「千歌ねえがさ？言ってくれたんだよ。付き合ってたんだから呼び方を変えようって。死ぬほど嬉しかった。恥ずかしかったけど、同時に幸せだって思えたんだ。でも、あの時——」

『気づけなくて？ごめんね？？りよーちゃん。』

「あの時思ったよ。もう、隣には居られないって？千歌ねえは？距離を、置こうとしてるんだって？。」

「？うん。」

自分の手に、涙が落ちた。

あんなに出てこなかった涙は、俺の言葉と、本心と一緒に、ようやく流れる事が許されたかのように溢れ出てくる。

「それから、俺は逃げたんだ。逃げて、逃げて、逃げて？でも逃げれなかった。今でも、あの人の泣き声が聞こえるんだ？隣に居るって？約束、したのにつ？！」

「？涼介君は、どうしたい？」

「?謝りたい?また、あの人の隣に居たい?!また、隣に居て欲しい?!けど、進めないんだよ!!震えが、止まらないんだよ?。」

両手で目を押さえても、擦つても、涙が止まることは無い。元々泣き虫な性格なのに、ここ最近は全く涙が出なかつたんだ。どれほど出るんだろう。どれほど強がついていたんだろう。

もう、全部流れてしまえばいい。そうすれば、俺はきつと空っぽになる。空っぽになつたら、きつと気が楽になる。新しい何かが埋めてくれる。

「涼介君、変わつてないね。昔つから泣き虫で、怖がりで、1人だと前を向けない。前に進めない。」

そうだよ、曜さん。俺はあの頃のままだ。そんな事は自分が一番良く分かつてるんだよ。だから変わらなくちやいけないんじゃないか?。

「涼介君、変わつちや駄目だよ。」

「え?!」

彼女が口にした言葉は、俺がなりたかつたものを否定する言葉だつた。

理解が追いつかない。追いつく筈がない。

自分がこんな性格だから、色んな人を巻き込んだんじやないのか？

俺が変われないから、大切な人を傷つけたんじやないのか？

「小さい時から、涼介君は誰かの為に泣いてた。私が君と同じくらい泣き虫だった時も、私より泣いちゃって？気付いたら、涙なんか止まってた。逆に涼介君の事泣き止ませようと必死になっちゃったりね。」

「それは？。」

「優しいんだよ、涼介君は。言葉を掛ける前に気持ちを共感してくれて？自覚は無いかもしれないけど、私も善子ちゃんも、千歌ちゃんも？助けられてるんだよ？だから、君はそのままの君でいて欲しいな。」

初めて言われた。

自分が泣いて助けられる誰かが本当に居ただなんて。

泣き虫で、怖がりで？そんな自分でいてくれだなんて。

「自分を変えるってね？？良い事ばっかりじゃ無いんだ。泣き虫が治っても、大事な何かを無くしちゃうことだってある。無理に変えようとして、強がって、1人で全部出来るんだって思ってた？それが空回りして、失敗しちゃう事もあるし。」

「でもっ?!でも?!。」

「?!涼介君には、こうなって欲しくないから。」

「曜、さん??」

こうなつて欲しくない。

その一言だけ、彼女の声色が確かに低くなつた。まるで、誰かに言い聞かせているみたいに?。

「変わるのが悪いって言つてるわけじゃないよ。でも、変わることですら自分の中の大切な物を無くさないで。」

「俺? 本当に、このままで良いの?」

「うん。」

「迷惑、かけるよ?」

「私も、果南ちゃんも、皆も? そんな事気にしないよ。多分千歌ちゃんが誰よりも気にしないとと思うけどね♪」

「うぐつ? ひつく? ごめんつ? 心配かけて、ごめんつ曜姉ちゃん!」

「?? あつはは? 久しぶりに聞いたな、それ。良いよ。目一杯泣いちゃえ。泣いて、泣いて、もう涙が出なくなつてちゃんと前を向けたら、明日千歌ちゃんの所に行こう。」

お互い背中合わせのはずなのに、暖かった。

涙を流すつて、こんなに簡単な事だつたんだな。昂太さんに曜姉ちゃん? 連絡をくれ

た、関わってきた人達。ただ言えば良かった。言えれば良かった。

『助けて』って。

泣いた。思いつきり泣いた。我慢してた分も、貯めてきた分も、全部、全部、流した。きつと、あの人の前に立つたらまた泣いてしまうのかもしれない。でも？それならそれでいいと思えたんだ。強がらなくて良いなら。そのままの俺で居ていいなら。

泣き虫小僧のまま、彼女と向き合おう。

もう二度と、離すもんか。

歯車が止まったのなら動かせばいい。

彼女が止まったのなら俺が動けばいい。

俺が止まったならもう一度動く為の力を借りればいい。

曜姉ちゃんに。果南ねえに。ダイヤさん、マリーさん、善子に宗弥に昂太さん。それから？千歌。

君はもう1人じゃない。

俺はもう1人じゃない。

ふたりミカン

——大丈夫。涼介なら出来るよ。

薄暗い部屋で目を覚ます。時刻は朝の5時。秋も深まった最近の朝は、何かと冷える日が多くなってきた。どうしてか頬が湿っている感覚を確かめようと手を当てると、どうやら俺は泣いていたらしい。昨日曜姉ちゃんが家に来た時に散々泣いた筈なのに、まだ泣き足りないようだ。

励ましてくれた曜姉ちゃんは俺の布団で今も夢の中だが？。

「むにゃ？。」

「？似た者同士だよなあ。」

どんな夢を見てるか分からないが、涎を垂らしながら幸せそうな顔で熟睡している。今の彼女を見てると、昨日のお姉さんつぶりが嘘だったんじゃないかとすら思えてくるよ。

「クラッカー？。」

「ううん?。」

「乾パン? サツマイモ?。」

「ううつ? パサパサ? 口が?。」

因みに寝てる彼女に嫌いな食べ物を耳打ちするとすぐ夢に出るのだと、昔果南ねえに聞いたことがある。そして散々楽しませてもらった後は必ずハツピーにしてあげる事が大切だ、とも教わった。即ち、嫌いな食べ物の逆を耳打ちすればいいんだ。

「??ハンバーグ。」

「ふへっ♡」

反応の早さよ。

昨日泣いてるところをかなり見られたから、俺も何かからかう為のネタが欲しいと思っていたところ。つて事で一枚パシヤリ、携帯でその緩い寝顔を頂くとしよう。

この人のお陰で、最後の1歩を踏み出そうと思えた。この人のお陰で、自分がそのままで居ていいんだと認めて貰えた気がした。

だから?。

「ありがと、曜姉ちゃん。」

「むにゃ?。」

「因みにもし起きてるんなら早めに布団から出て貰えると有難いな?。今日自分が寝る

場所に女の子の匂いがつく、俺は変に緊張して寝られなくなるよ。」

「?お、おはよう／＼／」

「おはよ。」

どこから起きてたのかは分からないけど、少なくとも俺が女の子独特の甘い香りで寝られなくなるってことは分かってくれたらしい。赤くなつてそっぽを向くぐらいなら途中で普通に起きてくれれば良かったのに?。

昔とは全然違う彼女だったが、別段嫌だとか、絡みにくいというのは無かった。むしろ昔よりフレンドリーというか夢中になると周りが見えなくなつてると言うか? 勿論良い意味で、だ。

「顔洗ってくるから、二度寝以外でゆっくりしてよ。」

「ん?分かった? Z z z z?。」

「いや、ちよつ? まあいつか。」

階段を降りると、台所からはリズムミカルに音を刻む包丁の音と、味噌汁のいい香りが漂ってきた。5時を少し過ぎたばかりだというのに、今日の母さんは準備が早い。何か用事あるとか言つてたつけ?

? 駄目だ、思い出せない。

顔を洗つて部屋へ戻ろうとした時、そろそろ朝ご飯だから曜姉ちゃんを起こしてき

て、と伝言も預かった。ちゃんと起きていればありがたいけど。

「曜姉ちゃん、そろそろご飯だつて。」

「うん！今行くよー！」

「あり？普通に起きてる。」

「あはは！一回起きたらそう何回も寝れないよ。私も顔洗って行くから、先行つててくれ。」

背中をグイグイ押され、部屋から追い出されてしまった。？俺の部屋なんだけどなあ。

下に降りてきた曜姉ちゃんは泊まる気満々だったのか、昨日とは違う私服に着替えて台所へとやって来た。

そう言えば、この3人で朝食を食べるのも久しぶりかもしれない。昔は、曜姉ちゃんも家が沼津だったから事ある毎に遊びに来てたりもしたつけ。

「ん？どうかした？」

懐かしい思い出がフラッシュバックする。こうして見ると、この人はなんら変わってなんかいない。あの時のままの、曜姉ちゃんだ。

「？いや、何も。」

見た目は変わっても中身までは変わらない。何だか、この人や昴太さんが言っていた事

?分かる気がする。

朝食を済ませ、片付けを手伝うと言っていた曜姉ちゃんを何とか2階に上がらせた。めっちゃ抵抗されたのが意外だったけど、今日ばかりは許して欲しい。

だって母さんの目が笑ってなかったもの。

『お前だけ残れ』って言ってたもの。

「?何の用?」

食器を拭きながら、そう尋ねる。

「アンタ、千歌ちゃんと上手くいってないんでしょ。」

「えっ、あ、いや、ん??ん??誰から聞いた!?!」

「さあ?まあアンタの事だから泣き虫治そうと必死こいて空回りした挙句、自暴自棄になつた上で曜ちゃんに世話なつたとかそんな所でしょ?」

「物分り良すぎんだろ!!何で隣に居ましたってぐらい知ってんだよ!?!」

「あつはは!!そんなこつたらうと思つたよ♪」

誰だ?曜姉ちゃん??いやいや、あの人がウチのオカンと話してる所は見えてないし?千歌ねえ、は、無いよな?。まあなんにせよ、だ。

「それで?何か話があつたんじやないの?」

「まあ?ね。アンタ、自分の事が好きかい?」

手の止まる俺を他所に、いつもと何一つ変わらない母さんがそう口にする。

「?分らない。昨日までは、嫌いだったよ。」

「泣き虫だから?」

「それもあるし、大事な所でビシツと決められないとことか? 決めた事守れない所とか。」

「?ちよつとだけ、昔話しようか。アンタのその泣き癖は、誰かさん譲りなんだよ。私が惚れた男にね。」

「それって?。」

父さん、だ。

でもそんな筈? だって父さんは、俺が泥だらけになつて帰つてきたり遅くまで遊んだ時も母さん以上に怒つてたし?。

「そいつは? 何かあつたらすぐ泣くし、ビビリだし、部屋の隅でいじけるし、女子からの押しに弱いし出張やら旅やらであちこちフラフラするし? あ、何かイライラしてきた。」

「返しに困る愚痴は止めてくれよ?。」

「ふふつ? でも、誰よりも優しかった。私が辛い時も、イラついてる時も、失敗した時も? 笑つて隣に居てくれた。悔しいぐらい、アンタはそいつに良く似てるよ。だから涼介? アンタは、アンタのままが良い。ありのままの自分から目を背けちゃ駄目。」

「何だよ、いきなり。」

「? 私達の一人息子、だからね。」

優しい声。

いつもは豪快で勝気な母さんなのに、久々に見たその顔が気恥ずかしくなり、目を背けてしまった。

「? そうですか。」

「変わろうと思ってもアンタは無理だよ。あの男の血を引いてるんじや、この先一生そのままだね。」

「息子の決意を何だと思ってるのさ。」

「それは親が決めることじゃないからね。それに? アンタ知らないかもしれないけど、父さんアンタの事叱った後ウザイぐらい私に、『どうしよう! 泣かせたかな! 嫌われたかな! 』これが嫌になって不良になったらどうしよう! 』 つつって泣いてんだからね?」

「?? ありえねー?。」

知りたくなかった親父の秘密を知った、高校1年の今日この頃。

「まあでも、私の血も引いてんだから自身持ちな! 今死ぬ程悩んで目一杯全力でやれば、もう二度と大切な人を泣かせたりしないから。」

「母さん?。」

「出来なきやシめる。」

「母さん。」

話は済んだ、とても言うように、母さんは手で向こうへ行けという合図を出してくる。久しぶりに出張から帰ってきて、またこの町で暮らすというのに？何故か、その後ろ姿は遠くなってしまうのではないかと思ってしまった。

階段を上り、すっかり待たせてしまった曜姉ちゃんの様子を見るべく部屋の扉を開ける。

彼女は、布団に座ったままにこやかに笑っていた。

「話は終わった？」

「うん。終わったよ。」

「そっか??まだ、怖い?」

昨日俺が逸らしてしまった群青の瞳が、同じように見つめてきた。彼女から踏み入るのではなく、きつと俺が素直に言えるように?そんな彼女が作ってくれた静かな時間だけが、部屋の中を埋め尽くしていた。

「??いつだって怖いよ。俺にとってあの人は、憧れだから。」

そんな彼女に、これから会いに行く。自分の言葉でちゃんと伝える。怖くないわけが無い。

けど――。

「じゃあそんな涼介君に、少し緊張が和らぐ事を教えようかな!」

自分の部屋にでもいるかのように大きく伸びをした後、部屋の窓を開けた曜姉ちゃんがこちらを振り向く。

「千歌ちゃん、もう君と善子ちゃんの事勘違いして無いよ。」

「え? な、何で?。」

「善子ちゃんが全部千歌ちゃんに説明してくれたんだ。君の事好きだった事も、振られた事も、その後千歌ちゃんの事褒めちぎってた事も。だから、千歌ちゃんの早とちりつて事に纏まったんだよ。」

「アイツ?。」

「でもそこからが大変で? 涼介君に酷いこと言っちゃったってわんわん泣いちやうし落ち込むしミカンは食べなくなるし?。練習どころじゃないからって言って、今千歌ちゃんを休ませてるんだ。」

泣いてた?? 千歌ねえが、俺の為に?。

なのに俺は、昨日までずっと彼女の為に涙を流せなかったのか??

俺は?。

「そつ、か?。俺、言えるかな? ちゃんと、自分の言葉で? もし変な事言ってまた傷つけ

たりしたら?!」

「大丈夫。」

「でも曜姉ちゃん?!」

「しつかりしろ涼介つ!!」

ぶつちやけトークの時と同じように、曜姉ちゃんは両手で俺の頬に手を当ててきた。

涼介。

この人に、初めてそう呼ばれた。

「自分を信じてあげて。千歌ちゃんを信じてあげて。今千歌ちゃんの隣に居られるのは、私でも果南ちゃんでもA q o u r sの皆でも無い。君なの!」

「で、でも?。」

「君の感じてる怖さを、私は理解してあげられない?。けど、『でも』とか『もし』とか『たら』とか『れば』とか!どうなるか分からない未来を怖がって、手の届く筈の明日を手放しちやダメなんだよ!!」

何で?手が震えてるのさ。

何で?曜姉ちゃんが泣いてるのさ。

「私、悔しいんだよ？千歌ちゃんが悩んでるのに何も出来ない？君が苦しんでるのに力になれない？皆の誤解を解いてくれた善子ちゃんの涙も、止められない?!」

「曜姉ちゃん?。」

「ごめん?ごめんね、涼介?。」

頬にあつた手は、俺の胸元へと力無く落ちていく。

この人は、ずっと悩んでいたんだ。自分じや皆の力になれないと、1人でずっとずっと考えて?。」

なんだ。

やっぱり変わってなんかいないじゃないか。

優しくて、泣き虫で、1人で抱え込んで?曜姉ちゃんは、あの時のままの曜姉ちゃんだ。俺に出来る事は——。

「?俺は、救われたよ。曜姉ちゃんに色んな事を教えて貰った。千歌の為に泣く事が出来なかつた強がりの俺に前を向かせてくれた。?顔、あげて?。」

「ううううううううっ!!涼介えええっ?!」

「ええ?思つた以上にポロポロじゃんか?。」

何だろう?少なくとも話題のアイドルとして知人以外に見せてはいけない顔をしているな?やべえ、笑いそう。

「ぶっ。」

「何だよお?。」

「あつははは!無理!もう無理!!曜姉ちゃんボロツボロ!!」

「うるさいいっつ!!ウダウダ言わずに早く千歌ちゃんの所に走っていけーっ!!」

高飛び込み記録保持者兼水泳部エース兼スクールアイドルの無慈悲な蹴りが俺の尻を襲う!!これはヤバイ?!声に出せない位の威力?!きつとこれを『御褒美です!』つていう人も中には居るんだろうけど、生憎俺にそっちの趣味は無い。

両手で頬を思いつきり叩き、俺は目の前で泣いてくれたもう一人の姉に対して笑いかけた。

「曜姉ちゃん??行つてきます!!」

「グスっ?行つてらっしやい、涼介!」

お互い右手を指先まで伸ばし、額へ。いつからこうしたかは忘れてしまったけれど、これは涙もろかった2人の約束。どちらかが泣いて、どちらかが泣き止んで?そうして前を向いて頑張ろうつて思えたら言葉にするんだ。

魔法の言葉を。

『ヨーソローツ!!』



走る。ひたすら走る。行かなくてはならない場所へ。待っている人が居てくれる場所へ。

沼津から内浦まではそこそこ距離があるし、バスに乗っても時間はかかってしまう。それでも、俺は走るんだ。走らなくちゃいけないんだ。

迷うな。

迷うなっ。

迷うなっ！

海沿いの道。見慣れた小さな田舎町の光景。それらは全て俺の後ろへと流れ過ぎて行く。あの人と過ごしてきた全ての場所、時間？それら全ては過去なんだ。思い出なんだ。捨てようとは考えちゃいない。けど、それは俺が立ち止まる理由にはならない。曜姉ちゃんと言っていた『手の届く筈の明日』？俺はそれを掴みたい。千歌と？また2人で色んな事をして、色んな物を見て？一緒に過ごしたい。

「あれ？久しぶり、涼介君。」

千歌ねえの家までもう少しという所で、梨子さんと出会った。この人も、俺の携帯に連絡をくれていた1人である。千歌から色々話は聞いていたし、直接的に話をした事とかはあまり無いけど？一瞬驚いていたから、待ち伏せてことは無いのかもしれない

い。

ただ？怖い。

「どうしたの？」

「あの？」

「ひよつとして、千歌ちゃんに会いに来たのかな。」

「えつと？そう、です。」

「ふーん？いまごろ？」

「っ？。」

梨子さんの言葉に、俺は何も言えなかつた。それが凶星以外の何でもないからだ。人と連絡を取らず、一人で抱え込んで、ようやく踏み出した間に？千歌は、どれだけ悲しんでいたんだろう。どれだけ一人で泣いていたんだろう。隣に住んでいる梨子さんが、それを分からないはずが無いんだ。だからこそ、きつと怒ってるだろう？今更何をしに来たんだと。

「ずっと連絡もくれないで、皆に心配かけて、千歌ちゃんとも向き合わなかつたキミが？
どうして今になって？」

「？向き合いたかつたんです。逃げないでちゃんと言葉を交わして？あの人の気持ちを聞きたかつた」

「どれだけ千歌ちゃんが泣いていたか分かる？涼介君が家を出てから、毎晩毎晩啜り泣く声が聞こえてたんだよ。ひよつとしたら、もう涼介君の事だつて受け入れてくれないかもしれない。」

「それでも、俺は諦めたくありません。泣かせておいて？自分勝手な事ばつか言ってるのは分かってます？けど！俺、諦めたくないんです！例え許して貰えなくてもいい！恋人でいられないと言われてもいい！！ただもう一度??会いたい、んですっ。」

目尻に温かいものが貯まる。

エゴの塊。

自己中心的な考え。

大丈夫と言ってくれた曜姉ちゃんを疑うわけじゃない。けど梨子さんが言ってる事もきつと正しいんだと思う。逃げ出して、傷つけて、今になってゴメンだなんて都合が良すぎるのも分かっているつもりだ？けど、このまま終わりたくなんかない。終わる気なんてサラサラ無い!!

「俺はまだ何にも伝えてない？あの人がどうしたいかも聞いていない。だから？その？なんて言ったらいいか分からないですけど？俺っ——。」

言葉を続ける前に、梨子さんが人差し指を俺の口に当てがった。その顔に、怒りは無い？彼女はただ微笑んでいた。

「ごめんなさい、ちよつとだけからかつちやった♪」

「?へ?」

「涼介君が変わってたらどうしようかと思ってたけど?心配いらなかったみたい。良くも悪くも真つ直ぐな眼?千歌ちゃんや曜ちゃんが夢中になるのも分かるな。」

「あの?すみません、最後の方がよく聞こえなかつたんですが?。」

「何でもなーいよ♪」

「いてつ。」

当てられた人差し指は、そのままオデコにデコピンを放った。千歌ねえからは都会美人で恥ずかしがり屋で、結構怒りっぽいって聞いてたけど?あんまりそんな感じはしないかも、なんて言ったら?千歌ねえに怒られるかな?

「ねえ涼介君。」

「はい。」

「千歌ちゃん、練習休みつばなしだから?『そろそろ来ないと、ライブに間に合わないよ』って伝えておいてね♪」

「それは?。」

「連れてきて、くれるんだよね?」

「ああ?そっか。」

曜姉ちゃんも、梨子さんも？信じて、くれてんだ？。最初から俺のやる事なんて決まってた？やらないやいけない事があつたのに、なんで気づけなかつたんだろうな。

笑おう。

笑つて、ちゃんと言おう。

「勿論ですつ!!」

「ふふつ、じゃあ後は宜しくね？ばいばい♪」

手を振り歩き出す梨子さんの背中を見送り、俺はまた前を向く。もう迷わない——
だから??。

「待つてて、千歌。」



あれからどれだけの日々が流れたんだろう。

どれだけ泣いてしまつたんだろう。

どれだけ叫んでも、彼は戻つてこなかった。

どれだけ名前を呼んでも、名前を呼び返してはくれなかった。あの笑顔を見る事は無くなった。

彼はもう？ここには居ない。

どうして？どうしてあんな事言ってしまったんだらうって何度も後悔した。呼び方を変えようって言ったのは他でもない、私自身なのに。

私の早とちりで全部おかしくなっちゃったんだ？。

——分かつ、た？ごめん？ごめんね？千歌ねえっ?!

？苦しそう、だった。絞り出したみたいに。出したくないものを無理矢理出した様に。出させたのは？私だ。

あの声を思い出す度に涙が流れる。胸が苦しい。自分自身が首を絞めてるみたいに息がしづらいんだ。

枕元に並んだ2つのテイベア。青色と橙色のクマ。仲良く手を繋いだ2匹が羨ましいってすら思えてくる。彼がくれたプレゼント？付き合う前、彼がどんな気持ちでこれを渡してくれたのか、今なら分かる。いつだって怖がりのままで、すぐに泣いちゃう彼がくれたんだもん。多分、本当に怖くて、緊張して、それでも勇気を出してくれたん

だよ。

だから余計に辛いんだ？ それを見る度に思い出しちゃうから？。 私はそれを全部？
否定しちやつたんだ。

きつと？ もう？！。

「？やだ？？やだ、よ？。」

元に戻る事は——無い。

「？会いたいよ？？りよーくん？？」

もう二度と叶う事の無い願いは静かに部屋の中で木霊し、消えていく。部屋の中で座り込んで、ただテイベアを抱き締めることしか出来なかった。

それだけだと？ 思ってた。

「？うん。ごめんね、千歌。」

だから今だつて本当は分かってないんだ。

誰かが私を後ろから抱き締めてくれたこと——曜ちゃん、梨子ちゃん、果南ちゃん

?きつとA q o u r sの誰かだろうって思うのに、涙が止まらなくて。

だって?ずつと一緒居たんだもん。息を切らして物凄く疲れてる筈なのに、懐かしいその声私の中の苦しさを全部どこかへ連れていってくれる。あの頃よりガツチリした身体に包まれて、その温かさに全部を預けたくなる。

奇跡とか、偶然とか、そんなのはどうでも良かった。

彼はそこに居る。

会いたかった人はここに居る。

それだけで、涙が止まることは無かった。



温かい?ずつと、ずつとこうしていたい。

部屋の前で、彼女の言葉を聞いた。

扉を開けたら、本当の彼女が居た。

自分が彼女にあんな事を言わせてしまった事。ここまで苦しめてしまった事。それが無かった事になるだなんて思わないし、思いたくもない。けど——何でだろうな。

気付いたら、俺は彼女を抱き締めていた。

腕の中でただ泣き続ける彼女に、言葉をかけるでもなく、ずっと。

「千歌?ごめん。あんな事言つて、連絡もしないで勝手に居なくなつて?今更戻つてきて、本当にごめんね。」

「りよう?く?。」

「俺、やっぱり駄目な奴だった。一人で抱え込んだつて分かるわけなかったのに、勝手に強がつて、出来るつて思つて、きつと千歌の前から居なくなる事が、最善なんだつて決めつけて?それでこんなになるまで俺は、千歌の事を苦しめて?どうしようもない馬鹿野郎だ。」

「違?わたし、が?聞かなかつたから?。」

「前にも言つたでしょ?我慢も、耐える必要も無い。千歌が一人で抱えこむ必要なんてどこにも無いんだよ?。もつとワガママ言つてもいいし、ハッキリ俺に文句の2つや3つ言つてくれたつていいんだ。」

泣きじやくる彼女は、全てをまた自分のせいにしてしようとしている。自分の罪として背負い込もうとしている。けど、それは違う?この人が悪いだなんて思うものか。違う。絶対に違う。

「俺は変わりたかつた。泣き虫な性格も、ウジウジした弱い部分も無くして強くなりたかつた。千歌の隣を歩きたかつたから?。俺にとって千歌は、いつだつて太陽みたいにな

キラキラしてて、強くて、憧れだった。その隣を歩きたかったんだよ。でも？変われなかった。ただ千歌を悲しませるだけ悲しませて、何一つ変わる事なんて出来やしなかったんだ。」

「りよー、くん?。」

「もつと沢山言いたい事がある。もつと沢山行きたい場所もある。けど俺は、いつだって怖がりで、泣き虫で?ろくに言いたい事なんて言えなかった?。」

「そんな事——!。」

「だからっ!!」

腕の中で、彼女の小さな身体がピクツと動いた。言葉を吐き出す度に目尻に涙が溜まっていくのを感じる。

あの日、俺達の歯車は動きを止めてしまった。何よりも大切だった2人の呼び名は元の関係に戻り、俺達も恋人と言うことは無くなってしまったんだ。

なら、もう1度伝えるだけだ。何度でも。どれだけカッコ悪くても。

それが?ずっと変わる事の無い俺の気持ちだから。

「今、言いたいんだ。ちゃんと言葉にして、俺は千歌に伝えたい?!。」

「??? うん。」

腕の中でこちらを向いた彼女の顔は、薄暗い部屋の中でも分かるほど目元が涙で真っ

赤になっていた。その辛そうな顔がどこか痛々しくて、そんな風にしてしまったのは自分なのだという罪悪感で胸が締め付けられる。

「っ？俺、こんなだし、馬鹿だし、弱虫だし、泣き虫だし？今だってこんなボロボロになっただけか伝えられないけれど？けど俺は、まだ諦めたくない！千歌の隣で一緒に笑って、一緒に泣いて、たまに喧嘩して？そうやってこれから先を過ごしていきたい。2人で色んな景色を見ていきたい。幸せだって言っただけで過ごせる明日を掴みたい?!」

—— 誰かとそうして過ごしたら、なりたいたい自分に変わるんじゃないかな？

—— 変わることで自分の中の大切な物を無くさないで。

—— アンタは、アンタのままが良い。ありのままの自分から目を背けちゃ駄目。

そうだ？俺は俺だ。どれだけ取り繕っても、そう簡単に変わることはないんだ。き虫小僧のままだ。

それならそれでいい。

変わるって言うのは、きっと自分を否定することじゃないんだ。

あの時の言葉を。

あの時の気持ち。

俺は肯定したい。

「千歌？俺？俺、は？。」

なあ？いつかの俺。

『ち、ちかねえ!!』

『なーに？りよーちゃん。』

『あのね？僕？僕——！』

あの日の続き？？掴んでみせるよ。

「？？僕は、貴方の事が大好きです。これから先、同じ道を？同じ明日を、隣で一緒に過ごして下さい。」

いつかの告白とは違う、涙でまみれたかつこ悪い告白。それでも、それで良かった。だって？これが、自分なんだから。

「う? あつ?? りよー、くん?。」

「うん。」

「りよーくん? りよーくんつ?!」

「うん? 僕はここだよ、千歌。」

涙を流す彼女の頬に片手を添える。自分の手なのに、それを大切そうに両手で包み込んでくれる彼女が愛おしかった。熱を帯びた頬を伝う冷たい涙。その曖昧な温度が、心地良い。

気付いたら、彼女のそばに寄っていた。

ちよっぴり千歌は驚いた顔をしていたけれど、すぐに照れながらも目を閉じてくれた。それは、彼女からの精一杯の返事? 言葉は要らない。お互い、何を思っているのかは伝わっているんだから。

1度優しく抱きしめた後、彼女の唇へとそっと口付けを交わした。

「? ありがとう、千歌。」

「あう? あ、あの? りよー、くん? // //」

「ん? どうしたの?」

「あの? えっと、その? // //」

何だか様子がおかしい。確かに初めてキスした時と状況は違うし、久しぶりっていう

のもあるけど?。」

「?ごめん／＼／」

「?何の事——」

開いた口は、再び千歌に塞がれてしまった。それは良い?彼女からしてくれるとは思ってなかったし、嬉しさの方が大きかったから。

ただ一つ違ったのは、それが普通のキスじゃなかった事だ。

「んっ?んむ?。」

「ちよ、千、歌?!んっ?!」

ぎゅっと抱き締められ身動きが取れず、開いた口の中に何かが入ってきた。熱を帯び、小さくても恥ずかしながら必死で動くそれは、彼女からの気持ちだったのかもしれない。

『???する?お、大人の?キス?／＼／』

?そう言えば、そういう事言ってたっけなあ。

そうじゃないっ!!嬉しいけどそうじゃないっ!!ヤバイ、頭が真っ白になる?!

「ぶはっ?はあっ?はあっ?千歌?」

「はーっ? はーっ? ご、ごめんね?? 何、か? んっ?? 身体、変、なの?。」
 「えっ、あ、ちよ。」

「なんかね? 頭、ふわふわして? 身体がポカポカするんだあ? ね、りよーくん。もっかいしよ?!!♡」

ヤバイ。ヤバイヤバイヤバイヤバイ。

何だこの超弩級メチャカワ生物は。そりゃ刺激的だったよ? なんかもう? 俺の理性さんももれなくMIRAI TICKET片手に内浦の海へLand ing a c t i o n してしまいそうだよ?

けど忘れないで頂きたい。この人は一つ年上の女性で、姉のように慕っていた彼女です。それなのにこの破壊力、誰だつて壊れますよええ。

つまり——。

「ふあ?..♡」

俺が押し倒したとしても、これは不可抗力と言うことで? 丸く収めてください。

「なるべく? 頑張ります?。」

「何で敬語なの?? ていうか、顔真っ赤だよ♡」

「勘弁して下さいっ?!」

心臓の鼓動が速度を増していく。多分、手も震えてる。何でこの人は結構余裕なんだ

ろう? くつ、何か悔しい?!

???
???

「? ねえ、千歌もしかして?。」

「んっ? / / /」

「耳熱い? 余裕、無いでしょ。」

「だって? 恥ずかし、くて?? / / /」

「? そつかあ? じゃあ、同じだね。耳柔らかか?。」

「ふっ、うあ? な、何で? 耳ばかり?! / / /」

彼女の耳をふにふにと弄り、たまに優しく撫でる。その度に彼女の身体はピクリと震える。

狡いと言われるだろうか。後で怒られるだろうか。それならそれでどうにかしよう。お願いしてきたのはこの人の方だし?。

「言っておくけど? もう、簡単には止められないからね。」

「その? お手柔らかかに?? お願いします / / /」

至近距離でこの人の声を聞くと、頭がどうにかなりそうだった。久しぶりに聞いた声。久しぶりに感じた体温。俺の手と、俺の服をキュツと握る小さな手。顔を徐々に近づけ、額をくつつける。後数ミリで唇が当たる距離まで近づき——

「??なん、で??／／／」

動きを止めた。

「?こうしてたら千歌がしてくれるかなって。」

「?さつきしたもん。」

「じゃあ?やめる?」

「うう?なんかりよーくん変だよ?／／／」

「男子高校生の純情を甘く見ないでよ?」

「あはは、何それ?。じ、じゃあ?んつ。」

優しい感触が唇に触れた。

「ありがとう、千歌♪」

「うう?うう?うう?／／／?!!」

ああ?ダメだ。この人の一挙手一投足、言動の全てが俺を狂わせていく。この人が愛
おいしい。何で俺は離れてしまったんだろう?俺はこの人が好きだ。大好きなんだ。

もう離れるもんか。

2度と?離すもんか。

「りよーくん??どうしたの??」

「??千歌。大好きだよ。」

「へ?あ、あの?なんか目が??//」

「覚悟してて。もう?逃がさないから。」

千歌へとキスをする。普段より長いキス?彼女が息継ぎをしたのを確認してから、そのまま上唇と下唇を交互に甘噛みしていく。

左手でずつと耳を触っていたから、彼女の身体は徐々にその反応を顕にしてきた。きつともう少しだと思う。後は彼女が受け入れてくれるのを待つだけ?。キスをしながら2、3回彼女の唇を舌でノックする。反応が無ければ甘噛みをしてノック。これの繰り返しだった。

キスなんて千歌と以外した事ない。だからこれが正しいのかどうかなんて分からな
い?でも、だからこそ千歌が受け入れてくれるまで何もしないんだ。

君は——勝手だって怒るかな?そんな事無いって否定してくれるかな?でも、これが俺なりのケジメ?ちゃんと決めた事だから。

「ふはっ?はあっ?はあっ?!!////んあっ?う?う?♡」

息継ぎの度に出る嬌声。

これは麻薬だ。

一度知ってしまったえばきつとダメになる。頭の中が真っ白になって、他の事は考えられなくなる。だから本当は止めないといけない。どこかで区切りをつけないといけない筈なのに?。

必死に俺へしがみつくと君の身体が。

抵抗しようとしている君の唇が。

このまま続いてしまえばいいと思ってしまう俺の心が。

理性を片っ端から殺していくんだ。

でも? いつだって俺にトドメを刺すのは君なんだよね。俺の好意も、あの日のすれ違った心も、今でさえも? 多分俺が君に敵う日は来ないんだと思う。だってそうでしょう?

「?ね、がい?。」

「どうしたの?。」

「お願い? いっぱい、キスして? 涼介? / / /」

「っ?!」

そんな顔で、こんなタイミングで、そういう事を言ってしまうんだから。

「なるべく? 優しくはするよ。」

一度離れた唇をもう一度交わすと、彼女の口がほんの少しだけ開いた。さつきまで

俺の口の中で必死に動いていた舌がちよっぴり頭を出したのを感じる。それだけで、胸の中はいっぱいいっぱいだった。

本当に？ 幸せ者だなあ。

自分の唇越しに彼女の舌を甘噛みし、徐々に引つ張り出す。彼女も分かってくれたのか、最後はすんなり自分の方から来てくれた。静かな部屋の中で聞こえるのは彼女の甘い声と舌が絡まる音。何だか悪い事をしているみたいで背徳感を感じるけど、それが余計に今の状態に拍車をかける悪循環。

それでも止められなかった。

止めさせてはくれなかった。

舌を絡ませ、上顎を撫で、歯列をなぞる。熱を帯びてきた彼女の体温が伝わってくる。彼女が出す声に、きつと俺と同じようにいっぱいいっぱいなんだと思わされる。身体が強ばり、俺の手や服を握る力は強くなっていった。

もうどれだけこうしていたか分からない。止まっていた時間。溝。傷。それらを埋めるように、2人でひたすら求めあった。キスだけだったかもしれない。それでも、俺達にとっては何よりも大切な時間だった。

暫くして、俺からか、千歌からかは分からないが、お互いの唇は離れた。涙目で目をつぶり、時々震える彼女を見て折角帰ってきた俺の理性が再び旅行に行きそうになるの

をぐつと堪える。これ以上は本当に不味いもの。

正直俺も恥ずかしきで一杯なんだもの?!

「えと? ごめん? やり過ぎた。」

「はあーっ?! はあーっ?! んっ? いい、よ?? / / だって、りよーくんだもん? えへ♡」
「つ~~~~~~~~!!!!」

何だよこれ? 何でこんな一線越えましたみたいな感じになってんだよ??。本当に俺がここまですちやつたの? 見間違えとかじゃなくて??? 止めよ。現実逃避してもしようがない?。

「起きれる?」

「ごめ? ん?? 腰、抜けちやつて? / / /」

「そ、そつか! じゃあ手を貸す——千歌、梨子さんからメッセージ来てるよ?」

「ほえ?」

動けない彼女の代わりに携帯を取り、申し訳ないと思いつつも内容を一緒に確認する事に。えーつとなになに??

—カーテンぐらい閉めなさい (怒)

「????」

なるほどなるほど。つまり何処からかは分からないけど梨子さんにはさつきまでの光景を見られていたということだね。OK把握。

ふう~~~~~
?????

『ああああああああああっ!!!』

2人で部屋の中を転げ回ったのは言うまでもないよな?。

◇

「心配をおかけしました?。」

「大丈夫よ。多分こうなると思ってたし♪」

「まあお前ら似たもの同士だしな。」

「どういう事?」

「馬鹿つてことだよ♪」

美渡ねえが俺と千歌の頭をワシヤワシヤしてくる。似たもの同士と言うかバカ同

士って最早悪口の域では無いだろうか。いや？何にも言えないけどさ？。

「それじゃあ？そろそろ帰りますね。」

「本当に行つちやうの？まだここに居ても良いのよ？」

「ありがたい、志満ねえ。でも？母さんも帰ってきたし、ちゃんと帰る家があるならそっちの方がいいと思うんだ。ずっと一緒に暮らせなかつたしね？。」

「りよーくん？。」

「そんな顔しないでよ千歌。住む場所は変わるけど、もう昨日までとは違う？千歌の為にならいつだって飛んでくるよ。だから？また会おう♪」

「？うん。」

最愛の人に取り敢えずのさよならを告げて、美渡ねえが家まで送ってくれる事になった。車の中で『どんな手品を使った？』だの『昼間何してた？』だのやたらとからかわれたが、それも懐かしい感じがした。そうして家の前に着き、車を降りる。

それなのに、何故か美渡ねえは帰ろうとしない。それどころかニヤニヤしながらずっとこつちを見てるんだ。俺が何したってんだよクソう？！

「はあ？いいや。取り敢えず家に？？家に？？入れない。」

??そう、鍵が空いてなかった。

「は？え、ちよつ、えつ??何なのこれ。息子イジメ？鍵は——無い。何で?!」

いつも出掛ける時に鍵を隠していた場所からは鍵が無くなっていた。当然そうなる
ときき巢か何かを疑うだろう。普通だったらね。でもさ？扉の下に『涼介へ。』なんて書
かれた封筒が置いてある段階で、嫌な予感しかしないんだ。震える手でその封筒を掴
み、内容を1字1句しっかりと目に焼き付ける。

以下、内容はこうだ。

— 涼介へ。 —

アンタがこれを見てるって事は、上手くいっただらうね。つか、上手くいかなかった
らアンタの泊まる所無かったよ？

あつはつは!!

だって母さんもう海外戻ったし？仕事ある中帰ってきただけだし？そういう事だけ
ら、また向こうで父さんとよろしくする事にするよ。

アンタも志満ちゃんとの旅館でちゃうんと世話になるんだよ？千歌ちゃんと仲良
くしなね。じゃなきやシメる。

あ、それから？ウチの鍵、美渡ちゃんに渡しておいたから！後で美渡ちゃんから受け
取って、千歌ちゃんと遊ぶ時にでも使いな。じゃあまた来年ぐらいにね♡

「りよーくん? な、何で?」

「カッコつけて申し訳ありませんでした。滝沢 涼介? 今日から再びお世話になります?。」

「嘘? ホントに???'」

最っ高に恥ずかしかった。穴があつたら入った上に2度と出てこれないようマントルぐらいまで埋めて欲しいぐらいだ。でも?。」

「よ? よかつたあゝ?!」

泣きながら千歌がそう言ってくれる。

またこの人と一緒に過ごしていける。

それだけで、俺はこれから先何でも出来るような気がしたんだ。勿論1人じゃない? 今度は、一緒に。

2人で手を取り合ってちゃんと前を向いて、ね?



年上彼女に手を引かれ、今日も飛び出していく。ご丁寧に黒丸で塗り潰された言葉の意味をこの人が知る日は来るのか？それまで耐えられるのか。

頑張れよ、俺。

ずらっ！びぎっ！よはっ！（1／2）

「貴方は善子ちゃんを泣かせました。」

「はい？。」

「反省？してゐるずら？。」

「はい？。」

恋人の家。正座してゐる僕。

どういふ状況かつて？今この子達が言ってくれた通りだよ？。

赤毛のツインテール。明るい茶髪のロン毛。歳も同じ、善子とクラスも同じの2人の少女に、お説教されている最中でございます。

かたや、黒澤ルビイさん。ダイヤさんの妹である。

かたや、国木田花丸さん。善子の幼馴染みで、文学少女（千歌談）だ。

『どっちも小動物系で可愛らしい』と言っていた、これまた可愛らしい彼女さん？僕は、初めて貴方の言葉に疑問を抱いていますよ。

「煩惱あり、ずら。」

「いってえっ！！！！」

バシンツッ!という音と共に、俺の肩には平たい木の棒が振り下ろされた。ほら、あれだよ。座禅組む時に坊さんが叩いてくるやつ。あれ超痛えんだ。マジで。

『我々の業界ry』とか言う紳士達も居るが、生憎俺はMっ子では無いのだ。普通に痛い。曜姉ちゃんに渡されたのであろうサングラスをかけた2人の少女が、この場においては何よりも怖い。般若心経をヘドバンしながら唱えてきそうだもん。因みにあれは警策きやうさくって言うんだ。良い子のみんなは、覚えて帰ってくれよ?

まあ?なににせよ、だ。

「ん、これは中々?。」

「~~~~~♪」

「?そこの2人は何しに来たんですか。」

「保護者ですが?。」

「冷やかしく♪」

抹茶プリンを満足気に食べている大和撫子お姉様と、これまた俺達に目もくれずにダイビング雑誌を読み耽るグラマラスお姉様。

?何だこのメンツ。

ダイヤさんなら分かるよ?黒澤?って、どっちもか。ルビイさんの事を見に来たのであろうし。問題はもう1人だよ。これ程までに雑な冷やかしなど見た事ない。冷やか

すならもつとこつちを見て冷やかして欲しいものだ。おや？これではまるで俺がMっ
子じゃあないか。

「あははは！コバンザメ!!」

「どこで笑ってんの!?!」

「煩惱あり、ずら。」

「いでえっ!!!」

クツツ？負のスパイラル??誰か、2人の坊さんを止めてくれ?。

「?何してんの?」

おお?おおっ?!!!かつてここまでコイツが神々しく見えた事があっただろうか。何で
居るのか、とかはこの際どうでもいい?!救いを!救いの手を!!

「ヨハネ様あつ!!」

「??キモツ。」

「んだコラっ!」

「煩惱あり、です。」

「むあっ!?!」

救いの手は気の所為だったようだ。

そして叩き手が変わったらしい?いつの間にか、さつきまで俺の右肩を叩いていた国

木田さんは、ルビイさんに棒を手渡していたんだ。でもさ?俺、思うんだよね。

それ??頭叩くやつじゃねえから?。

「ダ、ダイヤさん?。」

「自業自得、ですわね。」

「果南ねえ?。」

「ん?私は奄美大島派かな。」

「何の話!。」

「はあ?千歌さんにいきなり来いって言われたり、何だつてのよ?。」

千歌に呼ばれた。

俺は、その事実を初めて知った。

あの1件以降、俺と善子はまだまともに会話をしていない。本当はちゃんと話して、何か言うべきだった。けど、俺には何を話したらいいのか分からない?勝手だと思う。普段通りを装ってるけど、善子だって目が泳いでる。

多分、同じなんだ。

俺達は?距離感が分からない。

あんなに居心地の良かった適正距離は——あつさりと無くなったんだ。

告白した人間と、振った人間。それが原因で、生まれた誤解。こいつの力を借りて、丸

く納まって生まれた現在いま?それが、これなんだ。

何も言わず、善子は俺から1番遠い、ダイヤさんの隣に座った。

『??。』

誰も?何も言わなくなった。

あれほど警策で叩きまくっていた2人ですら、静かになってしまった。

丸く納まったのは、俺とあの人?2人だけだ。別に、善子とどうこうしたいとか、こうなりたいとかそういう事じゃない。ただ?言わなくちやいけないんだ。

何かを、言わなくちや——。

「ねえ。」

いきなり発せられた声に、体がビクつく。

それは俺だけでなく、他の1年生3人も同じだった。

「ルビィ、それ貸して?」

「は、はい?。」

初めて見る、とでも言うかのように、先程までとは全然違うおどけた表情をして、彼女は警策を果南ねえに渡した。

??渡し、た?

「まどろっこしいっ!!」

「くあwせdrftgyふじこーp!!!」

バチン?バシン?そんな優しいものじゃあ無い。空を切り裂いた警策は、スパンツ!!と俺の背中を撃ち抜いた。

「わっ!見てダイヤっ!折れた!!」

「可愛らしいですが可愛らしくないですわね。」

「か——っ、ツ!!」

「あ?ごほんっ!いつまでウジウジしてんの涼介君!見てるこつちがイライラしてくるから、言いたいことがあるならしつかり言う!したい事があるならハッキリする!!私?昔っから言ってるよね?」

「あの?果南さ——。」

「良いから。」

転げ回る俺の痛みはお構い無しに、果南ねえは両手でしつかりと俺の頬を掴んだ。

「納得?してないんでしょ?思ってる事、あるんでしょ?なら、ビシツとする!馬鹿正直

で真つ直ぐなのが、君の良い所なんだから！」

「果南ねえ?。」

『行つておいで。』とでも言うように、果南ねえは優しい目でしつかりと視線を向けてきた。

馬鹿正直で、真つ直ぐに。

?どうもあの日以降、ダサさに磨きがかかっているらしい。結局、自分一人じゃ何も出来なかった。

いや?しなかった、のか。言うべきことなんて、分かつてたはずなのに。

「善子。」

「な、何よ?。」

「??:ゴメンつ!!」

ダイヤさんの隣に居る善子の元へ行き、深深と土下座をした。

「本当は、もつと早く言うべきだった。お前を傷つけるだけ傷つけて、お前一人で背負い込ませて? たつた一人苦しませて? それで俺だけ幸せに、だなんて、虫が良すぎる話だ。お前が居てくれなかったら、きつところはならなかった。お前が居てくれたから、今があるんだ。本当にゴメン??。」

「? 私は?別に、アンタにそう言わせる為にやったんじゃない——。」

「でもっ!!」

「っ?。」

「??ありがとう。」

床で固く握りしめた拳に、冷たいものが落ちた。

言えなかつた事。振つておいて『ありがとう』なんて、言うのが怖かつた。気まぜく謝る言葉は幾らでも出るのに、感謝の言葉は果南ねえに発破をかけられてようやく出せた。本当に?情けない?。

「ぶっ?。」

「へ?」

「あはははっ!何泣いてんのよ!!」

「う、うるせえっ!こっちだつて怖かつたし分かんなかつたんだよ!!」

「やーい、泣き虫小僧ー!」

「んだとこの?沼津在住っ!」

「悪口下手かつ!」

その時、俺とダイヤさんの携帯からメッセージアプリの通知音になる。

「失礼?ふふっ。」

「お姉ちゃん?」

ダイヤさんは、口元に手を当てて静かに微笑んだ。何やらメッセージを打ち込み、俺と、善子と、ルビイちゃんや花丸ちゃんを見て、口を開く。

「まあ？折角一年生が4人もいるのですから、皆で出掛けてきたらどうですか？」

『え？』

「ああ、良いねそれ。そつちのが早そうだよ」

何故このタイミングなのか。何故急にそんな事を言ったのか。頭を捻りながら、携帯のメッセージに目を通す。

相手は千歌だった。

ここにいるメンツを呼ぶだけ呼んで、未だ姿を見せない張本人。そんな彼女からのメッセージに——胸きゅんした。

『？帰ってきたら、いっぱい遊んでね？』

お馴染みの部屋着にふわっふわのイセエビぬいぐるみを

抱えたまま枕に顔を埋めている姿が目には浮かぶようだ。はあ~~~~~

~~~~~  
 ？？？あの人はどう？本当にもうっ!!きやわたんっ!!

まあでも？真面目な話、きつとダイヤさんや果南ねえを呼んだのも？善子を呼んだの



も。全部彼女なりの考えだったのかもしれない。

「お2人の許しがあれば、ご一緒させて下さい。」

「ルビイ達は?その?。」

「??善子ちゃんは?」

「別にいいわよ。馬鹿が混じるくらい。」

「なら大丈夫ずら。」

「えっ?本当に?」

「ここで嘘をついてもしょうが無いよ。オラは国木田 花丸。」

「く、黒澤ルビイ?です?。」

「えっと?じゃ、じゃあよろしく、2人共。あ、そうだ!ちょっとだけ待っててくれ!」

「良いけど?。」

3人の了承を得た上で、一旦俺は部屋を後にした。やっぱ挨拶は大事だもんな、うん  
うん。

『ぶぶぶっ?!』

1分もしない内に戻ってきた俺の顔を見て、果南ねえとダイヤさんは嘖き出していた。

そうだな。ああそうだろうな！右頬についた紅葉を見たら誰だつてこうなるだろうさ!!

行つてきますつて？しに行つただけなんだけどなあ??。

「また派手にやられたわね?。」

「ううつ?背中もほっぺも心も痛い??グスツ。」

「あははははっ!!」

「さあ?こっちは引き受けましたから、4人で遊んでらっしゃい?」

「うん?。」

「あつははははは!!ひーっ、ひーっ!!ゲツホゲホツ!!」

「果南ねえ笑いすぎだつーの!!」

1人馬鹿笑いしてる幼馴染みは放っておきましょう。さつきまで感謝してたのに?カッコ良く見えていたのにつ?!

「それじゃあ、行くぞら。」

「えっ、あ、はいっ。」

立ち上がった国木田さんは、俺の方を一瞥した後に部屋を出ていった。ルビイさんも

どこか怯えた表情のまま、国木田さんの後について行く。

「ねえ。」

「ん?何だあつふん!」

振り向いた俺を待つていたのは、額への軽いグーパンだった。今日はとことん変な声が出てくる日だが、そんな事よりも笑ってる墮天使の方が衝撃的過ぎて動けなかった。

してやったと言わんばかりのヘラヘラした顔で、善子は立ち上がった。

「今回の件はこれで終わり。変な貸し借りだとか罪悪感なんて、こつちから願ひ下げよ。」

「善子?。」

「ヨハネだつて言つてんでしようが。主の名前もちゃんと言えないようじゃ、アンタには泣き虫リトルデーモンぐらいがお似合いよ。ばーか。」

それだけ捨て台詞のように吐き捨て、善子も2人の後に続いて部屋を出ていった。

「?なんだよ?。」

そんな文句を垂れながら、ようやく俺も部屋を後にする。

ほんの少し、スッキリした心持ちで。

「馬鹿正直も考えものだねえ。ところで？あの子にはなんて？」

「？こんな感じですかね。」

「ん〜？ぷっ?!あっははは!!」

「そんなに可笑しいですか？」

「いやあ、ダイヤにしては可愛いらしいなって思っでね〜♪それじゃ？隣でお姫様と

『がーるずとーく』でもやりますか！」

「ふふっ？ですな。」



さあさあやつて来ました沼津市内！

スクールアイドル3人に男は俺1人！ただでさえあんなに可愛らしい彼女さんが居るのに傍から見ればハーレムに近い状態だから、友人達に見られでもしたら俺の首が飛ぶこと間違いなしの光景だ！あっはっはっは!!

「でね、その時曜さんが——。」

「リリーもそんなこと言ってたわ。」

「皆大変ずらく?。」

俺要らなくない?

うん? そりや薄々予想はしてたよ。だつて国木田さんの俺を見る目? あれ、本気で嫌つてる目だもの。親友を傷付けられて大変ご立腹なさつている様子ですもの。ルビイさんにしても、明らかに距離を置いてるし? たまにこちらを伺つては眼が会う度に困惑した表情をしているし?。存在を認知されないのがこれ程までに切ないものだとは。

「あ の?。」

『???』

? ほうら。

「あ のつ。」

「何?。」

ほうらつ。

「いや、その?ど、どこに行くのかな?つて?。」

「ついてくれば分かる事をいちいち聞かないで欲しいすら。」

ほらあつ!!

「何突つかかつてんのよ、ずら丸。」

「別に? どういう人なのか分からないのに最初から親しく出来るほどオラは出来てないよ。普通の事ずら。」

「普通、ねえ? 意地張つてるだけじゃないの?」

「逆に聞くけど、どうして善子ちゃんはある事があった後でこの人の近くに居れるの?」

「普通の事だから。」

「そんなの普通じゃないよ。」

「それを決めるのはアンタじゃ無いと思うけど?」

「善子ちゃんでも無いすら。昔に何があつたのかは知らないけど、いつまでも過去に拘つてると前が見えなくなるよ。」

「ご忠告感謝しとくわ。アンタもいい加減本から顔を上げなきや、頭まで夢物語になるって教えといてあげる。」

「ふ、2人共つ??喧嘩は?あの??。」

?気まずい。

ルビイさんがこんなにもオロオロしてるといふ事は、きつと本来の2人はこんな事を言い合ったりする仲では無いのだろう。今となつては、一触即発のバチバチムードだ。お互いが小さく毒づいてる事なんて目に見えて明らかだし、何より空気が重い?。

全部、俺が引き起こした誤解で生まれてしまった事。チクチクとした胸の痛みが、涙腺という名のダムを決壊させそうだ。

泣く資格は?無いんだけれど?。

「?先、行くね。」

「花丸ちゃんっ!」

そう言い残し、国木田さんは先を歩いて行つた。

俺の方を一瞥し、何を言うわけでも無く、ただただ静かに。

「よ、善子ちゃん?あのね!花丸ちゃんは、善子ちゃんの事考えて——」

「知ってる。」

「っ。」

「だから意地張つてるって言つてんのよ?バカ花丸。」

後ろからは、善子の表情は見えない。

それでも?握られた右手は、固い拳を作り出していた。

「ルビイ。」

「な、何??」

「その泣き虫、相手してくんない?」

「えっ? ええっ!?!」

「じゃ。」

「おい、善子っ!?!」

なんてこった? 唯一この空間、このメンバーで会話が成り立っていた善子まで先を行ってしまった。

ルビイさんはゆっくりとこちらを振り向くが、その表情には怯えと不安しか感じられない。ましてや仲のいい友人が喧嘩まで始め、その原因となった人間と一緒に居るのだ。彼女も、パンクしそうなのだろう? どうしたらいいか分からないといった感じで距離を置き、再び視線を下へと落としていた。

罪悪感で押し潰されそうだ? 罪悪感で??。

「グスツ?。」

「えっ?」

「ルビイさん? ごめんなさいい??!」

「ええっ!?! な、何で泣いてるのお!?!」

「だっでえっ??!」



「あの、な、泣かないでよお?泣かれると?ルビイまで、泣いちやうっ?からあ?!」  
それから?取り残された俺達は、お互いに鼻を嚙りながら『ごめんなさい』を言い合っ  
ていた。

この時は予想もしていなかったんだ。

波乱で幕を上げたこのお出かけの結末が、『予定調和』だった事に――。

# 生誕祭

ちかたん！　　普通怪獣に花束を??

大きな旅館のとある部屋の前。

カチカチと動く腕時計の秒針をカウントダウン？今の俺はひと味違うぜ？なんて  
たつて愛しのSweet Honeyの誕生日直前だからな?!

さあ5秒前だ??4?3?2?1?!!

「千歌っ!!誕生日おめでふわぁっおっ??!!??」

「ノックしろおっ!!／／」

「すみませんでしたっふんだっ!!」

飛んできた枕は一味違う俺の顔を直撃。廊下へと叩き出された俺はすぐさま襖を  
閉め、今見たものを忘れるように努力した。

だってまさか、生まれた日にほぼ生まれたままの下着姿を見てしまったらそうなるだ  
ろう。

大丈夫さ？俺なら忘れられる？出来るよ、出来る。

うん。

うん?無理ぽ。

「ねえ。」

「ひいつ?」

「何回目?ねえ、千歌ノックしてって何回言えばいいの?」

「(ごごご)めんなさいっ!」

僅かに開いた隙間から伸びる手は、ギリギリと俺の肩を掴んでは離さない。

「3回目はさあ?無いって言ったよね?」

「い、言いました?。」

「こつち見て言ってくれる?」

「すみませんッ!言いましひいいいいいつ?!!?」

隙間から覗き見える赤い瞳に光は無かった。しっかりと開き切った眼と『無』一択の

真顔でこつちを見ている。

これあれだわ。『本気でおこ( #、? )だよ!』状態だ。 t o b e c o n t

i n u e??でエンディング始まるヤツだわ。

おつかねえよおおおつ??!!

「ねえ。何回言えばいいの？逆に何回言えば覚えてくれるの？」

「き、今日はたまたまと言いますか？」

『今日は？』『たまたま？へえ？3回目の確信犯じゃなくて？』

うおおおおおつ!!肩に!肩に指がめり込んできてるッ!!もげるもげるもげるっ!!

「ほ、本当に違うからっ!ねっ!!」

「じゃあ何？」

「あの?だって?ち、千歌の誕生日を1番に祝いたかったからっ!!」

しばしの沈黙。

こちらを見つめたままゆっくりと襖を閉めていく千歌は、最後まで無の悟りを開いたままストーンと音を立てた。果たして俺は許されたのか、呆れられたのか。

同じくらしいの隙間で再び襖が開いた時、そこに居たのは別人だった。

「?なら?良いけど?/?/?」

はあゝ可愛い。

何ですかその窄めた口にそっぽを向いたつつけんどんな表情は。少々可愛いが過ぎやしませんか。オマケに何ですかその真っ赤なお耳は。見せてるんですか?そうな

んですか? 恥ずかしさ堪えきれなくなつて徐々にニヤけていつてるの気付いてるんですか?

あ~~~~~もう?!

好き。結婚しよ。

「でもね、りよーくん?。」

「何ですか Sweet Honey?」

「おめでとうは2番目だったよ。」

「ガツデエムツ!!」

床に手を付いた俺の目からは涙がボタボタと落ちていった。

畜生? 誰だ。1番を? 初めてを奪つた奴は一体何処のどいつ——!

「因みに1番目は曜ちゃん。」

「ヨオオオオオオソロオオオアアアアツツ!!」

「ええ? そんなに泣き叫ばなくても?。」

「クソウ?! これから会う度に『え? 1番先に言わなかったの? あ、私か!!』とか、『毎年私が1番だったからごめんね〜! ヨーソロロロ!!』とか、『ところで執事服着てみない?』とか言われるんだあつ?!」

「最後のは関係無いような? というか曜ちゃんそんな鳴き声じゃないからね!?! いや鳴き

声とか無いけども!!」

こういう時の曜姉ちゃんの行動力は半端じゃあない。だが何故だ?俺はカウントダウンと同時に部屋に入ったんだぞ?幾ら携帯での送信が早いと言ったってそんな事有り得るのか?

そんなの誰かが時間を操作しない限り??操、作??

『腕時計?何か時間遅れてるような??まあいつか。明日直そ。』

「まあいつかああああああっ!!!」

「うわあっ?!え、何?!りょーくん何かおかしいよ!」

「千歌あ?。」

「うーん?何が何だかさっぱりちかちかーだけど?私は、りょーくんがそれだけ思ってた事か?とっても嬉しいよ?だから泣かないの!ね?♪」

「うう?はい?。」

「よし!じゃあそろそろ寝よつか!一緒に寝よ〜!」

手を引つ張つてくれる千歌は、そのまま自分の布団へと入っていった。ここにとやわんぱかりに隣をポンポンとしている光景も、もう何度見た事だろう?布団に入っ

もの様に抱きつかれて彼女は眠るのだ。

でも今日は? 今日だけは、違ってもいいんじゃないか。

一番最初におめでとうは言えなかったけれど、出来ることなら? ある。

「りよーくん、ギューっ!」

「ん。」

「はえ?」

「その?今日は、俺が?ギユツとするよ。」

年上の彼女をギユツとした途端に、ふわもち感触が胸の中へすつぽりと収まった。恥ずかしさはまだあったけれど何より身長差が織り成すマリアージュとこの不思議な感覚が瞼を重くしていく。

何故この人が寝る度に俺に抱きつくのか?少し分かった気がする??。

「千歌?おめで?と??お休、み??。」

胸の辺りがキュツと掴まれた気がしたけれど、睡魔に抗えなかった俺はそのまま微睡みの中へと落ちていった。

「??ぜ?全然??寝れない?／／／」



朝、双丘の中で目が覚めた。

それはもう？ご立派な。

いつの間に立場が逆になったのか、結局いつも通りハグられたまま朝を迎えた俺は Sweet Honey が起きるまで身動き一つ取れない、悶々とした時間を過ごす事に。

今日は誕生日という事もあり、千歌と2人で朝から出掛けることにしていた。勿論プレゼントは用意しているけれど、それと同時に行きたい場所もあったんだ。彼女の誕生日がある、この月だからこそ行きたかった場所？千歌と一緒に見たかった景色が。

髪を後ろで纏め、青地のワンピースに『%』<sup>ぱいすち</sup>という普段よりも少し特別なお出掛けスタイルに、これまたいつも通り悩殺されそうになったが、今日は一々ダメージを受けていられない。

バスに乗って、俺達は目的地まで17号線を下って行く。沼津の方は良く訪れるものの、南伊豆の方まではあまり行かない俺には普段見ている海や自然の景色は普段と違っ



て見えた。

それは彼女も同じのようで、窓の外を見てはまるで子供のようにはしゃいでいる。

ただ? 繋がったままの手に俺がどれだけ緊張しているのか、この人は多分分かっていないだろう? そう考えたら何だか可笑しくて。『どうかした?』なんてキョトンとしたその顔に、『何でもない』って嘯うそぶいて。

ただ? 黙って、握る手にちよっぴり力を込めたんだ。

気付くか気付かないか? 本当にその程度。

千歌は、笑いながらもつと強く握ってくれた。

それだけで、嬉しさが胸を一杯に満たしてくれる。

空いてる手で、鞆の中の小包にそつと触れた。

「わあっ?! 見て見てりょーくん! ひまわりっ!!」

「ああ? 綺麗だね。」

やって来たのは南伊豆のひまわり畑。視界を埋めつくすおよそ3万本にも及ぶ太陽の花は、風になびかれてはキラキラと輝いていた。

その中ではしゃぐ千歌もまた、キラキラとしていて――。

「本当に?? 綺麗だよ。」

別にそうしたかったわけじゃない。ただ、気付いたら俺は千歌の所へ歩いて、その手を掴んでいた。

くつと引き寄せ、彼女に近付いた。

千歌の顔が赤くなっているのを見て、そこでようやく、自分がこの人にキスをしたんだって？ 気付いたんだ。

恥ずかしそうに俯いた彼女が愛おしくて、手を離したくなかったけれど？ 俺は、鞆の中の小包を彼女にそつと手渡すことにした。

「千歌？ これ。」

「？ うん。ありがとう。開けてもいい？」

コクリと頷いた俺に微笑んだ彼女は小包を開けた。用意したのは向日葵の髪留めと、白紙のアルバム。

「これは？」

「その？ 俺の願望みたいで申し訳ないんだけど、さ。これから？ 沢山の写真でそれを埋めていきたいなって？ 思ってた？ 俺と、千歌の2人で。」

「りよーくん？ ありがとうね。本当に？ ありがとう。」

両手でアルバムを抱きしめた千歌は、眩しいくらいに笑顔で笑っていた。心臓が張り

裂けそうなくらい、その笑顔に夢中な自分が居て?どれだけこの人に弱いんだって、少し笑ってしまおう。

向日葵の髪留めを付けてくれた彼女は、『似合う?』って聞きながらクルクル回ったりした。『髪留めだから回る必要は無いんじゃない?』って笑いそうだったけど、この人が全身で喜びを表す人だって思い出した途端に何だか気恥ずかしくなった。

だから――。

「凄く、似合ってるよ。」

きつと、その一言で伝わるんだ。

アルバムを持ったまま後ろに手を組み、こちらへ笑いかける彼女に、俺は持つてきていたチエキを構えた。

――  
サンシャイン  
太陽の輝き。

少しだけ?さつきとは違う風が吹き、周りの向日葵達が彼女の方を向いていた気がした。自分を普通だという彼女は、自分がどれだけキラキラしていて、優しく、暖かい光なのか気付いていないかもしれない。

出てきた写真の向こうで、彼女の笑顔は他の何よりも眩しかった。

「アルバムの一枚目だね！」

「ああ？ そうだね。千歌が良ければ、だけどさ。」

「嫌、なんて言わないよ。」

「助かるよ。ねえ千歌？ 向日葵の花言葉って知ってる？」

「ううん、分かんない。」

『教えて？』と言わんばかりに、こちらへほほ笑みかける彼女に気恥しさを覚えながらも、俺は彼女に話した。

『『憧れ』。『貴方だけを見つめる』。千歌は？ いつだって俺の憧れだった。懸命に色んな事を考えて、周りを笑顔にして、頑張りすぎる事もあるけどそれを力に変えられて。俺は、そんな千歌だからずっと見てこれた。そばに居たいと思った。』

「??:うん。」

「千歌？ これからも、そばに居ていいかな。」

「ふふっ？ さつきも言ったよ？ 嫌なんて言わないって。」

口元に手を当て、クスリと笑う彼女。つられてこっちも笑ってしまう。

「そういえばそうだ。じゃあ？ よろしくね、千歌。」

「うん。よろしく、涼介。」

手を繋ぎ、チエキを空高く掲げる。

こちらにレンズを向ければ、隣で彼女が飛びついてくる。

——きつとブレブレだな。

そんな事を思いながら、俺達は2枚目の写真が出てくるのを笑いながら待った。眩い輝きと、溢れんばかりの幸せの中で——。

「??無いな。」

「何してんの泣き虫小僧？襖なんか見ちやって。」

「美渡ねえ？人格入れ替えるスイッチ知らない？」

「はあ??」